

中日両言語における  
主題の省略・顕現についての対照研究

平成 18 年 度

張 松 琳

中日両言語における  
主題の省略・顕現についての対照研究

三重大学大学院 教育学研究科  
教科教育専攻 国語教育専修  
205M013 張松琳

# 目 次

はじめに	1
第1章 主題と省略の基本的性格の概要	3
第1節 主題の定義と主題形式	3
1-1-1 主題の定義	3
1-1-2 主題形式	4
第2節 省略の定義と省略の要素及び方式	6
1-2-1 省略の定義	6
1-2-2 省略の要素及び方式	9
第2章 日本語における主題の省略及び顕現	15
第1節 連続文における後続文の主題の省略	15
2-1-1 先行研究について	15
2-1-2 容認度(省略の自然さ)から見た省略	19
第2節 連続文における後続文の主題の顕現	23
2-2-1 先行研究について	23
2-2-2 主題の顕現の条件	25
第3章 翻訳作品における主題の省略及び顕現の対照分析	27
第1節 データと分析方法	27
3-1-1 データの作成	27
3-1-2 分析方法	28
第2節 日中対訳小説における主題の省略及び顕現の対応性	29
3-2-1 日本語では主題が省略される場合	30
3-2-2 日本語では主題が顕現される場合	36
第3節 中日対訳小説における主題の省略及び顕現の対応性	43
3-3-1 中国語では主題が省略される場合	44
3-3-2 中国語では主題が顕現される場合	45
3-3-3 中国語では1つの複文となる場合	52

3-3-4	中国語では2文目が多数文となる場合	54
第4節	翻訳文が訳者間で一致しないもの	56
3-4-1	日本語では主題が省略される場合	56
3-4-2	日本語では主題が顕現される場合	58
第5節	まとめ	59
3-5-1	日中対訳例文から見た両言語間の共通点及び相違点	59
3-5-2	中日対訳例文から見た両言語間の共通点及び相違点	61

おわりに	64
------	----

【謝辞】	66
------	----

【注】	66
-----	----

【引用文献】	67
--------	----

【参考文献】	67
--------	----

【資料用例の出典】	68
-----------	----

【資料(1)】	69
---------	----

【資料(2)】	84
---------	----

## 要 旨

言語学用語としての「省略」はあらゆる言語に見られる普遍的な現象である。文章においては必要な情報を出来る限り明示し、曖昧さを排除して論理的な関係を明らかにすることが義務付けられている。一方、多くの場合、省略は復元可能なものは出来る限り省略して重複や煩わしさ（冗長度）を避ける言葉の経済性という消極的な観点からのみ扱いがちである。そこで、どのような条件や規則に基づいて文の要素が省略され、また省略されないのかを知ることが出来れば文章を理解する上での基軸になると考えた。本研究では文章の中で起こる主題の省略及び顕現という現象に焦点を当てて、2つの連続した文に限って日中対訳小説(原文：日本語／訳文：中国語)と中日対訳小説(原文：中国語／訳文：日本語)を用いて、両言語における主題の省略及び顕現の対応性を調べた。なお、より適切な用例に基づいた分析及び主題の省略に関する考察の範囲を明確にするため、まず第1章においては中日両言語における主題と省略の定義とそれらの性格を概観した。ここで明らかになったことは、日本語についての主題の省略及び顕現に関する先行研究は数多くあるが、それに対応する中国語との比較対照研究(原文／対訳文)は殆どなされていないということであった。そこで、第2章では日本語に関する今までの先行研究を整理し、続く第3章では、第2章で明らかになった主題の省略及び顕現の条件や規則性などが中国語にまで敷衍できるか否かを日中(中日)対訳小説例文を用いて考察した。その結果、本研究で分析に使用した対訳例文に限って見ると、主題の省略及び顕現について両言語は共通するところが多く見られたが、しかし、一方幾つかの明確な相違点も認められた。その一つが、時間的な前後関係が存在するとき、日本語では2文目の主題が省略されるが、中国語ではむしろ顕現されることの方が一般的である。また、後文が既に談話(前文)に現われた指示物に関する新たな情報を与える文のとき、中国語では主題を省略することができるが、日本語の場合は逆に顕現されるようである。さらに、中国語では2文目の主題についての解説が特に強調されるときに主題が顕現されるが、日本語ではこのときも省略される。

## はじめに

文章における省略は何に基づいて起こるのだろうか。久野(1978)は「脈絡から切り離された一つの省略文で、主語、目的語、補語などが省略される場合、統語論的にどのような必須要素が欠けているかは述語から分かるが、具体的にそこにどのような語を補えばよいのかは、省略文を文脈の中に戻さなければ分からない。つまり、省略は脈絡から欠けた語を補える限り可能となる」と指摘している。しかし、文章の中で起こる主題の省略という現象に注目し、文と文との接続という観点から、その働き観察してみると、単に復元可能であるから省略されるという消極的な働きだけではなく、以下の日本語小説『吾輩は猫である』の冒頭部の連続文を見て分かるが、主題の省略が単線的に配列されている句(複数)に繋がりを付け、文にまとまりを与えているという働きなどにも見られる。また、日本語とそれに対応する中国語訳文を比較して見ると、非常に類似した文法機能を持っているようである。しかし、波線(\_\_\_\_)で示すところに、両言語間における違いが見られる。そこで、両言語は各自の主題の省略及び顕現の様相がどのような文法的性格を持ち、どのような役割を分担しているのか、また、両言語は一体どこが類似し、どこが異なるのかといった疑問を持ち、それらについて詳しく調べて見たいと考えた。またさらに、日本語は主題の省略及び顕現に関する先行研究は数多くあるが、それと中国語との対応関係についての研究は殆どなされていないようである。そこで、両言語における主題の省略及び顕現を少しでも明らかに出来れば、中国語を母国語とする日本語学習者にとって省略の多い日本語の習得に役立つのみならず、日本語を母国語とする中国語学習者にとっても大変有用であると考えられる。

(アンダーライン「\_\_」は文の主題、「 $\Phi$ 」は略題記号、「( )」は省略された主題)

吾輩は猫である。 $\Phi$ (吾輩は) 名前はまだ無い。

$\Phi$ (吾輩は) どこで生れたかほとんど見当がつかぬ。 $\Phi$ (吾輩は) 何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食うという話である。しかし $\Phi$ (吾輩は) その当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。 $\Phi$ (吾輩は) ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。

『吾』

咱家是猫。 $\Phi$ (咱家) 名字嘛……还没有。

$\Phi$ (咱家) 哪里出生? 压根儿就搞不清! $\Phi$ (咱家) 只恍惚记得好像在一个阴湿的地方咪咪叫。在那儿, 咱家第一次看见了人。而且后来听说, 他是一名寄人篱下的穷学生,属于人类中最残暴的一伙。相传这名学生常常逮住我们炖肉吃。不过当时, 咱家还不懂事。 $\Phi$ (咱家) 倒也没觉得怎么可怕。 $\Phi$ (咱家) 只是被他嗖的一下子高高举起, 总觉得有点六

神无主。

《我》①

本研究では日本語の主題の省略及び顕現について、これまでの研究者が解明した成果を整理し、そこで、明らかになった主題の省略及び顕現の条件や規則性などが中国語にまで敷衍できるか否かを日中（中日）対訳小説例文を用いて考察しようと考えた。対訳例文は2つの文が連続するものに限って、日本の文学作品(『吾輩は猫である』)と中国の有名な短篇小説集(《呐喊》)から採集したものである。また、より深く考察するため、用例を分類する方法として、小川(1989, 1991)の「主語の省略に関する日中対照研究」で取り上げた類別方式を参考にした。彼は「日本語も中国語も省略しないもの」、「日本語も中国語も省略するもの」、「日本語は省略しないが、中国語は省略するもの」、「日本語は省略するが、中国語は省略しないもの」の4つに分けて考察した。しかし、この研究は「省略する」と「省略しない」のいわゆる二者択一的な二元論でまとめられており、かなり無理があるように思われる。なぜなら実際に用例を採集し、それを「省略する」、「省略しない」の2つのみに分類することは、かなりの困難が伴うと思われるからである。むしろ、「どちらもある＝両方ある」も設けて3つに分類、すなわち三元論のほうが、より実態に即し、自然な分類であると思われるからである。従って、その分類に基づいて、両言語の主題の省略及び顕現にどのような傾向の共通点と相違点があるかを考察してみたい。

## 第1章 主題と省略の基本的性格の概要

本稿において研究対象とする主題の省略及び顕現について考察を行う前に、まず、中日両言語における主題と省略の定義とそれらの性格を知る必要があると思う。それは主題と省略に関する考察の範囲を明確にすると共に、中日比較対照において、より適切な用例に基づいた分析を可能にするからである。

### 第1節 主題の定義と主題形式

この節において、日中の主題がどのような場合に取り扱われているかを概観してみたいと思う。

#### 1-1-1 主題の定義

「主題」という用語は主語の定義に当たってしばしば用いられてきた。しかし、「主題」は使用された領域によって、異なる意味を持っているようである。日本語主題論において、山口・秋本(2001)は『日本語文法大辞典』で「主題は Thema の訳語であり、芸術に関する述語であったものが、言語表現についても用いられるようになった」と述べている。そうして、具体的に、次の3つの意味から説明を行っている。

- ①文章論で、文章の中心的な題材。文章は、話し手が、何かの題材について、何かの意図を、聞き手に対して表現する、完結した統一体であるとした場合の題材。主題は、段落によって展開され、意図に集中するという。
- ②国語教育で、作者や話し手が、その文章や作品を通して表現しようとする中心的な思想。国語教育では文芸作品に限って用い、それ以外の文章では「要旨」を用いる。主題を文の形で表現したものを「主題文」という。
- ③文論で、その文が何について述べられたものかを係助詞「は」を添えて文頭に示したもの。

(『日本語文法大辞典』明治書店 p 342)

『日本語文法大辞典』から分かるように、①の主題は文章の中心的な題材として扱われているが、②の場合は、全体文章の中心思想であると言えるようである。また、③では、主題をその文で述べたいことの範囲(対象)を限定したものとして説明され、それに、係助詞「は」を供って、「主題」を表わすようである。一方、望月(1986)は中国語文法研究において、①のような主題を「言談主題」(話の内容と言葉遣いの主題)、③のような主題を「句子主題」(文の主題)と述べている。



主題可分为两种,一种是仅限于一句句子中的话题(句子主题),一种是某一完整的言谈整体的主题(言谈主题)。

(訳) 主題は2つに分けられる。一つは1文中の話題に限られる(文の主題)。もう一つは完結した談話の統一体であるとした場合の主題である(話の内容と言葉遣いの主題)。

従って、文における主題を文の陳述の対象、即ち、Xに関して何かを述べる文におけるX、と規定するならば、主題という概念は言語普遍的な概念足り得るものであると言える。

### 1-1-2 主題形式

日本語文法研究において、主題を文の構造の根幹として様々な研究が数多く行われている。最近の論文では益岡(1995)、庵(2004, 2005)が代表的なものとされている。特に、益岡は「ある対象が有する特徴や性質を表す“属性叙述文注①”は、どの言語においても主題・解説構造を基本的に組み立てられると見て差し支えない」と述べている。日本語の主題を表す代表的な形式は、言うまでもなく、「～は」という形式である。主題を表わす「～は」という形式は、対象の属性を表現する“属性叙述文”だけではなく、事象の生起、存在を表現する“事象叙述文注②”にも現れるようである。また、主題は係助詞「は」のみを従えるだけではなく、その他にも、「～も」、「～でも」、「～なら」なども可能である。さらに、主題は語順と音声(ポーズ)によって表わされると考えられる。従って、日本語においては、主題は比較的弁別しやすいようである。一方、中国語の場合は形態的特徴が乏しく、主題を表わす手段としては、語順と音声(ポーズ)しか考えられないようである。そのため、主題の認定がより困難である。ここで、中国語における主題の形式について先行研究を参考にしてまとめてみたい。

1968年に趙元任は「主語が主題であるとする論」を発表している。趙元任は直接構成素分析の方法を適用して文は二つの構成素、すなわち主語と述語から直接構成されるとし、その文法的意味が主題であると説明した。中国語の文における主語と述語の文法的意味は動作者と動作というよりは主題と説明である。動作者と動作は主題と説明の中の一つの特殊なケースとされ、すべて文頭に現れた体言句は場所語や時間語も含めて主題を言うと言われる。また、文頭に2つの体言句が並ぶ場合も総主語(文全体の主語)とそれに組み合う主述構造述語句の主語ということになる。しかし、趙元任は「主題と説明」を全ての文に当てはまる解釈として提出したが、それは必然的に構文論の問題となり、語義から「動作者—動作」というのとは異なるレベルのものであることに、その時はまだ明確に気付いていなかったようである。70年代に入ると趙元任にあつては、主語の性質を説明する語であった「主題」が、「主語」とは区別されて別にある成分とされる

ようになる。また、趙元任の影響を強く受けた《現代漢語語法講話》では次のように述べている。

主語は述語に対して言えば、時には動作主(原文は“旋事”)であり、時には対象物(原文は“受事”)であり、また時には動作主でもなく対象物でもなく、単に述語の陳述の対象に過ぎない場合もある。(p 29)

さらに、現代中国語での代表的中国語学者・朱德熙は《語法講義》で次のように述べている。

主題は陳述の対象、すなわち話し手が言及しようとする話題である。述語は、主題に対する陳述、すなわち主題がどうするか、どのようなか、或いは何であるかを説明しているのである。(p 17)

以上、3者の説は何れも主語と主題の並存を認めないものである。また、比較的多くの論者にあつては、前者は構文論のレベル、後者は文脈から「主題」が制御されるという「語用論」のレベルの問題であるとされている。

またさらに、最近の研究では、石(2001)が主要な点を整理して論じているのに沿って、主語と主題の違いとされるべきところを次の4点にまとめて示している。

- ①その文の「焦点」となり得るか否か
- ②「焦点」の問題を疑問代名詞に置き換えられるかどうか
- ③文中の位置の違い
- ④意味の面から見た違い

①において、中国語の動詞「是」はその焦点を示す標識と成りうるが、「主語」には付いても「主題」に付けることはできない。つまり、一般的に、「主題」は「有定」(固定)の古い情報(既知)を提示するものであるのに対し、「焦点」はその文で話者が伝えたいと思う最も重要な新しい情報(未知)を乗せている箇所であるようである。語義から言って両者は互いに相容れない対立を見せる。次に②において、「主語」は「焦点」の問題を疑問代名詞に置き換えて特殊疑問文を作ることができるが、「主題」ではそれが出来ないことである。疑問代名詞自体が焦点(新情報)を指すという特性を持っている。③において、「主語」は構文成分であり、文と文の中の文—文中に嵌めこまれた文という二つのレベルのどちらにも置くことができるが、「主題」は独立した文のレベルでだけで用いられて、文中に嵌めこまれた文では用いることが出来ないということである。最後に④において、意味の面から言うと「主語」は行為動作の動作者(施事)あるいは性質

状態の主体を言うものであるが、「主題」は「有定」(固定)の事物を示すものであるということである。また、両方とも述語の前に置かれるので、その区別を示す標識としては、「主題」の後には休止が入られたり、あるいは語気詞が付加されること。さらに代名詞などで再度指示されることがあることなどが挙げられる。

以上、石論文が挙げた主語と主題の違いを踏まえると、中国語の主題は次のような4つの構文の特徴を持っていると考えられる。

- ①動詞「是」が付かない。
- ②「焦点」の問題を疑問代名詞に置き換えられない。
- ③一般的によく文頭に生起する。
- ④「定である名詞」、休止符( , )が入ったり語気詞が付加されたり、あるいは代名詞などで再度提示される。

## 第2節 省略の定義と省略の要素及び方式

「省略」とは何か。訓読みすれば「省き略す」となるが、何を省き、どう略すのか。言語表現に限って考えたとしても、省略という行為の対象なり現象の主体なりを正確に説明するのは、さほど簡単ではないようである。本稿では中日両言語における主題の省略についてより深く対照研究を行うために、両言語における省略の定義と省略の要素及び方式について概観する必要もあると思われる。

### 1-2-1 省略の定義

省略を広く見ると、中村(1991)の『日本語レトリック体系』は省略法について言葉を省略するレトリックの総称として扱っている。その中では以下のように省略法を細分化している。

語頭音消失：「アルバイト」が「バイト」になるような、言葉の最初の部分の省略

語尾音消失：「テレビジョン」が「テレビ」になるような、言葉の最後の部分の省略

語中音消失：「パトロールカー」が「パトカー」になるような言葉の途中の部分の省略

脱落：リズムなどの都合で行われる、助動詞などの省略

主辞内顕：本来あるべきはずの主語が欠落省略

断叙法：接続する言葉の省略

○連辞省略：節と節の間につけるべき接続詞の省略

○連語省略：言葉と言葉の間につけるべき接続語の省略

省筆：詳細なことは書かず、くどくならないようにする省略

情報カット：言わないでもわかるシーンの省略

場面カット：次に書かれるべき場面がそっくりなくなる省略

警句：人生の機微などを簡潔に言うための省略

黙説法：ことば自体は消されるけれども、その枠組みを残しておく省略

頓絶法：言いかけてやめることによる省略

中断法：言いかけてやめようとして、やはり言うという省略

名詞文：述語などを書かないために、文末が体言になる省略

名詞提示：ただ名詞を投げ出しただけになっている省略

沈黙表示：文が完結しているのにも関わらず、沈黙の存在を示す省略

省略暗示：省略がないことをいうことによって、逆にその存在を示す省略

以上の分類を見て分かるが、日本語の省略法は話し言葉と書き言葉において現れているだけではなく、「ことわざ」「格言」「スローガン」といった固定用語でも様々な立場で使用されているようである。この分類を通じて、省略に関する考察の範囲がより広く、かつ、明確になった。ここで、談話と文章における省略について見てみたい。

まず、省略を談話法上の問題として久野(1978)が『談話の文法』において省略言語現象を最初に体系的に理論化したものである。そこで、「発話は文脈の中に置かれた文であり、脈絡から切り離された一つの文で主語、目的語、補語などが省略されている場合、統語論的にどのような必須要素が欠けているかは、述語からは分かるが、具体的にそこにどのような語を補えばよいのかは、文を文脈の中に戻さなければ分からない。つまり、省略は脈絡から欠けた語を補える限り可能となる」と主張している。次に、日本語の文章における省略について『新版文章表現辞典』(1991)では「無駄を省いて文章を簡潔な表現にする方法であり、豊かな内容を少ない言葉で表現するための方法である」と言う。さらに、「簡潔であるだけでなく、表現のある部分を省略してある方が、その文章はずっと余韻を残し、印象を強めることになるという時にこそ省略法が用いられる。即ち、記述しない部分(省略法)を読者に推量させることによって、より効果をあげる方法である」としている。

さらに、野内(1998)は『レトリック辞典』で省略法について、「無駄を省き文章を簡潔にして余韻多からしむる詩姿である」とし、省略法を余情を狙う黙説法とくびき語法と文法的な省略法の3種に分けている。

次に中国語における省略の定義について、鳥井(2004)の『中国語の単文に関する研究』、香坂(1984, 1986)の『中国語学新辞典』及び『現代中国語文法』を参考にしてみたい。

まず、鳥井(2004)によると、「日本語での「省略」あるいは単に「省略文」というのと同様に、中国語でも「省略法・省略」と「簡略句・省略句」が並存している」と述べている。そうして中国語における省略について、40年代から80年代までの、その定義に関する変遷を研究し、以下のようにまとめている。

- 王力(1943)：「およそ平常の文形態よりある部分が欠けているものは省略法という」
- 高明凱(1949)：「言語環境の許容により主語部分あるいは述語部分の主要な部分を省略した、このような文は省略句という。中国語で省略法を活用する箇所はきわめて多く、省略句はその中の一種である」
- 張志公(1959)：「およそ意味の必要性に基づき、あるべき主語、述語、目的語などの成分を具備したる文は完全文という。完全文と比較して一つあるいは数個の成分が欠落している文は〈簡略句〉と呼ばれる。…このいくつかの文中で空白になっている所には、文の構造に基づき若干の単語を加えることができるが、しかし言語習慣に照らして、すべき省略がなされた」
- 黄伯榮(1980)：「話をしたり、文章を書いたりするとき、通常、言わなくても自明である若干の部分は省略される。これは言語の簡潔化のためであり、省略は対話あるいは上下文の文脈においてよく現れるが、これら言語環境を離れて意味が明確でなくなれば、特定の語句を補い明確にする必要がある」
- 朱德熙(1982)：「いわゆる省略が意味するものは構造上、不可欠な成分が一定の文法的条件下で出現しないことである」

以上の省略法(簡略句)についての定義の中に、王、高、張は概ね説明しているようである。黄のほうはそれをより詳しく述べ、日本語の省略とほぼ同一であることが見て取れる。ここで、問題なのは、朱の定義で「一定の文法的条件下で出現しないこと」という部分である。例文を参照してみる。(「( )」は省略された部分)

[01]我昨儿买一(台)自行车。

私は昨日自動車を一台買った。

[02]手里拿一(个)瓶。

手に瓶を一本持っている。

[03]桌上搁一(台)电视。

机上にテレビを一つ置く。

[04]打外边进来一(个)老头儿

外から老人が一人入って来る。

中国語において、数量は必ず量詞を帯びてはじめて名詞を修飾できるのが一つの文法則であると言うが、これらの例から数詞(一つ)の後にある量詞(个)が省略されこともある。この種の省略を条件付けのものとして「第一は数詞は〈一〉に限られること、第二は〈个〉で計量できること」と説明している。これについて、鳥井は「それらはもはや〈省略文〉ではなく、一定の文法法則の下で成立可能である文の一種として認めるべきルールが切り開かれて、非主述文、無主語文、一語文は省略文の一種ではなく、独自の

文型を構成する単文の一種」と述べている。確かに、[01]のような例では〈我昨儿买一自行车〉とは言えるが、〈我昨儿买一魚〉（私は昨日魚を一つ買った）とは言えず、また[02]の〈手里拿一瓶〉とは言えるが、〈手里拿一书〉（手に本を一つ持っている）とは言えない。すなわち、一定の文法法則の下でのみ成立するのが分かる。

鳥井(2004)が紹介した省略の定義の他に、香坂(1984)は『中国語学新辞典』の中で、「話の中でも文章の中でも環境や前後の文脈の助けを借りて、意味の通じる範囲で一個あるいは数個の句子成分を省略した“文”(句子)を簡略句」と言い、また、同氏(1986)の『現代中国語文法』では「表わそうとする思想の必要に応じて、なくてはならぬ主語、述語、目的語などの要素を備えている文を完全文と言い、完全文に比べて一つ以上の要素を欠いている文を簡略文と言う」と定義している。また、「簡略文で欠けている要素はかならず明らかなものであり、もし必要ならばはっきりとこれを補うことができる。欠けているものを補っても、文の主たる思想は変わらないが、表現効果には多少違いがある」とし、即ち、「簡略文の特徴はその簡明さにあり、決して全文の欠如形式ではない」と指摘している。

#### 1-2-2 省略の要素及び方式

省略には文脈による省略と場面による省略との2種類がある。日本語の省略について、文脈による省略の場合、村松・神鳥(1991)『新版 文章表現辞典』では文の省略の方法を次の5つに分類している。

- a)動詞・形容詞・助詞・助動詞を省くもの
- b)主語を省くもの
- c)句を省くもの
- d)前句の末と後句の初めとを一緒にして、掛け持ちとするもの
- e)要点だけを記述し残部を読者の想像に任せるもの

などである。

また、渡辺(2002)は談話において、省略を省略された文要素の観点から6つに分類している。それらを以下に示す。(S：質問、U：省略を伴う返答、「( )」は省略された部分)

##### a) 述部省略

[05] S：どこが痛いですか？／哪疼呀？

U：お腹(が痛い)。／肚子(疼)。

##### b) 格要素省略

[06] S：体調は良いですか？／身体好吗？

U: あまり(体調は)良くないです。/(身体)不太好。

c) 述部・格要素省略

[07] S: いつ病院に行きますか?/什么时候去医院。

U: 明日の午前中(病院に)(行きます)。/明天上午(去)(医院)。

d) 述部の入れ替えを伴う省略

質問の述語とは異なる述語で応答を行った場合の格要素省略。なお、このような応答方法を関連述語による応答と定義する。 (「      」は入れ換えを伴う部分)

[08] S: 病院で診察を受けましたか?/在医院接受治疗了吗?

U: ええ、(病院で)検査してもらいました。/嗯,(在)(医院)得到检查了。

e) 格要素の入れ替えを伴う省略

以前の会話に出てきた格要素と同じ属性の名詞を応答に含む省略。

[09] S: 明日A病院に行きますか?/明天去A医院吗?

U: (明日)B病院に行きます。/(明天)去B医院。

f) 述部・格要素の入れ替えを伴う省略

上記の2つの入れ換えを伴う省略

[10] S: 明日、A病院に行きますか?/明天去A医院吗?

U: (明日、)B病院にします。/(明天,)決定去B医院。)

さらに、渡辺(2002)は場の省略から考えて補完処理の観点から以下の3つに分類している。

i) 対話当時者に関する省略

・ 叙述表現や、尊敬語、謙譲語の使用に伴う省略

[11] (私が)(あなたを)お送り致します。」/我送你。

・ 特定の動詞の特性による省略

[12] (私は)そう思います。/我是这么人为。

・ 代用表現による省略

[13] A: コピーを取りましょうか。/拿咖啡吧。

B: お願いします。/麻烦你帮我拿一下。

ii) 文脈省略

補完されるべきものが、対話中の以前の箇所では既に言及されている。

[14] A: 明日、病院に行きますか?/明天去医院吗?

B: はい、(病院に)行きます。/去(医院)。

iii) 共有知識による省略

・ 対話当事者間での共有知識による省略

[15] A: 明日から(スキー)行くの?/从明天去(滑雪)吗?

B: うん、(スキー)行くよ。／嗯, 去(滑雪)。

・一般常識から推測できる省略

[16] 羽田から(飛行機で)発ちます。」／从羽田(乘飞机)出发。

中国語における省略要素について香坂(1984)の『中国語学新辞典』では i 主語、ii 谓语(述語)、iii 宾语(目的語)、iv 补语(補語)、v 介词(助詞)、vi 连词(連続詞)、vii 助词(疑問助詞)に分けられる。それらの例を次の談話文に見られる。

[17] (你 i) 别说费话, 先干活儿!

(あなたは)無駄口ばかりたたいていないで、早く仕事に取り掛かれ。

[18] 李将军什么时候走?(他 i) 十二点(走 ii)。

李將軍はいつ行きますか?(彼は)十二時に行きます。

[19] 姐, 茶叶(在 ii 哪儿 iv) 呢?

お姉さん、お茶は(何処)?

[20] <她端来水向趙老> 给你(水 iii)!

<彼女は趙様に水を持って来る>(水を)どうぞ!

[21] 你们有盼望,(可是 vi) 我没有(盼望 iii)!

貴方たちは待ち望みがある(が、)私は(待ち望みがない)。

[22] <挣得多花得多>(从 v) 左手进来(从 v) 右手出去!

<稼げば稼ぐほどお金がかかる>左手に入って、右手に出る!

[23] 你喝过茶啦(吗 vii)?

お茶を飲んだ(か)?

また、香坂(1986)が以下の[24]～「27」のような、小説から採集した用例において、例[24]、[25]のように、日本語を中国語に直訳すると、省略された要素はほぼ同じである。しかし、中国語の省略の様相は日本語と比べると差異もあるようである。例えば、日本語の場合は「それでは、応接室へご案内いたします。どうぞこちらへ」や「馬子にも衣装」のようにも述語の省略が比較的寛大であるのに対して、中国語は“那么, 我带你到接待室. 请这边走”や“人是衣裳, 马是鞍”のような、それが窮屈である。また、例[26]、[27]の波線で示すところに、介詞(助詞)や疑問助詞の省略も意外に多く見受けられるようである。

[24] 祥子の車は売れてしまった!(彼が)虎妞のひつぎの後について城外へ歩くようになって、彼ははじめていく分わかってきたが、心はまだ何も考える余裕がなかった。

祥子的車賣了!(他)跟着虎妞的棺材往城外走, 他这才清楚了一些, 可是心还顾不得



思索任何事情.

老舍『骆驼祥子』

- [25] 「私はほんとうに馬鹿でした、ほんとうに（馬鹿でした）。」と彼女は言った。「わたしは、雪のふるころはけものが深山にいてもたべるものがないので、村里にやってくることもあるということだけはしっていましたが、春にもそんなことがおころうとはしりませんでした。・・・」

「我真（笨），真的（笨），」她说。我单知道雪天是野兽在深山里没有食吃，会到村里来；我不知道春天也会有。・・・」

魯迅『祝福』

- [26] 部屋はもう小福子によってすっかり片付けられていた。（彼は）かえってくると、彼はどかりとオンドルに身を投げた、（彼は）疲れてもう動けなくなっていた。

屋里已经被小福子收拾好了。（他）回来，他一头倒在炕上，他已经累得不能再动了。

魯迅『祝福』

- [27] 「おい、どうしたんだ！」彼は腰を下ろしながら私に言いました。「あいつらは君を気が変だと思ってるぜ。」

「你是怎么搞的（呀）！」他一面坐下来一面对我说。「他们以为你疯了。」

小仲馬『茶花女』

香坂(1986)は一定の話しの場における省略を以下のように4つに分類している。

i) 面と向かって言うとき

- [28] 小组长站起来说：「(咱们)可更得加劲干啊！」

組長は立ち上がって言った。：「(私たちは)もっとしっかりやらなくてはならぬ！」

ii) 問いに答えるとき

- [29] 「你喜欢什么颜色的绒线？」「(我)(喜欢)深蓝色(绒线)。」

君は何色の毛糸が好きか。：「(私は)紺色(が好き)です。」

iii) 前に述べたばかりのとき

- [30] 他会跳舞,我不会(跳舞)。

彼はダンスを踊れるが、私は(ダンスが)できない。

- [31] 他点上一枝烟,(他)抽了两口,(他)慢慢地说。

彼はタバコに火をつけ、(彼は)二、三服すってから、(彼は)ゆっくりと話した。

- [32] 他们偷,他们枪,他们欺诈,谁也不敢惹他们。

やつらは泥棒、~~Φ~~略奪、~~Φ~~詐欺とやらぬものはなく、だれもやつらにさからおうとしない。)

iv) あとですぐ言及するとき

- [33] (他)坐了好久,他心里腻烦了。

(彼は)長い間座っていたので、かれは心中あきあきした。

彼によると iii) において、「[31]」のような例で複文の各分文の主語が同一である場合も省略される。[32] のような例で、もし主語を繰り返すと言っていると、強調的な色彩を帯びてくる」としている。なお、iv) においては、「上文が原因・条件・時間の類を表わしているか、下文が結論・まとめの性質になっているときに限られている」と指摘している。

ここで、両言語における省略の基本的な性格の共通点と相違点を概観してみると、以下のようにまとめられる。

#### 共通点：

『中国語学新辞典』によると、中国語の省略は修辞法において、言語面に依拠するものとして扱われているようである。これは日本語の「言葉を省略するレトリックの総称とするもの」と同一であるようである。また、単一の文自体の中でも、また複文を形成する節と節のあいだでも省略が生じるという特徴は日中両言語に共通していると見られる。さらに、省略の範囲において、中国語は「i) 面と向かっていうとき、ii) 問いに答えるとき、iii) 前に述べたばかりのとき」の場合に省略表現がよく使用されているのに対し、日本語の「ii) 文脈省略、iii) 共有知識による省略」に対応すると考えられる。

#### 相違点：

相違点は以下の4つにまとめられる。

- i) 日本語の省略法において、「語頭音消失」、「語尾音消失」、「語中音消失」という言葉の「音」の数を減らし、より使いやすくするための省略法があるが、中国語においては、そのような語句の先頭、語尾、語中に来るはずの音を省略する省略法がないようである。
- ii) 省略の種類について、日本語には対話当事者に関する省略がある。しかし、それに関する日本語の用例を中国語に訳してみると、中国語の省略が現れていないようである。例えば、日本語の「そう思います」は「私」を言わなくても、相手に分かるが、中国語の場合は“我”(私)を省略すれば、誰が「そう思います」かが不明確になる。
- iii) 省略要素について、渡辺(2002)は、例[06]のような助詞「は」と名詞「体調」を同時に省略する要素を「格要素省略」に分類しているが、日本語ではこの省略を「格要素省略」に分類したのも適当であると考えられる。しかし中国語の場合は、それを単純に「主語省略」に分類している。「格要素省略」と「格要素の入れ替えを伴う省略」は日本語の省略の特徴であるようである。しかし、例[08]において、「病院で」の動作の場所を表わす「で」は中国語に訳すと、“在病院”の“在”が現われ、介詞(助詞)と補足の省略に分別している。例[29]において、“在哪儿”(何处)

は谓语（述語）の“在”と补语（補語）の“哪儿”の2つの省略としている。

- iv) 『中国語学新辞典』によると、日本語の場合“御用の方は受付へ”、“馬子にも衣裳”のように述語の省略が比較的寛大であるのに対して、中国語はそれが窮屈である。また、例[26]、[27]のように介词（助詞）や疑問助詞の省略は中国語が意外に多く見受けられる。

第1章で、主題の定義と主題形式、省略の定義と省略の要素及び方式から両語の主題と省略の基本的な性格をみた。次に、第2章、第3章において、この規則に基づいて、用例を採集すると共に、より正確な分析を行って行きたいと思う。

## 第2章 日本語における主題の省略及び顕現

主題の省略及び顕現(非省略)注③に関する先行研究は日本語については数多くあるようであるが参(1)~(12)、それと中国語との対応関係についての研究は未だ殆どなされていないようである。そこで本章ではまず、日本語の主題の省略及び顕現に関する先行研究を整理すると共に、考察も加えて連続する2つの文について、後続文の主題の省略及び顕現の条件と得られた効果をまとめておく。また、その次の第3章において、第2章で明らかになった日本語の主題の省略及び顕現の条件や規則性等が、中国語文にまで敷衍できるか否かについて日中(中日)対訳例文を用いて考察する。

### 第1節 連続文における後続文の主題の省略

#### 2-1-1 先行研究について

主題の省略に関する研究成果を時系列で整理する。(アンダーライン「  」は文の主題、「Φ」は略題記号、「( )」は省略された主題)

三上章(1960)の研究：

三上は「ハ」が1文内に留まらず、連続文の後続にまで勢力を及ぼし第2文以降が略題(主題の省略)となるという現象を指摘し、「(「ハ」の)ピリオド越え」と呼んだ。彼はまた、さらに考察を発展させて略題の発生する範囲をまとめ、次の三つに分類した。

- i) 前文や前々文の題目が第2文以降にまで響き続けているとき。
- ii) 提示の形ではなくても、前文で注意の焦点にあった単語が、自然に題目の地位にまでせり上がったとき。
- iii) 暗黙の了解が成立しているとき。

少なくともi)、ii)、iii)の何れか1つに該当する場合、後文の主題は省略されることがある。それぞれの例文は以下の「34」～「36」のように挙げられている。

[34] 父は茶の間へ入らなかった。Φ(父)は隣の方に座った。

[35] (フィルド賞を受けた数学者小平邦彦の寸描)

Φ小さい時から、数を数えるのがやたらに好きだった。Φおサラに豆を数えては入れ、入れては数え、一日座り込んでいた。(主題「小平邦彦は」)

[36] Φ白味の魚の薄い切り身の水気を取り、油を塗ったグラタンサラにおき、その

上にみじん切にした玉ねぎ、塩、胡椒、クリーム、おろしたチーズを多量にかけ、更に少しパン粉をかける。Φ魚のまわりに少し白の生葡萄酒を流し入れ、熱い火で約半時間オープンで熱する。(主題「その魚料理は」)

#### 久野(1978)の研究

久野は「視点設定の優先順位」(「発話当事者の視点ハイアラーキー」と「談話主題の視点ハイアラーキー」をまとめたもの)の観点に立って、主題であることが省略条件であるとして、次の四つの「主題省略の条件」を立てている。

##### i)反復主題省略：

第1文と第2文の主題が同一である場合は、第2文の主題を省略できる。(「Xハ」のピリオド越え)

##### ii)主語を先行詞とする主題省略：

「Xガ…。Xハ…。」の「Xハ」は省略できる。

##### iii)新主題省略：

「Yガ…X…。Xハ…。」という2つの文の連続がある時、「Xハ」が省略できるのは、第1文も第2文も、Xの目から見た記述( $E(X)=1$ )であるか、YよりもX寄りの視点から見た記述( $1 > E(X) > E(Y)$ )である場合に限られる。但し、 $E(X)$ の値が1に近づければ近いほど、「Xハ」の省略が容易になる。

##### iv)異主題省略：

「Yハ…X…。Xハ…。」という二つの主題文の連続がある場合、「Xハ」が省略できるのは、話者の視点がYのそれと完全に一致し、(即ち  $E(Y)=1$ )、第2文もYの視点からの記述である場合に限られる。

それぞれの例としては以下の[37]～[40]のような例文が挙げられている。

[37] 私は議論をして、勝ったためしが無い。Φ(私は)必ず負けるのである。

[38] 太郎が訪ねてきた。Φ(太郎は)一年間会わないうちに、すっかり大人っぽくなっていた。

[39] 太郎が僕に話しかけてきた。だけど、Φ(僕は)知らん顔をして、返事をしてやらなかった。

[40] 太郎は花子を病院に見舞った。Φ(花子は)思ったより元気であった。

#### 畠(1980)の研究

畠はテキスト分析という観点から、「主題の省略によって結びつけられたいくつかの文は強いまとまりを見せる。従って、新しい主題を提示すると、そこで文に切れ目をつけることになる」と指摘している。文の中で主題の省略のみならず主題の提示(顕現)

が果たす機能に着目したという点は大いに評価できる。

例文としては以下の[41]のような『吾輩は猫である』の冒頭部分の原文が挙げられている。

[41] 吾輩は猫である。Φ(吾輩は)名前はまだ無い。

Φ(吾輩は)どこでうまれたかとうんと見当がつかぬ。Φ(吾輩は)何でも薄暗いじめじめしたところでニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。Φ(吾輩は)しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食うという話である。しかしその当時はΦ(吾輩は)何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。Φ(吾輩は)ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。

#### 寺倉(1986)の研究

寺倉は主題の省略の分析に「非継続」の概念を用いて「2 文間に意味的断絶があり、後行文が先行文の主張する事、または前提とする事を含入、結合するものある」と説明している。また、「継続文」の後行文では先行文と同じ主題は省略されると述べている。

#### 砂川(1990)の研究

砂川は主題の省略が許されるのは省略されたものが何を指し示しているのかが、読み手に理解可能である時(復元可能である時)とし、その主題の省略を可能にする条件として、「構文的条件」を提示している。そして、以下の[42]、[43]のような例文が挙げられている。

[42] 四人が二階から降りてきたときに、万梨子が子走りに居間へ入って来た。Φ(万梨子は)セーターの上に急いでレインコートを羽織ってきたという感じで、彫りの深い顔には化粧気も無かった。

[43] “女も手に職をつけなければいけない”それが父の口癖だった。その教えを忠実に守ったのは、邦子のほう。Φ(邦子は)人大学の時に英検の一級を取った。Φ(邦子は)ついでにガイドの資格を取り、二年ほど航空会社に勤めたが、今はフリーのガイド業通訳業を営んで、なかなか忙しい。

[42] のように省略された主題が指し示す人物が、直前の文で言語的に示されている場合は、省略された主題の復元確率は高い。またさらに、[43] のような、いわゆる「分裂文」で表層では主題の位置を占めていなくても、基底で主語の位置を占めていれば、続く文でそれが省略された場合、主題の復元可能性は極めて高い。

## 甲斐(1995)の研究

甲斐は久野の「視点」と畠、砂川、寺倉の「結束性」などの概念を用いて、更に推論、認知の問題も絡めながら省略現象を考察した。現場指示の省略条件については、談話構成上、「話者の感情表出、聞き手に対する質問など、誰についてのコメントかがはっきりしているもの」、「発話の場面から、話者と聞き手が共にそのコメントが誰、何についてのものかがはっきり分かっているもの」及び「眼前の出来事、状況の描写で、誰、何についてのコメントかがはっきりしているもの」と言ったタイプがあるとも述べている。

以上の先行研究から久野の「視点設定の優先順位の観点」と甲斐の「推論認知(談話構成上)」という2つの観点から以下の(1)と(2)のような主題の省略条件が見出される。

### (1) 視点設定の優先順位

- i 「反復主題省略」：第1文と第2文の主題が同一である場合「反復主題省略」。
- ii 「主題を先行詞とする主題省略」：「Xガ…。Xハ…。」の「Xハ」は省略できる。
- iii 「新主題省略」：「Yガ…X…。Xハ…。」第1文も第2文もXの目から見た記述であるかYよりもX寄りの視点から見た記述である場合に限られる。
- iv 「異主題省略」：「Y ハ…X…。X ハ…。」という二つの主題文の連続がある場合、「Xハ」が省略できるのは、話者の視点がYのそれと完全に一致し、第2文もYの視点からの記述である場合に限られる。

久野は「視点」という観点から省略の現象を論じ、省略に関わる以上の条件を導き出した。これらは何れの場合にも、主題の省略の条件とされている。しかしながら、視点が主題にあるとしているにもかかわらず、「新主題省略条件」と「異主題省略条件」では、視点がどこに置かれるか、また省略の付帯条件とされている。このような複雑な条件設定をすることになる原因がどこにあるのかを、久野が挙げた次の[44]～[47]のような例文で考えてみる。

- [44] a 突然、覆面をした数人の男が、太郎に殴りかかってきた。  
b φ(太郎は)必死に防戦しながら、逃げる機械を窺った。
- [45] a 花子が太郎と公園を散歩していると、覆面をした男が太郎に殴りかかってきた。  
b \* φ(太郎)必死に防戦していたが、とうとう殴り倒されてしまった。

久野は例[44]のbを「新主題省略条件」に合致した文、例[45]のbを違反している文とし、その理由を次のように考えている。

例[44]のbの「太郎は」が省略できるのは先行文である[44]のaに「突然」及び「殴

りかかってきた」があり、太郎の目から見た記述だと解釈できるからである。しかし、例[45]の b の「太郎は」は、先行文である例[45]の a の中にある従属文、「花子が太郎と公園を散歩していると」により、花子の目から見た事件の記述であることが明らかのため、視点の置かれていない「太郎は」を省略すると意味不明な文になってしまう。

[46] a 太郎は花子を病院に見舞った。

b φ(花子は)思ったより元気であった。

[47] a 太郎は病院に花子を見舞いに行かなかった。

b \* φ(花子は)太郎がいつ来るかと首を長くして待っていた。

また、例[46]と[47]において、久野は例[46]の b を「異主題省略条件」に合致した文、例[47]の b を違反している文と述べている。[46]の b では、太郎が花子から見た記述であるが、[47]の b では、太郎と花子に対等の位置にあるため、「視点」が変り、非文となったのである。しかし、[47]の例が物語文のみに起こり得る現象であり、話し言葉で[47]の b のような省略は、第 1 文の主題が一人称代名詞に限られてしまう。

## (2) 推論認知(談話構成上)

- i) 話者の感情表出、聞き手に対する質問など、誰についてのコメントかがはっきりしているもの。
- ii) 発話の場面から、話者と聞き手が共にそのコメントが誰か、何についてのものかがはっきり分かっているもの。
- iii) 眼前の出来事、状況の描写で誰か、何についてのコメントかがはっきりしているもの

### 2-1-2 容認度(省略の自然さ)から見た省略

以上の先行研究で、主題の省略条件の規則性を久野の「視点」と畠、砂川、寺倉の「結束性」等の要因に求めている。しかし、これらは限定された観察対象や観点から導かれているために、現象全体に適用できない、あるいはまた、1つの要因のみに依存しては、現象を包括的に捉え切れないという問題がある。そこで、この主題の省略について、恵谷(2004)は容認度(省略の自然さ)の点から捉え直しを行っている。主題の省略に関する容認度は、読み手の局所的なテキスト理解における照応関係と連続関係という 2つの視点から考察した。以下で、まず、連続する文における先行文にどのような要素が主題性注 4)を持つかについて観察してみる。次には恵谷の容認度から見た主題の省略条件について見てみる。

#### 2-1-2-1 省略の様相



連続する文において同じ主語がある場合、第1文の主語を先行詞として後続文で主語が省略され得ることについて、先行研究において、まず、砂川(1990)が先行詞は第1文の“主格の”(=主節の)主語である可能性が高いことを述べている。また、例[48]のように、第1文がいわゆる分裂文の場合を考察し、この時は先行要素が「基底の部分で主語の位置」を占めるとしている。次に、先行要素が主語以外の成分の場合、久野(1978)は連続する文に視点の統一があれば、第1文における目的格または与格が先行詞になり得ることを説明している。例えば、前に挙げられた例[39]、[40]である。この2つの用例のような場合について、砂川にも文の内容が先行要素の「状態や属性を描写」するようなものならば、主題の省略可能性が高いと述べている。

[48] 友吉を、ゆうは顔だけは知っている。Φ(友吉は)徳次郎親方の女房の弟ということだ。

久野(1978)と砂川(1990)から、先行要素は主語以外では「主語(主体)の行為の対象を表わす格」(簡略に「目的語」と呼ぶ)である可能性が高いとすることができる。それに、目的語の場合がやはり「主節」目的語でなければ、先行要素として成立しにくいと言えるようである。さらに、分裂文や指定文の述語、先行要素が主語(主体)、目的語の以外に、[49]～[51]のような名詞句が主題性を持つ場合もあるようである。三上(1960)は「“ハ”のピリオド越え」という概念によって、文の主題が文を越えて後続の文に係わる力を持つことで、後続文で主題が省略されると説明した。しかし、以上で挙げられた用例を見ても分かるが、殆どの成分の名詞句が「ピリオド越え」が可能である。これは「主題性注(4)」という概念によって説明することができる。文中の要素は何らかの成分による階層性があり、主題性を備えているが故に、何れも「文を越えて」後続文で主題が省略されることが可能であるということになるようである。

[49] 95年度から始まったスクール・カウンセラーに期待している。Φ(95年度から始まったスクール・カウンセラーは)約4000校の小中学校に配置されている。

[50] 近年、日系、中国系、あるいはイタリア系の米国人と言うのと同様、黒人をアフリカ系米国人と呼ぶ。Φ(アフリカ系米国人は)『ルーツ』以後の表現だろう。

[51] 長老格にまずあいさつしようと、ニッパハウスをのぞいたら、カバリクはぎよっとするほど真っ赤なジョギングパンツ姿だった。Φ(ぎよっとするほど真っ赤なジョギングパンツは)救援物資らしい。

#### 2-1-2-2 容認度の高い省略の条件

恵谷(2004)によると、Kameyama(1985)は「先行詞として参照されやすい要素には“主題>主格>格(主格以外)>その他」という順序がある」と言っていることを紹介してい

る。これに従えば、先行文脈では、まず主題性の最も高い主題、次いで主格の要素から参照されていくことになる。また、恵谷は「位格などで述語に対応して主体を表わす名詞句も主格と同様に考えられる」としている。例[48]のような、先行文脈の情報の焦点や潜在的な主体となっている要素も、主題性は高く、参照されやすいと考えられる。これらが省略文の文意(省略文の内容制約<sup>注(5)</sup>)から先行要素として確実に同定されれば、省略は安定し、容認度も高いと言える。

しかし、[49]～[51]のような場合、主格以外の格(名詞句)などにある相対的に主題性の低い要素が先行要素となる場合、省略文は原則として対象の属性や状態を叙述する内容になる。分類型としては名詞文、形容詞文、状態性動詞文などがあるようである。例[49]～[51]で言うと、[49]「配置されている」、[50]「(『ツール』以降の)表現だろう」、[51]「救援物資らしい」等である。そうして、主題・主格要素を優先にすることが否定され、主題性の低い要素でも先行要素として同定されることを明らかにした。また久野(1978)は省略現象や省略文の分析において、「視点」という概念が用いられることがある。「文中の名詞句の X 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感と呼び、その度合い、即ち共感度を  $E(X)$  で表わす。共感度は値 0 (客観的描写) から値 1 (完全な同一視化) までの連続体である」と定義している。即ち、共感度の最も高い対象に話し手の視点が置かれ、言わば、事態がその人物の目を通して記述されるかのように発話が行われるのである。ここで、「視点」という要因で考えてみれば、目的格の対象に話し手(読者とも言える)の視点が寄っている場合に、主題、主格要素や他の主格及び名詞句要素が主題性の高い先行要素として同定されることも説明される。しかし、久野は複数の人物が登場する例文に基づいて分析し、有生物を表わす要素が先行要素として選択する場合には有効であるが、非生物を表わす要素が先行詞となる場合には説明することができないとした。例えば、[52]のような例である。

[52] 太郎が花子に学費を出してやった。 $\phi$ かなりの額だったらしい。

従って、主題容認度が高い要因については、すべて久野(1978)の「視点」では説明しがたく、ケースバイケースに適用されるもののようである。例えば、以下のような場合は先の内容制約は義務的でなくなるようである。

- i) 省略文が視点の置かれた主体から見た対象についての描写である場合、
- ii) 書き手の視点先行詞が表わす対象のそれと一致するか、近い位置を取る場合
- iii) 省略文と先行文が因果や根拠—結論、前提—帰結など強い従属的な意味関係にある場合

(i)、(ii)の場合は視点が置かれた対象及び主体が視点に向ける対象も文において卓

立し、主題性の高い要素となる。(iii)の場合は文間の強い意味関係が主題性の関与をブロックする要因になると考えられる。

さらに、容認度の高い連続文主題省略の中には、省略文と先行文脈との間に何らかの意味関係が認められる場合が前提条件となる。例えば、[53]の例では、2つの文の間に「判断―根拠」という意味的な関係があると理解されるようである。

[53] 隣のうちでは、また犬を飼うようだ。Φ(隣のうちは)今朝から犬小屋を塗り替えている。

畠(1980)、宮島・仁田((1995)は「結束性」のような形態的な要素による文間のつながりのみに依存する」としている。しかし、それには例[54]のような既有知識を元にした推論によって文間に関係を読み込むような場合も含まれる。この連続する文間の意味関係、つまり連続関係については「機械誘因、可能化、因果、評価、背景、説明、並行、同意、一般化、例示、対照、期待破棄」などとしている。逆に、文間に意味関係があり、省略の条件の整った環境で主題が提示されていると、その文に、ある命題を強調したり際立たせたりする意図性や有標性が感じられるようになる。そうして、このような連続文の主題の顕現において、「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」となる場合、その顕現の条件として言えるようである。

[54] 田中さんは生ガキを食べた。Φ(田中さんは)けがをした。

以上の読み手のテキスト理解における照応関係と連続関係から、連続文における容認度の高い主題の省略条件をまとめて見ると、読み手は「先行要素を同定するに当たって、主題性の高い要素から参照するため、これが先行要素となっている場合、省略の容認度は高い」。しかし、「相対的に主題性の低い要素でも、省略文が述語を中心としてそれを強く指示していれば(つまり、同定されやすいように属性や状態を示す名詞文・形容詞文・状態性動詞文になるなら)、読み手はそちらを優先的に参照する」。したがって、この省略文の内容制約が守れるなら、主題性の低い要素が先行表現になる場合も、同じ容認度は高く保たれる。また、「視点が働く場合や文間に強い従属的な関係がある場合には、そちらが強く関与し、この内容制約がなくとも容認度の高い省略が可能である」。さらに、「容認度の高い省略のためには、先行文脈と省略文との間に直接的な意味関係が認められることが前提なる」。

ここで、日本語の連続文における主題の省略の条件と得られる効果について、次のようにまとめて示す。

(1)主題の省略の条件：

①主題性の高い要素が先行詞となっている場合

主題の省略の容認度は高い。

②主題性の低い要素が先行詞となる場合

i)述語を中心として主題性を持つ要素を強く指示していれば、(即ち、同定されやすいように属性や状態を示す名詞文・形容詞文・状態性動詞文になるなら)主題性の低い要素が先行詞になっている場合でも、読み手はそちらを優先的に参照する。

ii)省略文が視点の置かれた主体から見た対象についての描写であるとき。

iii)書き手の視点先行詞が表わす対象のそれと一致するか、または近い位置を取るとき。

iv)省略文と先行文が因果関係や根拠—結論、前提—帰結など強い従属的な意味関係にあるとき。

③先行文と省略文との間に直接的な意味関係が認められることが前提となる場合

(2)得られた効果：

①主題の省略によって結び付けられた幾つかの文は強いまとまりを持った文の印象を与える

②既有知識を基にした推論によって文間に関係を読み込むようになる。

## 第2節 連続文における後続文の主題の顕現

前述のように省略の定義を調べてみると分かるが、省略というのは、ある表現を言っても言わなくてもよい場合に、その表現を使わないということであるが、一方、顕現の場合はそれとは逆と言えるのであろうか。『明鏡』(2005))によると、顕現とは「はっきりとした姿、形をとって現れること」としているが、これは単に言葉の意味としての定義である。そこで文中の主題の顕現について、どのような特徴及び規則性等を持っているのかについて、先行研究を参考に調べてみた。

### 2-2-1 先行研究について

主題の顕現に関する研究成果を時系列で整理する。

寺倉(1986)の研究：

寺倉は主題の非省略の分析に「非継続」の概念を持ち込んだ。ここでの非省略は「使用すべき所なので、使用しているパターン」である。彼によると、文と文の間に意味的な断絶が生じている場合に主題は省略されない。すなわち、2文間に意味的な断絶のある場合というのは、後行文が先行文の主張または前提とは直接関係のない事柄を表現する

場合で、後行文の主題が省略されない。また、その意味的断絶のパターンとは次の3つである。

- i) 会話の内容が急に飛ぶ場合
- ii) 既に談話に現れた指示物に関する情報を新たに与える文の場合
- iii) 節が挿入される場合

砂川(1990)の研究：

主題の非省略には「使用すべき所なので、使用しているパターン」と「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」の二つが考えられる。砂川は前者を「主題の義務的な明示」、後者を「主題の非省略」と名づけ、分析している。例えば、[55]の例で、砂川によると、この談話の第1文の表わす内容「マルイギンがあたり一帯を歩き回ったこと」と、第2文の表わす内容「マルイギンがライフル銃を見つけたこと」に、「時空間的なギャップ」が存在し、故に、談話の「境界」が設定されたためであると言う。砂川は第2文が第1文の主題を維持することは困難なため、再び「は」を用いて主題を明示することを「は」の「主題の維持機能」と呼んだ。同じ主題が次の文で維持されることが困難な場合は、主題を再設定するのである。砂川は「は」の「主題の維持機能」が困難な場合について、「時空間的なギャップ」のほか、「他の登場人物の介在」、「文脈の不整合」、「語り様式の変化」、「書き手の視点の変化」等を取上げている。また、[56]の例では2文目の主題を省略したとしても、談話は自然である。ただし、再度使用して問題があるわけでもなく、必ずしも不自然は言えない。ここで、「省略するかしないかは、あくまで書き手の自由な選択に委ねられている」と述べている。では、[56]の2文目の主題「僕は」が省略されずに再び使用されたことについて、砂川は第2文目に再び主題を設定することによって、書き手はその談話になんらかの「境界」を設け、その談話をより小さな単位に分割しようとしたためであるとしている。

[55] こう独り言を言いながら、マルイギンは銃に弾をこめ、ここで行われた悲劇のすべてを知るため、あたり一帯を歩き回った。

マルイギンは倒れた紅松のそばにバンドの切れたライフル銃を見つけた。安全装置がかかっていた。

[56] 僕はなによりも、助かった、と思った。勝っちゃんの言うとおりに、いま家じゅうがそのことでゴッタ返しているのなら、僕は帰りが遅れたことを誰にも気付かれずに済むからだ。

雨宮・林部(1993)、甲斐(1995)の研究：

その他、雨宮らは談話の焦点が主題にある場合、もし新しいトピックに変換してしま

ったら、話し手は聞き手にトピックが変換したことを知らせ、聞き手と新しいトピックを共有しなければならない。そのためにも主題を明示する必要があると述べている。

砂川の用いる「非省略」という用語は「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」を指し、「使用すべき所なので、使用しているパターン」は「主題の義務的な明示」と呼んだ。著者はそれを援用し、主題の顕現が「主題の義務的な提示」(顕 i)と「恣意的な提示」(顕 ii)の両方を含んだ表現であると考えた。

さらに、清水(1995)は日本語の文連続において同一の主題が続く場合、2 文目(以降)の主題がどのような場合に省略されるか或いは顕現されるかについて、益岡(1987)の「叙述の類型」(事象叙述文と属性叙述文)を援用し、評論文や随筆や新聞記事などを資料として文連続の分類を行った。最後に、文連鎖に関して後続文の主題が省略されるか顕現されるか、その傾向について次のようにまとめて示している。

◎「叙事型」文連続

属性叙述文→事象叙述文(連鎖)⇒主題省略

事象叙述文→事象叙述文(連鎖)⇒主題省略

◎「解説型」文連続

属性叙述文→属性叙述文(連鎖)⇒主題顕現／主題省略

◎「[叙事→解説]型」文連続

事象叙述文(連鎖)→属性叙述文(連鎖)⇒主題顕現

但し「解説型」が「叙事型」への評価を表わす場合⇒主題省略

## 2-2-2 主題の顕現の条件

日本語の連続文における主題の顕現の条件と得られる効果について、次のようにまとめておきたい。

### (1)主題の顕現の条件：

- ①既に談話(前文)に現れた指示物に関する情報を与える文のとき。
- ②節が挿入されるとき。
- ③時空間的なギャップが存在するとき。
- ④他の登場人物が介在するとき。
- ⑤文脈が不整合のとき。
- ⑥語り様式が変化するとき。
- ⑦書き手の視点が変化するとき。
- ⑧「境界」を設け、その談話をより小さな単位に分割しようとするとき。
- ⑨2 文の関係が並立的に解釈されるとき。

### (2)得られる効果：

- ①新しい主題を提示することによって、文章にハッキリと切り目をつける。
- ②話し手は聞き手にトピックが変換したことをハッキリと知らせ、聞き手と新しいトピックを共有することができる。
- ③直接的な意味関係が認められない文で、主題の省略が行われると、そのまとうりの区分に混乱を生じ、不整合になるのを避ける。

### 第3章 翻訳作品における主題の省略及び顕現の対照分析

これまで主題の省略及び顕現について整理してきた。ここでは、既存の研究で分かった主題の省略、主題の顕現の条件や規則を使って、日中(中日)対訳小説における両言語の主題の省略及び顕現の共通点と相違点を考察してみたい。

#### 第1節 データと分析方法

##### 3-1-1 データの作成

本章では主に中国語における主題の省略及び顕現の条件や規則性を考察し、それと日本語を比較対照してみたい。分析用資料は日中(中日)対訳小説から採集したものである。日中対訳小説において、日本の著名な作家夏目漱石の小説『吾輩は猫である』の中から用例を採取し、それが中国語訳の同小説(《我是猫》)とどのように対応しているのかについて対照研究を行う。また、中国語訳文における主題の省略及び顕現の条件や規則性をより深く考察し、中国語対訳の同小説《我是猫》は客観性を得るため、中国人の日本語研究者3人(于雷、刘振瀛、尤炳圻)がそれぞれ独自に訳した異なる3冊の訳本を選んだ。その中には、訳者の文章に対する理解の差異によって、主題が省略されるか顕現する例文もある。ここでは、翻訳文が訳者間で一致しないものとして検討して見たい(本章第4節)。なお、中日対訳小説において、中国語の主題の省略及び顕現となる文を分析するため、日本語翻訳文から見たずれの問題は取り扱わないようにする。また、連続文の先行文において、主題、主格要素が先行要素となる用例はより多く見受けられるが、他の格要素、格以外の名詞句要素なども主題性を持つようになれば、対照用例としても扱う。さらに、用例採取は会話文と地の文に分けて行ったが、会話文における反復主題省略の用例は極端に少なく、かつ複雑な文構造と表現を呈していたので、これを分析対象から外し、地の文の用例のみを分析用資料として採用した。用例数は172例である。

データの構成項目を以下の表1に示す。

表1 データの構成項目

データ1	番号 (001~063)	ページ P69~83	日本語	中国語訳 文	訳文出典 (《我》①, ②, ③)	評価 (○, ×, s, p l)
データ2	番号 (064~(172)	ページ P84~101	中国語	日本語訳 文	出典(作品 名)	評価 (○, ×, s, p l)



データ 1(日中対訳小説)の中国語訳文の出典について

3 人の訳文が同じ場合、于雷の《我是猫》(《我》①)を代表として採用する(出典は同①③で示す)。一方、刘振瀛の《我是猫》(《我》②)と尤炳圻の《我是猫》(《我》③)が于雷の《我是猫》(《我》①)と違う場合、それぞれが比較できるよう 2 人の訳文も同時に採用しておく。また、この中に、どちらかが于雷の《我是猫》(《我》①)と同じである場合にはその訳文を省略する。

データ 2(中日対訳小説)の出典について

魯迅の短篇小説《呐喊》から選んだ作品名を表わす。

評価について

アンダーライン「  」は文の主題、「φ」は主題が省略されたことを示す。日本語も中国語も同じで主題が省略され、或いは顕現される場合は「○」で、違う場合は「×」で表わす。データ 1 において、日本語の 2 つの連続文は中国語の 1 つの複文に相当対訳する場合は「s」を「○」或いは「×」の後に付けて表わす。また、日本語の第 2 文を 2 つの文(以上)に訳された例文もあるので、このような用例は「○」或いは「×」の後に「p 1」を付けておく。

主題が顕現された文について

「顕・義」は「使用すべき所なので、使用しているパターン」(主題の義務的な提示)を、「顕・恣」は「使用しなくてもいいのに使用しているパターン」(恣意的な提示)を指す。

### 3-1-2 分析方法

分析方法については、日本語と比較して中国語の主題はどのような場合に省略され、どのような場合に顕現するのかを、日中対訳小説(原文:『吾輩は猫である』, 訳文:《我是猫》)における主題の省略及び顕現の対応性及び中日対訳小説(原文:《阿Q正传》、《孔乙己》, 訳文『阿Q正伝』、『孔乙己』)における主題の省略及び顕現の対応性、そして日中対訳小説(『吾輩は猫である』)における翻訳文が訳者間で一致しないものと言う、3 つの視点から考察してみたいと思う。具体的に言えば、第 2 節の日中対訳小説における主題の省略及び顕現の対応性については、日本語では主題が省略される場合(3-2-1)と主題が顕現される場合(3-2-2)の 2 つのパターンに分け、それぞれに対応する中国語直訳文の場合、主題の省略及び顕現がどのような特徴を持っているかについて検討する。また、第 3 節の中日対訳小説における主題省略及び顕現の対応性については、中国語では主題が省略される場合(3-3-1)、中国語では主題が顕現される場合(3-3-2)、中国語では 1 つの複文となる場合(3-3-3)と中国語では 2 文目が多数文となる場合(3-3-4)の 4 つに分けて考察する。さらに、第 4 節の翻訳文が訳者間で一致しないもの

については、日本語では主題が省略される場合(3-4-1)と日本語では主題が顕現される場合(3-4-2)の2つに分けて論ずる。これには翻訳者の訳し方の問題も含まれるので、どちらが正しいかの判断はなかなか困難である。しかし、この中にもより適当である訳文を選ぶことは出来ると思う。そこで、第4節では訳者の文章に対する理解の差異によって、中国語対訳文における主題の省略及び顕現がどのような特徴を持っているかについて検討する。

以上で述べた分析方法をまとめて次の表2に示す。

表2 両語の対応性の比較方式

中国語 \ 日本語	略題 (必ず／普通)	顕題(普通) (略題不可能、略題可能)
略題 (必ず／普通)	○	×
顕題 (普通) (略題不可能、略題可能)	×	○
1つの複文	○／×	○／×
多数(2つ以上)文	○／×	○／×
どちらも(両方／状況)ある	○／×	○／×

(注：○／×は日本語も中国語も同じで主題が省略され、或いは顕現される場合と、違う場合の両方があることを指す)

## 第2節 日中対訳小説における主題の省略及び顕現の対応性

本研究では日中対訳小説から63例を採集した。その中には訳者間の文章に対する理解の差異によって、翻訳文が一致するものと一致しないものがある。本節ではその訳者間で一致したものを中心にし、連続する2つの文において、日本語では2文目の主題が省略される場合と顕現される場合に、それに対応する中国語ではどのように訳されるかについて検討する。このような対訳用例は63例の中に52例があった。それぞれの用例数を以下の表3にまとめて示す。

表3 日中対訳小説における対応性とその用例数

中国語訳 \ 日本語	略題	顕題
略題	9例	0例
顕題	10例	18例
1つの複文	5例	2例
多数(2つ以上)文	4例	4例

### 3-2-1 日本語では主題が省略される場合

#### 3-2-1-1 中国語も主題が省略される場合

日本語は2つの連続文において、2文目の主題が省略される場合、中国語に訳されても、同じく主題が省略された例は52例中に9例が見つかった。このことから両言語間に共通点が見られるようである。

データ1: (016), (022), (026), (029), (038), (047), (051), (053), (054)

以上に採集した9例は、同一の主題「吾輩は」、「わたしは」等が続く場合、2文目の主題が省略されるという用例である。つまり、日本語の主題の省略条件を参考にしてみると、省略文の内容に制約がないことに限って、最も主題性が高い要素(主題)から優先させる主題の省略文である。ここで、その中から2つの例文を挙げて、両言語の主題の省略がどのような共通点を持っているかについて見てみたい。

(016)猫などはそこへ行くと単純なものだ。Φ食いたければ食い、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。『吾』  
猫族面对这类问题，可就单纯得多。Φ想吃就吃，想睡就睡；恼怒时尽情地发火，流泪时哭它个死去活来，…《我》①

(022)この煩悶の際吾輩は覚えず第二の真理に逢着した。「すべての動物は直覚的に事物の適不適を予知す」真理はすでに二つまで発明したが、Φ餅がくっ付いているので毫も愉快を感じない。『吾』  
正烦闷之时，咱家忽地又遇到了第二条真理：“所有的动物，都能直感地预测吉凶祸福。”  
Φ真理已经发现了两条，但因年糕粘住牙，一点也不高兴。《我》①

(016)では、主題“猫族”(「猫などは」)はピリオドを越えて“想吃就吃，想睡就睡；恼怒时尽情地发火，流泪时哭它个死去活来，…”(「食いたければ食い、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く」)まで影響を及ぼし、文をまとめる働きをしているのが見られる。それは先行文の“猫族”(「猫などは」)が主題として提示された事を意味しており、文と文を繋げるという主題の基本機能が作用しているのである。つまり、それは書き手である「私の視点」が、そこまで説明しているということを意味しているのである。この2つの連続する文において、先行文の主題“猫族”(「猫などは」)は2文目の省略文に話題の導入機能として働いていると言える。同

様に、(022)では、先行文には主題“咱家”(「吾輩は」)は話題の導入機能の働きにより、後ろの文に結束性を与えている。2文目では先行文の主題“咱家”(「吾輩は」)を受けて、主題が姿を表さない。主題の省略によって、2つの文の間に直接的な意味関係も認められるからである。

日中対訳小説において、日本語も中国語も主題が省略される対訳例文を以上のように分析して見ると、主題の省略文はその内容に制約がないときに限って、最も主題性の高い要素(主題)から優先させる。それは中国語においても日本語においても両方とも主題の省略の条件として認められている。そして、主題の省略によって結び付けられた2つ(以上)の文は強いまとまりを持った文の印象を与える。

### 3-2-1-2 中国語では主題が顕現される場合

日本語では主題が省略されるが、中国語では顕現される例文は52例中10例である。これは以下のように2つのパターンに分けられると思う。

#### 3-2-1-2-1 時間的な前後関係が存在するとき

連続する文において、2つの文の間に、時間的な間隔が存在するとき、日本語では2文目の主題が省略されるが、それに対応する中国語では主題が顕現される。このような対訳例文は10例の中に1例が見つかった。以下にそれを挙げる。

データ1：(042)

(042)細君は迷惑そうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と $\phi$ 茶を注ぎ易えて迷亭の前へ出す。

女主人怪为难的放下针线，便来到客厅。

“叫您久等，他快回来了吧？”女主人说着，重新斟了一杯茶送到迷亭面前。

(顕・義)

《我》①

(042)では、日本語は先行文の主題「細君は」を受け、2文目の同一の主題が姿を表さなくても、先行文と緊密に繋がっているのに対し、中国語の方は、2文目の冒頭に“女主人”(「細君は」)を補っている。2つの文の関係を見てみると、時間的な間隔が存在するようである。中国語の場合、もしそれを省略されると、“说着，重新斟了一杯茶送到迷亭面前”(「怪为难的放下针线，便来到客厅」)というのは誰についての解説であるかがはっきりと読み取れないようになる。従って、中国語は2文間が時間的な間隔が存在するときに主題を顕現しなければならない。

#### 3-2-1-2-2 強調されるとき

連続する文において、日本語では2文目の主題が省略される場合、中国語では2文目の主題を強調するために、それが省略されず顕現する場合もある。このような例文は10例の中に9例があった。

データ1: (004), (012), (017), (019), (024), (033), (043), (050), (055)

以下で、例(004)、(012)について検討する。

(004)彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活発な徴候をあらわしている。

Φその癖に大飯を食う。

他由于害胃病，皮肤有点发黄，呈现出死挺挺的缺乏弹性的病态。可他偏偏又是個饕餮客，…(顕・恣)

《我》①

(012)すると主人は高利貸にでも飛び込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見る。

Φ何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。

这时，主人活像看见债主闯进家门似的，满面忧色地向正门望去。他似乎讨厌挽留拜年的客人陪他饮酒。(顕・恣)

《我》①

中国語の場合について説明する。(004)では、2文の間には転換関係(中国語の場合は“可”という接続詞で表わす)があり、2文目以降に切り目が付けていない。そして、主題“他”(「彼は」)が省略されずに顕現されることによって、主題“他”(「彼は」)については“偏偏又是個饕餮客”(「その癖に大飯を食う」)という解説が強調されるようになる。(012)では、先行文の主題が2文目に引き継がれ、その動きや性格について説明している。この場合、それを強調するために主題“他(主人)”(「主人は」)が顕現される。

日中対訳小説において日本語では主題が省略される場合、中国語ではそれを顕現する対訳例文を見てみると、「時間的な前後関係が存在するとき」、「強調されるとき」では、日本語は主題の省略が可能であるが、中国語の場合は主題が省略されずに顕現しなければならないようである。そこで、両言語における主題の顕現の相違について、中国語の主題の顕現の1つの特徴が見られる。

### 3-2-1-3 中国語では1つの複文となる場合

日本語の2つの連続文では、2文目の主題が省略されてもピリオドを使って前文と後文をスムーズに繋げられるようであるが、それに対応する中国語では2つの文を切らないで「逗号」(コンマ)で繋いで、前文の主語が2文目までかかっている場合がある。そうして、日本語は短い文でも主語をかなり省略できるが、中国語は英語ほどではないに

しろ、ある程度主語が必要なので、「逗号」(コンマ)で繋いでいかねばならないのである。このような対訳用例は 52 例中 5 例があった。ここで、この 5 例を用いて、中国語の複文(一般的に複数の分句から成る文)はどのような特徴を持っているかについて 2 つに分けて説明する。

### 3-2-1-3-1 同一主語の場合

中国語では複文の各分句の主語が同じであるとき、主語はその中の 1 つの分句にだけ現れ、その他の文句には現われないのが普通である。そして、その複文の主語は最初の分句にだけ現われるときがある。この文例は 5 例の中に 4 例があった。

データ 1 : (005), (032)《我》①, (035), (036)

(005)吾輩はすでに十分寝た。Φ欠伸がしたくてたまらない。『吾』  
咱家已经睡足，Φ要打呵欠，忍也忍不住。《我》①

(032)私はまた水を見る。するとΦはるかの川上の方で私の名を呼ぶ声が聞こえるので  
す。『吾』  
我又向水面望去，这时，Φ只听从远远的上游传来声音，呼唤我的名字。《我》①

(035)吾輩は急に動悸がして来た。Φ座蒲団の上に立ったまま、木彫の猫のように眼も  
動かさない。『吾』  
我顿时不寒而栗，Φ站在垫子上，像一座木雕，眼珠都不敢转。《我》①

(036)吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。  
Φ失敬な奴だ。『吾』  
咱家一再声明，至今还没个名字。可那女仆，一再叫“野猫、野猫”的，Φ真是个冒  
失鬼！《我》①

また、それぞれの分句の主語が全て現れるときもある。このような場合は主語を強調する働きがあるものと考えられる。このような文例は例(032)の《我》②から見られる。

データ 1 : (032)《我》②

(032)私はまた水を見る。するとΦはるかの川上の方で私の名を呼ぶ声が聞こえるので  
す。『吾』  
我又底头看水，就在这时，我听见了有人在遥远的上流呼唤我的名字。《我》②

### 3-2-1-3-2 異なる主語の場合

各分句の主語が異なる時に、複文の中には各分句の主語が互いに交錯していて、文中に現れていない主語をよく見極めないと、前文の意味を正確に理解できないものがある。この文例は5例の中に1例が見つかった。

データ 1 : (003)

(003) 吾輩は時々忍び足に彼の書斎を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。

Φ時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。 『吾』

咱家常常蹑手蹑脚溜进他的书房偷偷瞧看，才知道他很贪睡午觉，不时地往刚刚翻过的书面上流口水。 《我》①

以上のように、中国語では複文の各分句の主語が文中に現れなかったり、一致しなかったりする現象が見られる。また、特に強調するためであれば、それぞれの分句の主語が全て現れるときもある。しかし、各分句の主語が異なる場合には、文意が明確で誤解を生じる可能性がない時にのみ、ある分句の主語は省略可能であり、そうでなければ省略はかなり抑制される。

### 3-2-1-4 中国語では2文目が多数文となる場合

日本語では2文目の主題が省略されることに対して、中国語では2文目を2つ(以上)の文に訳される場合もある。このような対訳用例は52例の中に4例があった。それは以下のような3つのタイプが見つかった。

#### 3-2-1-4-1 2つの主題の顕現文となるとき

この文例は4例の中に2例があった。

データ 1 : (018), (037)

(018) 気の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁するほどの頭脳も学問もないのである。しかしΦ自分が胃病で苦しんでいる際だから、何とかかんとか弁解をして自己の面目を保とうと思った者と見えて、「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だったぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名誉であると云ったような、見当違いの挨拶をした。

可怜我家主子者流，毕竟不具备反驳此说的头脑与学识。但他似乎觉得自己正害胃病，很遭罪，总得诤上几句，辩解一番，以便保全面子。

“你的说法倒很有趣。不过，那位卡莱尔也曾害过胃病哟！”这话仿佛在说：既然卡莱尔害胃病，那么，我害胃病自然也很体面。他回答得牛头不对马嘴。 《我》①

(037)吾輩はその後野良が何百遍繰り返されたかを知らぬ。Φ吾輩はこの際限なき談話を途中で聞き棄てて、布団をすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万八千八百八十本の毛髪を一度にたてて身振いをした。

Φ后来不知又被她叫了几百次“野猫”。咱家不想再听二人喋喋不休的对话，便离开坐垫，从檐廊窜了下去。这时，我的八万八千八百八十根头发全都倒竖起来，浑身打颤。 《我》①

### 3-2-1-4-2 3つの主題の顕現文となるとき

これは4例の中に1例しか見つからなかった。

データ 1 : (044)

(044)細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を促す。さすがの迷亭も少々窮したと見えて、袂からハンケチを出して吾輩をじゃらしていたが「しかし奥さん」と急に何か考えついたように大きな声を出す。「…」

女主人说罢片面之词，便催促迷亭答话。好一个精明的迷亭先生也有些穷于应付了。他从和服长袖里掏出手帕来逗弄咱家。

“不过，嫂夫人，”他忽而好像想起什么似的，高声说，“…” 《我》①

### 3-2-1-4-3 2つの主題の省略文となるとき

この文例は4例の中に1例があった。

(052)如是観によりて、如是法を信じている吾輩はそれだからどこへでも這入って行く。

Φもっとも行きたくない処へは行かぬが、志す方角へは東西南北の差別は入らぬ、平気な顔をして、のそのそと参る。

正因为咱家具有如此观点、奉行如此信条，便想去哪儿就去哪儿。当然，Φ不想去的地方是不肯去的。Φ而心向往之的地方，管它东西南北，无不大摇大摆，从从容容地前去走走。 《我》①

以上4つの対訳文を見てみると、日本語では2文目の主題が省略されているのに対し、中国語では2つ(以上)の文に訳される場合があるようである。それは主題について解りやすく解説するために、境界を設け、その文をより小さな単位に分割することが合理的であると考えられるからである。



### 3-2-2 日本語では主題が顕現される場合

#### 3-2-2-1 中国語も主題が顕現される場合

日本語では主題が顕現される場合、中国語も同じで主題が顕現する例がより多く見られる。このような対訳用例は 52 例の中に 18 例があった。ここで、日本語の主題の顕現条件を参考にし、以下のような 7 つの共通点から見て行きたい。

##### 3-2-2-1-1 既に先行文に現われた指示物に関する情報を与える文のとき

既に先行文に現われた指示物に関する情報を与える文のときには、その指示物が 2 文目の主題として提示されないと、何についての情報であるかがはっきりしないので、中国語においても日本語においても主題を顕現する必要がある。このような対訳例文は 18 例中 6 例である。

データ 1 : (041), (048), (049), (058), (062), (063)

以下で用例(041)、(048)について検討する。

(041)「あと足をこうぶら下げては、鼠は取れそうもない、…どうです奥さんこの猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だと見えて、隣りの部屋の妻君に話しかける。「鼠どころじゃございません。お雑煮を食べて踊りをおどるんですもの」と妻君は飛んだところで旧悪を暴く。

似乎捉弄我一个还不够，他又和隔壁的女主人攀谈起来：“这猫会捉耗子吗？”

“哪里会捉耗子，倒是会吃粘糕跳舞呢。”万不曾想，这娘们儿揭了我的短。

(顕・義)

《我》①

(048)妻君はホホと笑って主人を顧みながら次の間へ退く。主人は無言のまま吾輩の頭を撫でる。

女主人边咯咯地笑，边回头瞧瞧丈夫，到隔壁去了。主人一言不发，抚摸咱家的头。

(顕・義)

《我》①

(041)では、“女主人／这娘们儿”(「妻君に」)が先行文に目的格の対象として現れ、2文目になって“女主人／这娘们儿”(「妻君に」)について“揭了我的短”(「飛んだところで旧悪を暴く」)のような情報を説明しようとしたために、主題化されて2文目の主題“女主人／这娘们儿”(「妻君は」)として提示されている。(048)では、“丈夫”(「主人」)が既に先行文で目的格の対象—“丈夫”(「主人を」)として表れ、2文目になっ

て、それについて、“一言不发，抚摸咱家的头”（「無言のまま吾輩の頭を撫でる」という情報を与えているときに2文目の主題“丈夫”（「主人は」）を提示されないと内容が不明になるのである。

### 3-2-2-1-2 時空間的なギャップが存在するとき

時空間的なギャップが存在するという意味は連続する2つの文において、先行文から2文目が起こるまでに時間的な間隔があるということである。この場合、主題が顕現されることによって、文と文の間にはっきりと切り目が付けられる。これに対応する用例は18例中1例である。以下で例(010)について検討する。

データ 1 : (010)

- (010) 吾輩は少々気味が悪くなったから善い加減にその場をごまかして家へ帰った。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。  
…由于心头不快，便见机行事，应酬几句，回家去了。从此，咱家决心不捉老鼠，…  
(顕・義) 《我》①

(010)では、先行文の“便见机行事，应酬几句，回家去了”（「善い加減にその場をごまかして家へ帰った」）と2文目の“决心不捉老鼠”（「決して鼠をとるまいと決心した」）の間に、時間的な間隔が存在する。つまり、2文目の“决心不捉老鼠”（「決して鼠をとるまいと決心した」）という考えは先行文の“便见机行事，应酬几句，回家去了”（「善い加減にその場をごまかして家へ帰った」）という行動が終わった後である。当然のことながら、主題の顕現が必要である。

### 3-2-2-1-3 他の登場人物が介在するとき

他の登場人物が介在するとき、当然ながら主題は、その登場人物との間に混乱が生じないように中国語も日本語も主題が顕現されるようである。ここでも両言語は共通しているようである。この用例は18例中1例であった。

データ 1 : (059)

- (059) 吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行われつつある間に主人は衣紋をつくろって後架から出て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名刺の影さえ見えぬところをもって見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと見える。名刺こそ飛んだ厄運に際会したものだと思う間もなく、主人はこの野郎と吾輩の襟がみを攫んでえいとばかりに縁側へ叩きつけた。 『吾』

就在咱家和铃木先生表演这幕哑剧的当儿，主人整理一下衣服从厕所里出来，“噢！”的一声打个招呼便坐下，但手里的那张名片已经荡然无存。可见他是对铃木藤十郎的尊姓大名宣判了无期徒刑，将它押进粪坑里了。没容咱家想想这张名片多么倒霉，主人骂道：“这个畜牲！”他揪住咱家脖后的毛，摔到檐廊去。（顕・義） 《我》①

(059)では、同一の主題“主人”（「主人は」）が2文目になっても顕現されている。もし、2文目の主題“主人”（「主人は」）が顕現されず省略すれば、“骂道：“这个畜牲！”他揪住咱家脖后的毛，摔到檐廊去”（「この野郎と吾輩の襟がみを攫んでえいとばかりに縁側へ叩きつけた」）という事は誰についての解説であるかが不明確になるようである。つまり、それは2文目の“鈴木藤十郎”（「鈴木藤十郎君」が登場することにより、混乱を起こらないように主題を顕現する必要があると言える。

#### 3-2-2-1-4 文脈が不整合のとき

2文の間に直接的な意味関係が認められないとき、主題の省略が行われると文と文のまとまりの区分に混乱が生じ不整合になるので、中国語も日本語も主題が顕現されるべきである。これに対応する例文は18例中1例である。

データ1：(020)

以下で例(020)について検討する。

(020) 吾輩はこの刹那に猫ながら一の真理を感得した。

「得難き機会はすべての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。

刹那间，咱家虽说是猫，倒也悟出一条真理：

“难得的机缘，会使所有的动物敢于干出他们并非情愿的事来。”其实，咱家并不那么想吃年糕。（顕・義） 《我》①

(020)では、先行文に主題“咱家”（「吾輩は」）について“虽说是猫，倒也悟出一条真理”（「猫ながら一の真理を感得した」）の説明が述べられ、2文目になって、“咱家并不那么想吃年糕”（「吾輩は実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである」）という別の話が出てくる。ここで、2つの文は全く異なる事柄について述べられている。即ち、2文間では直接的な意味関係がないので主題“咱家”（「吾輩は」）の顕現が必要である。

#### 3-2-2-1-5 語り様式が変化するとき

この語り様式とは書き手が事柄や考えを順序立てて読み手に伝える形である。連続する2つの文において2文目の語り様式がへ変化するとき、中国語も日本語も主題が顕現されるようである。この文例は18例中4例である。

データ1：(014), (015), (045), (046)

以下で例(014)、(015)、(046)について検討する。

(014)二人が出て行ったあとで、吾輩はちょっと失敬して寒月君の食い切った蒲鉾の残りを頂戴した。吾輩もこの頃では普通一般の猫ではない。

二人出门之后，咱家便稍微失敬，将寒月先生吃剩的鱼糕渣全部消受了。这时，咱家已经不再是个寻常的猫。(顕・義) 《我》①

(015)四五日前のことであつたが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝ている間に対い合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食うパンの幾分に、砂糖をつけて食うのが例であるが、この日はちょうど砂糖壺が卓の上に置かれて匙さえ添えてあつた。

那是四五天前，两个女孩早早醒来，趁老夫妻还在梦中，便在餐桌旁相对而坐。他们天天早晨照例将主人的面包分出几份儿，撒上些糖吃。这一天，糖罐正巧就放在餐桌上，甚至还添放只匙子。(顕・義) 《我》①

(046)「…」と細君は女人一流の論理法で詰め寄せる。「曖昧じゃありませんよ、ちゃんと分っています、ただ説明しにくだけの事でさあ」「何でも自分の嫌いな事を月並と云うんでしょう」と細君は我知らず穿った事を云う。

“…” 她以女人特有的逻辑步步逼近。“并非模糊不清，而是了若指掌，只是不大好解释罢了。”“大约是自己讨厌的现象都叫俗调吧？”女主人不知不觉地一语道破。(顕・義) 《阿》

(014)では、先行文に主題“咱家”(「吾輩は」)について将寒月先生吃剩的鱼糕渣全部消受了”(「寒月君の食い切った蒲鉾の残りを頂戴した」)と述べられている。2文目になって、“已经不再是个寻常的猫”(「この頃では普通一般の猫ではない」)という説明が述べられている。ここで、2つの文には何らかの意味関係が存在するようである。つまり、この先行文を言い換えると、2文目のように説明されるようである。(015)では、前後文が同じ主題について解説している。そして、内容も同じような事について述べているようである。だだ、先行文と2文目はこの事について、語り様式が変っているように見える。ここで、書き手は読み手に語り様式が変換することをはっきりと知らせてい

る。そうして、このような主題が顕現されることによって、読み手が文章をより深く理解されると考えられる。同様に、(046)では、先行文の“并非模糊不清，而是了若指掌，只是不大好解释罢了”（「曖昧じゃありませんよ、ちゃんと分っています、ただ説明しにくいだけの事であ」）を言い換えるて、2文目で“大约是自己讨厌的现象都叫俗调吧”（「何でも自分の嫌いな事を月並と云うんでしょう」）という説明の形で述べられている。

### 3-2-2-1-6 書き手の視点が変化するとき

ここで言う視点とは視線が注がれるところである。連続する2つの文において、2文目の主題は書き手の視点が変化するとき、同時に顕現する必要があるようである。このような例文は18例中4例があった。

データ1：(002)，(011)，(013)，(025)

以下で例(002)、(011)について検討する。

(002)主人は鼻の下の黒い毛を捻ながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。

主人掬着鼻下那两撇黑胡，将咱家这副尊容端详了一会儿说：“那就把它收留下吧！”说罢，回房去了。主人似乎是个言谈不多的人，…(顕・義) 《我》①

(011)またいわんや同情に乏しい吾輩の主人のごときは、相互を残りなく解するというが愛の第一義であるということすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の悪い牡蠣のごとく書斎に吸い付いて、かつて外界に向って口を開いた事がない。更何况我家主人者流，连同情心都没有，哪里还懂得“彼此深刻了解是爱的前提”这些道理？还能指望他什么？他像个品格低劣的牡蛎似的泡在书房里，从不对外界开口，…(顕・義) 《我》①

(002)では、先行文は、主題“主人”（「主人は」）について“掬着鼻下那两撇黑胡，将咱家这副尊容端详了一会儿说：“那就把它收留下吧！”说罢，回房去了”と解説している。つまり、自分の目で見た事実を述べているのであるが、2文目では、その自分の視点から離れ、他の人に視点が移ってしまう。そこでは、一般の人の主題“主人”（「主人は」）に対する感じ方が述べられている。(011)では、先行文は書き手が自分の視点から、主題“我家主人者流”（「吾輩の主人のごときは」）について“连同情心都没有，哪里还懂得“彼此深刻了解是爱的前提”这些道理？还能指望他什么？”（「相互を残りな

く解するというが愛の第一義であるということすら分らない男なのだから仕方がない」と解説しているが、2文目は同じ主題“他”(「彼は」)について一般的な人が考えた客観的な事実で表現し、“像个品格低劣的牡蛎似的泡在书房里,从不对外界开口”(「性の悪い牡蠣のごとく書斎に吸い付いて、かつて外界に向って口を開いた事がない」)と説明している。

### 3-2-2-1-7 並立的に解説するとき

この文例は18例中1例しか見つからなかったが、しかし主題が顕現されることによって得られる効果は“顕著である”と言える。これについて以下で説明する。

(030)彼は巨人引力である。彼は強い。

他便是巨人‘引力’。他很强大, …(顕・恣)

《我》①

(030)では、2つの文は同一の主題“他”(「彼は」)について“是巨人‘引力’”(「巨人引力である」)、“很强大”(「強い」)と解説している。ここで、2文目は先行文と並立して、同一の主題“他”(「彼は」)について解説するように見える。この場合、日本語も中国語も2文目の主題“他”(「彼は」)が顕現される。しかし、この2文目の同一主題“他”(「彼は」)の省略が全く不可能というわけではない。つまりこの連続する2つの文で、省略されずに再び主題として提示される方が、主題“他”(「彼は」)の属性を叙述する内容についてより強調されて説明されるようである。そして、他の人との比較をより強調して示すことにもなるようである。

以上のような日中対訳例文において、「既に談話(前文)に現われた指示物に関する情報を与える文のとき」、「時空間的なギャップが存在するとき」、「他の登場人物が介在するとき」、「文脈が不整合のとき」、「会話(文)の内容が急に飛ぶ、或いは語り様式が変化するとき」、「書き手の視点が変化するとき」、「並立的に解釈されるとき」という7つの条件の内どれか1つを満たすとき、日本語においても中国語においても主題が顕現されるようである。そして、主題を顕現することによって、「文章にはっきりと切り目をつける」、「書き手は読み手にトピックが変換したことをはっきりと知らせ、聞き手と新しいトピックを共有することができる」、「直接的な意味関係が認められない文ではそのまとまりの区分に混乱を生じ、不整合になるのを避ける」という効果が得られるようである。

### 3-2-2-2 中国語では1つの複文となる場合

連続する2つの文において、日本語では主題が顕現される場合でも、それに対応する中国語では1つの複文となる文例もある。このような対訳例文は52例の中2例があった。この2つの例文は中国語の複文における同一主題の場合として同じく見られるよう

である。しかし、(006)では複文の主語が最後の分句にだけ現われているのに対し、(031)では複文の主語が最初の分句にだけ現われている。

データ：(006), (031)

(006) 吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。『吾』  
Φ坦率地说，身为一只猫，咱家并非仪表非凡，…《我》①

(031) 彼は強い。彼は万物を己れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。『吾』  
他很强大，将万物引向自己身边，Φ也将房屋引向地面，…《我》①

以上のような2つの日中対訳文において、日本語では2文目の主題が顕現される場合、中国語ではこのような短い2つの文を1つの複文に訳され、その同一の主題が複文の主語として文頭か文の最後に一回も現れればよいと考えられる。

### 3-2-2-3 中国語では2文目が多数文となる場合

連続する2つの文において、日本語では主題が顕現される場合でも、中国語では2文目を2つ(以上)の文に訳される例もある。このような対訳文は52例の中に4例があった。ここで、この4例を用いて、以下のような2つのタイプに分けている。

#### 3-2-2-3-1 2つの主題の顕現文となるとき

この文例は4例中3例である。

データ：(057), (060), (061)

(057) 主人は鼠色の毛布を丸めて書斎へ投げ込む。やがて下女が持って来た名刺を見て、主人はちょっと驚ろいたような顔付であったが、こちらへ御通し申してと言い棄てて、名刺を握ったまま後架へ這入った。  
主人也卷起鼠皮色毛毯，将它扔进书房。少顷，主人看过女仆拿来的名片，略有惊色。  
他口里吩咐让客，却手拿名片走进了厕所。《我》①

(060) 「十年立つうちには大分違うもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりしている。鈴木君は頭を綺麗に分けて、英国仕立のトウィードを着て、派手な襟飾りをして、胸に金鎖りさえピカつかせている体裁、どうしても苦沙弥君の旧友とは思えない。

“十年当中，你变化很大呀！”主人上下打量着鈴木先生。鈴木君梳的是漂亮的分发；

穿的是英国产的毛料西装；系的是华丽的领带；胸前挂一条光闪闪的金链。这风度，无论如何也叫人不敢相信他就是苦沙弥当年的旧友。 《我》①

(061)主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせず、鈴木君の顔を、大道易者のようにじっと見つめている。鈴木君はこいつ、この様子では、ことによるとやり損なうなと疳づいたと見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話頭を移す。

主人听了这番离奇的解释，感到十分意外，便瞪起眼睛，并不搭话，像卦摊上的算命先生似的，盯住铃木的脸。铃木心想：这个家伙！看样子，弄不好我会白跑腿的。有了这样的预感，他才调转话头，指向连主人也不难做出判断的话茬。 《我》①

### 3-2-2-3-2 1つの主題の顕現文と1つの主題の省略文となるとき

この文例は4例の中に1例しか見付からなかった。

(056)主人がこの禿を見た時、第一彼の脳裏に浮んだのはかの家伝来の仏壇に幾世となく飾り付けられたる御灯明皿である。彼の一家は真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金を掛けるのが古例である。

他发现这块秃疮，首先在脑海里闪现的是他家祖传那盏神灯的灯碗，在佛坛上不知摆了多少辈子。他全家信奉真宗。按老规矩，要把不合身份的大把钱破费在佛坛上。

《我》①

このような日中対訳文において、日本語では2文目の主題が顕現されるのに対し、中国語ではその2文目を2つの主題の顕現文及び1つの主題の顕現文と1つの主題の省略文に訳される場合、2文目については境界を設け、その文をより小さな単位に分割することがあると考えられる。

### 第3節 中日対訳小説における主題の省略及び顕現の対応性

本節で中日対訳小説から採集した109例を用いて、連続する2つの文において、中国語では2文目の主題が省略される場合と顕現される場合に、日本語では主題の省略及び顕現が中国語とどのように対応するかについて検討する。また、第2節を参考にしてみると、連続する2つの文において、日本語では主題が省略されるか顕現されることに対して、中国語ではその連続する2つの文を1つの複文に訳されたり、2文目を2つ(以上)の文に訳されたりすることという特徴があるようである。従って、本節では中国語の4つのパターンから両語の対応性を見してみる。ここで、それぞれの用例数を以下の表4にまとめて示す。



表 4 中日対訳小説における対応性とその用例数

中国語 日本語訳	略題	顕題	1つの複文	多数(2つ以上)文	特別な訳文
略題	10 例	6 例	13 例	0 例	0 例
顕題	1 例	51 例	23 例	3 例	2 例

### 3-3-1 中国語では主題が省略される場合

#### 3-3-1-1 日本語も主題が省略される場合

中日対訳文において、中国語では2文目の主題が省略される場合、それを日本語に訳されても、同じく主題が省略された例文は109例の中に10例があった。前述での3-2-1-1と同じ、このことから中日両言語における主題の省略に共通点が見られる。以下で挙げられた対訳例文について、前述での分析を参考にし、予め検討して見たい。

データ 2 : (064), (065), (092), (098), (114), (116), (139), (164), (167), (170)

以下でその中の例(064)、(170)について検討する。

(065)阿Q并没有抗辩他确凿姓赵,只用手摸着左颊,和地保退出去了;ϕ外面又被地保训斥了一番,谢了地保二百文酒钱。 《阿》

阿Qは彼が趙姓である確証を弁解もせず、ただ手を以て左の頬を撫でながら村役人と一緒に退出した。ϕ外へ出るとまた村役人から一通りお小言をきいて、二百文の酒手を出して村役人にお詫びをした。

(170)我暗想我和掌柜的等级还很远呢,而且我们掌柜也从不将茴香豆上账;ϕ又好笑,又不耐烦,懒懒的答他道:“谁叫你教,不是草头底下一个来回的回字么?” 《孔》

わたしが番頭さんになるのはいつのことやら、ずいぶん先きの先きの話で、その上、内の番頭さんは茴香豆という字を記入したことがない。ϕそう思うと馬鹿々々しくなって「そんなことを誰がお前に教えてくれと言った。草冠の下に回数の回の字だ」

(065)では、主題“阿Q”(「阿Qは」)はピリオドを越えて“外面又被地保训斥了一番,谢了地保二百文酒钱”(「外へ出るとまた村役人から一通りお小言をきいて、二百文の酒手を出して村役人にお詫びをした」)まで影響を及ぼし、文をまとめる働きをしていることが窺い知れる。それは先行文の“阿Q”(「阿Qは」)が主題として提示された事を意味しており、文と文を繋げるという主題の基本機能が作用しているのである。つまり、それは、書き手である「私の視点」が、そこまで物語って続いて行くということを

意味している。この2つの連続する文において、先行文の主題“阿Q”(「阿Qは」)は2文目の省略文に話題の導入機能として働いていると言える。同様に、(170)では、先行文に主題“我”(「私が」)は、話題の導入機能の働きにより、後ろの文に結束を与えている。2文目では先行文の主題“我”(「私が」)を受けて、主題が姿を表さない。主題の省略によって、2つの文の間に直接的な意味関係も認められるからである。

以上で、中日対訳例文における中国語も日本語も主題が省略される例文について考察した。主題が省略された文は、その内容に制約<sup>注5)</sup>がないときに限って、最も主題性の高い要素(主題)から優先されると考えられる。ここで、両言語とも主題の省略の条件として認められている。そして、主題の省略によって結び付けられた2つ(以上)の文は強いまとまりを持った文の印象を与える。

### 3-3-1-2 日本語では主題が顕現される場合

これは109例の中に1例しか見つからなかったタイプである。(103)では、前文の「彼に」が指示物として現われ、これに関する情報を更に説明する時に主題化されて2文目の主題となって顕現される。ここで、(103)のような連続文は日本語の主題の顕現条件における「既に談話(文章)に現れた指示物に関する情報を与える文の場合」に属するものであると考えられる。しかし、このような連続文を中国語に訳すると、2の文の前後関係に影響が与えられず2文目の主題が省略されても意味は通じる。

データ2 : (103)

(103)然而着一次的胜利,却又使他有些异样。他飘飘然的飞了大半天,飘进土谷祠,……《阿》  
しかしながらこの一回の勝利がいささか異様な変化を彼に与えた。彼はしばらくの間ふらりふらりと飛んでいたが、やがてまたふらりと土穀祠に入った。

このような対訳文を見てみると、中国語の主題の省略について1つの特徴が見られる。すなわち、連続する2つの文において、2文目が「既に先行文に現れた指示物に関する新たな情報を与える文」のときには、日本語では2文目の主題が顕現されるのに対し、それに対応する中国語ではそれが省略できるようだということである。

### 3-3-2 中国語では主題が顕現される場合

#### 3-3-2-1 日本語も主題が顕現される場合

中日対訳文において、中国語では主題が顕現される場合、それを日本語に訳されると、主題が顕現される例文は109例の中に51例があった。前述での3-2-2-1と同じ、ここから両言語における主題の顕現に共通点が見られる。以下で挙げられた対訳例文に

ついて、前述での分析を参考にし、予め検討して見たい。

### 3-3-2-1-1 既に先行文に現われた指示物に関する情報を与える文のとき

この用例は 51 例中 18 例である。

データ 2 : (068), (071), (073), (084), (085), (097), (119), (128), (130), (132), (135),  
(138), (142), (145), (148), (156), (158), (165)

以下で(068)、(071)について検討する。

(068)又倘若他有一位老兄或令弟叫阿富,那一定是阿贵了;而他又只是一个人:写作阿贵,也没有佐证的。(顕・義) 《阿》  
もしまた彼に一人の兄弟があつて阿富と名乗っていたら、それこそきっと阿貴に違いない。しかし彼は全くの独り者であつてみると、阿貴とすべき左証がない。

(071)有一个老头子颂扬说:“阿 Q真能做!”这时阿 Q赤着膊懒洋洋的瘦伶仃的正在他面前, …(顕・義) 《阿》  
あるお爺さんが阿 Qをもちやげて「お前は何をさせてもソツが無いね」と言った。この時、阿 Qはひじを丸出しにして(支那チョッキをじかに一枚著ている)無性臭い見すばらしい風体で、お爺さんの前に立っていた。

(068)では“他”(「彼に」)が先行文に目的語の対象として現われ、2 文目になって、さらに“他”(「彼に」)について“只是一个人:写作阿贵,也没有佐证的”(「全くの独り者であつてみると、阿貴とすべき左証がない」)のような情報を説明しようとしたため、主題化されて 2 文目の主題“他”(「彼は」)として提示されている。同様に、(071)では、“阿 Q”(「阿 Q を」)が既に先行文で目的語の対象として現われ、2 文目になって、それについて、“赤着膊懒洋洋的瘦伶仃的正在他面前”(「ひじを丸出しにして(支那チョッキをじかに一枚著ている)無性臭い見すばらしい風体で、お爺さんの前に立っていた」)という情報を与えているときに 2 文目の主題“阿 Q”(「阿 Q は」)を顕現する必要がある。

### 3-3-2-1-2 節が挿入されるとき

これについての用例は 51 例中 1 例である。以下で、この例文を挙げて見てみたい。

データ 2 : (152)

(152) 他正听, 猛然间一个人从对面逃来了. 阿Q一看, 便赶紧翻身跟着逃. (顕・義) 《阿》  
彼は聞耳立てていると、いきなり一人の男が向うから逃げて来た。彼はそれを見  
るとすぐに跡に跟いて駆け出した。

(152)では、先行文の主題“他／阿Q”(「彼は／阿Q」)が2文目で現われるとき、挿入した分節—“阿Q一看”(「彼はそれを見ると」)の主語となる同時に、文全体の主題にもなって提示されている。この場合、2文目の主題“他／阿Q”(「彼は／阿Q」)が顕現されるようである。そして、主題が顕現されることによって、この主題についての解説は強調されるようである。

### 3-3-2-1-3 時空間的なギャップが存在するとき

これに対応する例文は51例中11例である。以下でその中の例(086)、(102)について検討する。

データ2: (086), (102), (112), (117), (124), (129), (141), (151), (154), (155), (159)

(086) 他这回才有些感到失败的苦痛了. 但他立刻转败为胜了. (顕・義) 《阿》  
彼は今度こそいささか失敗の苦痛を感じた。けれど彼は失敗を転じて遂に勝ちとした。

(102) 阿Q更得意, 而且为满足那些赏鉴家起见, 再用力的一拧, 才放手. 他这一战, 早望却了王胡, 也忘却了假洋鬼子, 似乎对于今天的一切“晦气”都报了仇; (顕・義) 《阿》  
阿Qはいつそう得意になり、見物人を満足させるために力任せに一捻りして彼女を突放した。彼はこの一戦で王のことも偽毛唐のことも皆忘れてしまって、きょうの一切の不運が報いられたように見えた。

(086)では、先行文の“感到失败的苦痛了”(「失敗の苦痛を感じた」)の後に、“立刻”(「直ぐに」)という時間副詞を用いていると言っても、しかし、現実で、少しでも時間を経たないと、2文目の“转败为胜了”(「失敗を転じて遂に勝ちとした」)という行動が行われない。即ち、時間的な間隔が存在する。同様に、(102)では、先行文の“更得意, 而且为满足那些赏鉴家起见, 再用力的一拧, 才放手”(「いつそう得意になり、見物人を満足させるために力任せに一捻りして彼女を突放した」)と、2文目の“早望却了王胡, 也忘却了假洋鬼子, 似乎对于今天的一切“晦气”都报了仇“(「この一戦で王のことも偽毛唐のことも皆忘れてしまって、きょうの一切の不運が報いられたように見えた」)の間にも時間間隔が存在する。よって日本語においても中国語においても主題が顕現されるようである。

### 3-3-2-1-4 他の登場人物が介在するとき

この文例は 51 例中 7 例である。以下でその中の例(077)、(095)、(101)について検討する。

データ 2 : (077), (095), (101), (106), (121), (123), (146)

(077) 閑人 还不完, 只撩他, 于是终而至于打. 阿Q在形式上打败了, 被人揪住黄辫子, 在壁上碰了四五个响头, 閑人 这才心满一足的得胜的走了, …(顕・義) 《阿》  
閑人 達はまだやめないで彼をあしらっていると、遂に打ち合いになる。阿Qは形式上負かされて黄色い辫子を引き張られ、壁に対して四つ五つ鉢合せを頂戴し、閑人 はようやく胸をすかして勝ち慢って立去る。

(095) 阿Q 以为他要逃了, 抢进去就是一拳. 这拳头还未达到身上, 已经被他抓住了, 只一拉, 阿Q 踉踉跄跄的跌进去, …(顕・義) 《阿》  
相手が逃げ出すかと思ったら、掴み掛って来たので、阿Q は拳骨を固めて一突き呉れた。その拳骨がまだ向うの身体に届かぬうちに、腕を抑えられ、阿Q はよろよると腰を浮かした。

(101) 酒店里的人大笑了. 阿Q 看见自己的勋业得了赏识, 便愈加兴高采烈起来: “和尚动得, 我动不得?” 他 扭住伊的面颊. (顕・義) 《阿》  
酒屋の中の人は大笑いした。己れの手柄を認めた阿Q はますますいい気になってハシャギ出した。「和尚はやるかもしれねえが、おらあやらねえ」彼は、彼女の頬ぺたを摘んだ。

(077)では、先行文で主題“閑人”(「閑人達は」)について解説しているが、2文目になって、同一主題である“閑人”(「閑人達は」)は“阿Q”(「阿Qは」)という他の登場人物が介在することによって、再び提示されている。ここで、もし“閑人”(「閑人達は」)が省略されると、2文目の“心满一足的得胜的走了(「胸をすかして勝ち慢って立去る」)という行動は誰についての解説であるかが、“阿Q”が登場することにより、不明になる。(095)では、同一主題“阿Q”(「阿Qは」)が2文目になっても顕現されている。それも2文目の“他”(「彼」)が登場することにより、顕現される必要があると言える。この例文で、中国語は“他”という登場人物が現われているが、日本語の場合は「腕を抑えられ」という受身動詞が使用されているから、「彼」が現われなくても読み取れる。同様に、(101)では、2文目の会話文の中に、“和尚”(「和尚は」)という他の登場人物が存在するために、主題“他”(「彼は」)が顕現される。

### 3-3-2-1-5 文脈が不整合のとき

この用例は 51 例中 7 例である。以下でその中の例(083)について見てみる。

データ 2 : (083), (087), (088), (143), (147), (150), (166)

(083) 阿Q 以如是等等妙法克服怨敌之后, 便愉快的跑到酒店里喝几碗酒, 又和别人调笑一通, 口角一通, 又得了胜, 愉快的回到土谷祠, 放到头睡着了. 假使有钱, 他便去押牌宝, …(顕・義) 《阿》

阿Qはこういう種々の妙法を以て怨敵を退散せしめたあとでは、いっそ愉快になって酒屋に馳けつけ、何杯か酒を飲むうちに、また別の人と一通り冗談を言って一通り喧嘩をして、また勝ち慢って愉快になって、辮子土穀祠に帰り、頭を横にするが早いか、ぐうぐう睡ってしまうのである。

もしお金があれば彼は博奕を打ちに行く。

(083)は、先行文に主題“阿Q”(「阿Qは」)について、“以如是等等妙法克服怨敌之后, 便愉快的跑到酒店里喝几碗酒, 又和别人调笑一通, 口角一通, 又得了胜, 愉快的回到土谷祠, 放到头睡着了”(「こういう種々の妙法を以て怨敵を退散せしめたあとでは、いっそ愉快になって酒屋に馳けつけ、何杯か酒を飲むうちに、また別の人と一通り冗談を言って一通り喧嘩をして、また勝ち慢って愉快になって、辮子土穀祠に帰り、頭を横にするが早いか、ぐうぐう睡ってしまうのである」)の説明が述べられ、2文目になって、“假使有钱, 他便去押牌宝”(「もしお金があれば彼は博奕を打ちに行く」)という別の話が出てくる。つまり、2文目は先行文と直接的な意味関係が認められないので、主題が顕現されるようである。

### 3-3-2-1-6 語り様式が変化するとき

この用例は 51 例の中に 3 例があった。以下で、その中の(075)について検討する。

データ 2 : (075), (100), (140)

(075)一见面, 他们便假作吃惊的说: “他亮起来了。”阿Q照例的发了怒, 他怒目而视了。“原来有保险灯在这里!” 他们并不怕. 阿Q没有法, 只得另外想出报复的话来: “你还不配…”(顕・義) 《阿》

ちょっと彼の顔を見ると彼等はわざとおったまげて「おや、明るくなって来たよ」

阿Qはいつもの通り目を怒らして睨むと、彼等是一向平気で「と思ったら、空気ランプがここにある」アハハハハと皆は一緒になって笑った。阿Qは仕方なしに他の復讐の話をして「てめえ達は、やっぱり相手にならねえ」

(075)では、先行文に主題“阿Q”(「阿Qは」)について、“照例的发了怒,他怒目而视了”(「いつもの通り目を怒らして睨むと、彼等是一向平気で」)と解説されている。2文目になって、“没有法,只得另外想出报复的话来”(「仕方なしに他の復讐の話をして」)という説明が述べられている。ここで、2つの文の内容が同じであるが、2文目は語り様式が少し変わっているように見える。この場合、2文目の主題が顕現されると考えられる。

### 3-3-2-1-7 書き手の視点が変化するとき

このような用例は51例中4例があった。以下でその中の例(161)について見てみる。

データ 2 : (069), (108), (160), (161)

(161) 举人老爷主张第一要捉赃, 把总主张第一要示众。把总近来很不将举人老爷放在眼里了, … (顕・義) 《阿》

举人老爺は贓品の追徴が何よりも肝腎だと言った、少尉殿はまず第一に見せしめをすべしと言った。少尉殿は近頃一向举人老爺を眼中に置かなかった。

(161)では、先行文は書き手が自分の視点から、“把总”(「少尉殿は」)について“主张第一要示众”(「2文目は同一主題“把总”(「少尉殿は」)について、“近来很不将举人老爷放在眼里了”(「まず第一に見せしめをすべしと言った」)と解説しているが、2文目はまた“把总”(「少尉殿は」)について、“近来很不将举人老爷放在眼里了”(「近頃一向举人老爺を眼中に置かなかった」)という第三者の視点から述べられたものである。この場合、同一の主題でも2文になって主題が顕現されると考えられる。

中日対訳文において、日本語も中国語も主題が顕現される例文について分析して見ると、主題の顕現文において、「既に談話(前文)に現われた指示物に関する情報を与える文のとき」、「節が挿入されるとき」、「時空間的なギャップが存在するとき」、「他の登場人物が介在するとき」、「文脈が不整合のとき」、「会話(文)の内容が急に飛ぶ、或いは語り様式が変化するとき」、「書き手の視点が変化するとき」という7つの条件の内どれか1つを満たすとき、日本語も中国語も主題の顕現が必要となるようである。そして、主題を顕現することによって、「文章にはっきりと切り目をつける」、「書き手は読み手にトピックが変換したことをはっきりと知らせ、聞き手と新しいトピックを共有することができる」、「直接的な意味関係が認められない文ではそのまとまりの区分に混乱を生じ、不整合になるのを避ける」という効果が得られるようである。

### 3-3-2-2 日本語では主題が省略される場合

これも両言語における主題の省略及び顕現の相違の1つであると言える。中日対訳文において、それに対応する用例は109例の中に6例があった。この6例を用いて、以下のように2つのパターンに分けられる。

#### 3-3-2-2-1 時間的な前後関係が存在するとき

この例文は6例中1例である。以下でその例文を挙げて見てみる。

データ2 : (113)

- (113) 阿Q 两手去抱头, 拍的正打在指节上, 这可很有一些痛. 他 冲出厨房门, 仿佛背上又着了一下似的. (顕・義) 《阿》  
彼は両手を挙げて頭をかかえた。  
当たったところはちょうど指の節の真上で、それこそ本当に痛く、Φ夢中になって台所を飛び出し、門を出る時また一つ背中の上をどやされた。

(113)では前後文間に時間的な間隔が存在するために、中国語では2文目の同一の主題“他／阿Q”(「彼は／阿Qは」)を補わないと、2文目の解説は何についての話であるかが不明確になる。一方、日本語では先行文の主題「彼は」を受けて、2文目の同一の主題「彼は」が姿を表さなくても、2文目が誰について解説しているのかが解るようである。そして、主題が省略されることによって、2文目は先行文と緊密に繋がっているようである。

#### 3-3-2-2-2 強調されるとき

この例文は6例中5例である。以下で、その中の例(099)について検討する。

データ2 : (099), (144), (153), (162), (171)

- (099) 阿Q 便在平时, 看见一定要睡骂, 而况在屈辱之后呢? 他 于是发生了回忆, 又发生了敌忾了. (顕・忒) 《阿》  
阿Qはふだんでも彼女を見るときっと悪態を吐くのだ。Φましてや屈辱のあとだったから、いつものことを思い出すと共に敵愾心を喚起した。

(099)では、2文目の同一の主題“他(阿Q)”(「阿Qは」)が顕現されることによって、“发生了回忆, 又发生了敌忾了”(「发生了回忆, 又发生了敌忾了」)という解説が強調されている。また、このような例文で、しばしば、2文目の同一の主題は第3人称代名詞



“他／她”（「彼／彼女」）がよく使われるようである。

中日対訳文における以上のような用例を見てみると、2文間が時間的な前後関係が存在するとき及び2文目の主題についての解説を強調するとき、日本語は主題が省略できるのに対し、中国語は主題を顕現するようである。

### 3-3-3 中国語では1つの複文となる場合

#### 3-3-3-1 日本語では主題が省略される場合

中日対訳用例において、日本語では主題が省略されることにに対し、中国語の原文では1つの複文が現われている用例がある。このような用例は採集した109例の中に13例があった。この13例が以下のような2つのパターンに分けて見られる。

##### 3-3-3-1-1 同一主語の場合

複文の主語が全て同一のものである場合、その複文の主語が最初の分句にだけ現われるときがある。それに対応する例文は13例中に11例があった。

データ 2 : (067), (070), (078), (081), (094), (109), (125), (133), (157), (163), (169)

##### 3-3-3-1-2 異なる主語の場合

複文の主語が異なる場合、前の分句の目的語を受けるときがある。つまり、前にある分句の目的語が次の分句の主語になる。このような例文は13例中に1例があった。

データ 2 : (076)

(076)又仿佛在他头上的是一种高尚的光荣的癩头疮, Φ并非平常的癩头疮了; 《阿》

この時こそ、彼の頭の上には一種高尚なる光榮ある禿があるのだ。Φふだんの斑ら禿とは違う。

また、各分句の主語が互いに交錯するとき、複文の主語を補わなければならない。それは複文の中には、各分句の主語が互いに交錯していて、文中に現れていない主語をよく見極めないと、前文の意味を正確に理解できないからである。それに対応する例文は1例があった。

データ 2 : (096)

(096)在阿Q的记忆上,这大约要算是生平第一件的屈辱,因为王胡以络腮胡子的缺点,向来

只被他奚落, 他从没有奚落他, 更不必说动手了.

《阿》

阿Qの記憶ではおおかたこれは生れて初めての屈辱といってもいい、王は顎に絡まるの欠点で前から阿Qに侮られていたが、阿Qを侮ったことは無かった。他むろん手出しなど出来るはずの者ではなかったが、ところが現在遂に手出しをしたから妙だ。

### 3-3-3-2 日本語では主題が顕現される場合

日本語は2文目の主題が顕現される場合、中国語の複文において、それぞれの分句の主語が全て現れるときもある。このような対訳用例は109例中23例があった。ここで、この23例を用いて、中国語の複文(一般的に複数の分句から成る文)はどのような特徴を持っているかについて2つに分けて説明する。

#### 3-3-3-2-1 同一主語の場合

主語が最初の分句にだけ現われる例文は23例中8例である。

データ2 : (079), (089), (091), (093), (111), (115), (120), (136)

また、それぞれの分句の主語が全て現れるときもある。このような場合は主語を強調する働きがあるものと考えられる。それに対応する例文は23例中7例である。

データ2 : (066), (072), (080), (082), (118), (131), (149)

#### 3-3-3-2-2 異なる主語の場合

前にある分句の目的語が次の分句の主語になる例文は23例の中に3例があった。

データ2 : (104), (110), (134)

また、ある分句の主語の従属性定語を受けるとき、つまり、前にある主語の定語が後の文句の主語になる例文がある。それに対応する例文は23例の中に2例があった。

データ2 : (122), (126)

さらに、各分句の主語が互いに交錯するために全て現れるときの例文は23例中3例である。

データ 2 : (105), (107), (137)

また更に、前にある分句の主語が後の文句のある成分の影響を受けて文中に現われない場合もあると思うが、このタイプの用例も同様の理由で分析用例の中には見出されなかった。

以上のように、中国語では複文の各分句の主語が文中に現れなかったり、一致しなかったりする現象が見られる。また、特に強調するためであれば、それぞれの分句の主語が全て現れるときもある。しかし、各分句の主語が異なる場合には、文意が明確で誤解を生じる可能性がない時にのみ、ある分句の主語は省略が可能であり、そうでなければ省略はかなり抑制されるようである。それに対して、日本語はこのような1つの複文をピリオドで2つの文に分けて表わすのが常態であるようである。即ち、中国語の1つの複文で起こる主語の省略という現象は、日本語の連続する2文で起こる主題の省略とは対照的であると言える。

### 3-3-4 中国語では2文目が多数文となる場合

中国語では2文目が多数文となる場合、日本語では2文目の主題が顕現される場合がある。このような対訳例文は109例の中に3例があった。ここで、以下のような3つに分けて見てみたい。

#### 3-3-4-1 2つの主題の顕現文となるとき

(074)一犯讳, 不问有心与无心, 阿Q便全疤通红的发起怒来, 估量了对手, 口讷的他便骂, 气力小的他便打; 然而不知怎么一回事, 总还是阿Q吃亏的时候多. 于是他渐渐的变换了方针, 大抵改为怒目而视了. 《阿》

そういう言葉をちょっとでも洩そうものなら、それが故意であろうと無かろうと、阿Qはたちまち頭じゅうの禿を真赤にして怒り出し、相手を見積って、無口の奴は言い負かし、弱そうな奴はなぐりつけた。しかしどういものかしらん、結局阿Qがやられてしまうことが多く、彼はだんだん方針を変更し、大抵の場合は目を怒らして睨んだ。

#### 3-3-4-2 3つの主題の顕現文となるとき

(090)他于是并排坐下去了. 倘是别的闲人们, 阿Q本不敢大意坐下去. 但这王胡旁边, 他有什么怕呢? 老实说: 他肯坐下去, 简直还是抬举他. 《阿》

そこで彼は側へ行って並んで坐った。これがもしほかの人なら阿Qはもちろん滅多

に坐るはずはないが、王の前では何の遠慮が要るものか、正直のところ阿Qが坐ったのは、つまり彼を持上げ奉ったのだ。

### 3-3-4-3 1つの主題の顕現文と1つの主題の省略文となるとき

(168)听人家背地里谈论,孔乙己原来也读过书,但终于没有进学,又不会营生;于是愈过愈穷,弄到将要讨饭了。幸而写得一笔好字,边替人家抄抄书,换一碗饭吃。可惜他又有一样坏脾气,便是好喝懒做。他坐不到几天,便连人和书籍纸张笔砚,一齐失踪。《孔》  
人の噂では、孔乙己は書物をたくさん読んだ人だが、学校に入りそこない、無職で暮しているうちにだんだん貧乏して、乞食になりかかったが、幸いに手すじがよく字が旨く書けたので、あちこちで書物の浄写を頼まれ、飯の種にありつくことが出来た。ところが彼には一つの悪い癖があって、酒が大好きで飲みだすと怠け出し、注文主も書物も紙も何もかも、たちまちの中に無くしてしまう。

また、(127)、(172)のような特別な文例も見つかった。これらは訳し方の問題もあるが、(127)では、日本語も中国語も同一の主題“他／阿Q”(「彼は／阿Qは」)が省略されず顕現されている。しかし、日本語は2文目で主題「彼は」について「直覚的に彼の「食を求める」道はこんなまだるっこいことではいけない思ったから、遂に静修庵の垣根の外へ行った」と解説している。それに対応する中国語は、2文目の主題“他”(「彼は」)について単に“终于走到静修庵的墙外了”(「遂に静修庵の垣根の外へ行った」)としている。(172)では、日本語は2文目で「その手を見ると泥だらけで、足で歩いて来たとは思われないが、果してその通りで」という分節が現われているのに対して、中国語の場合は、“见他满手是泥,原来他使用这手走来的”という分節が先行文に表わされている。

(127)阿Q并不赏鉴这田家乐,却只是走,因为他知觉的知道这与他的“求食”之道是很辽远的。但他终于走到静修庵的墙外了。《阿》  
阿Qはこの田家の楽しみを鑑賞せずにひたすら歩いた。彼は直覚的に彼の「食を求める」道はこんなまだるっこいことではいけない思ったから、彼は遂に静修庵の垣根の外へ行った。

(172)我温了酒,端出去,放在门槛上。他从破衣袋里摸出四文大钱,放在我手里,见他满手是泥,原来他使用这手走来的。不一会,他喝完酒,便又在旁人的说笑声中,坐着用这手慢慢走去了。《孔》  
わたしは爛した酒を運び出し、闕の上に置くと、彼は破れたポケットの中から四文銭を掴み出した。その手を見ると泥だらけで、足で歩いて来たとは思われないが、

果してその通りで、彼はみな笑い声の中に酒を飲み干してしまうと、たちまち手を支えて這い出した。

以上のような中日対訳用例を見てみると、日本語では2文目の主題が省略されたり、顕現されるのに対し、中国語では2つの主題の顕現文及び3つの主題の顕現文となるものと1つの主題の顕現文と1つの主題の省略文となるものに訳される場合もあるようである。このときも、2文目については境界を設け、その文をより小さな単位に分割することがあると言える。

#### 第4節 翻訳文が訳者間で一致しないもの

前述で中日対訳小説から採集した63例の中に、中国語では訳者の文章に対する理解の差異によって訳者間が一致しないものがあると述べた。このような用例は63例中11例である。本節で日本語では主題が省略される場合と主題が顕現される場合の2つに分けて、それぞれに対応する対訳文を挙げて検討して見たい。まず、その用例数を以下の表5にまとめて示す。

表5 翻訳文が訳者間で一致しないものの用例数

日本語 中国語	略題	顕題
どちらもある(略題／顕題)	10 例	1 例

##### 3-4-1 日本語では主題が省略される場合

日本語では2文目の主題が省略される用例において、中国語では訳者間が一致しない例文は11例中10例である。

データ1：(001), (007), (009), (021), (023), (027), (028), (034), (039), (040),

この中から以下のような3例を挙げて、訳者の訳し方の相違について独自の考えで分析して見たい。

- (001) 吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えて見た。Φ別にこれという分別も出ない。『吾』  
咱家蹲在池畔，思量着如何是好，Φ却想不出个好主意。《我》①／《我》③  
我坐在池塘前寻思起来：“我该怎么办呢？”我一时想不出好注意来。《我》②

- (009) 吾輩は彼と近付になってから直ぐにこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなま

じい己れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である。Φいつその事彼に自分の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。

Φ自从和他混熟以来，咱家立刻掌握了这个诀窍。像现在这种场合倘若硬是为自己辩护，形势将越弄越僵，那可太蠢。Φ莫如索性任他大说而特讲自己的光荣史，暂且敷衍它几句。

《我》①

我和他接近后，立即掌握了这个诀窍，所以面临这种场合，如果硬要为自己辩解，那就会使形势变得益发对自己不利，自然是划不来。于是我盘算着：不如干脆让他吹一通过关斩将的功劳，将他应付过去算了。

《我》②

我跟他接近以后，立刻就明白了这个诀窍。现在也是一样，要是不痛不痒地替自己辩护把形势越弄越坏，反而是最不聪明的。Φ倒不如让他自吹自擂一番敷衍过去的好。

《我》③

(023)吾輩は猫には相違ないが物の情けは一通り心得ている。Φうちで主人の苦い顔を見たり、御三の剣突を食って気分が勝れん時は必ずこの異性の朋友の許を訪問していろいろな話をする。

不错，咱家是猫；但对于男女之情，却也略知一二。Φ在家里每当见到主人的哭丧脸、或是遭到女仆的责骂而心头不快时，定要拜访那位异性好友，向她倾诉衷肠。

《我》①

我虽是猫儿，却是解得风情的。在家里，每当我看见主人阴沉的脸或受到阿三恶意的对待而情绪郁闷时，总要去访问这位异性朋友，互相聊天。

《我》②

我虽然不过是一只猫，但却不是不通情意的。每当看到主人的愁眉哭脸，或者受了阿三的责骂，心里憋闷的时候，我就必定去访问这位异性朋友聊天。

《我》③

(001)において、日本語は1文目の主題「吾輩は」を受けて、2文目では主題が姿を表さないのに対して、中国語の方は、《我》②の2文目の主題“我”を補っている。ここで、訳者は主題を顕現させることによって、2文間での時間的なギャップを表現しているように見える。また、《我》①では主題“咱家／我”を受けて、2文目末までかかってくる、2つの文を緊密に繋いでいる。従って、《我》②の訳文はより不適當であるように思う。(009)では、2つの文間に因果関係があり、主題「吾輩は」は単に1文目の内容に関わるだけではなく、ピリオドを越えて2文目「～と思案を定めた」にも関わることによって、この2つの文に強いつながりをつけている。中国語訳の場合は例(016)を参考にして見れば、主題の省略が可能である。《我》①と《我》③の訳文はそれに対応している。しかし、《我》②の訳文が省略されないことについて考えてみたい。《我》③の訳文で2文目の始めに“于是我盘算着：～”（従って、私は思案を定めた）という話から始まった。中国語の文章で使われている冒号「：」（コロン）が動詞の後ろに置かれている。中国語の冒号（コロン）について『中国語⇄日本語翻訳』は「冒号とは一つの句の中の、やや大きな停頓を示すもので、その下にまとまった思想内容を従えるものである」

と言う。したがってこの冒号によって、2つの文の間隔が少し広げられ、2文目の主題“我”（「吾輩は」）が顕現させられるからであると考えられる。(023)の2つの文間が「前提—帰結」という関係にあるように見える。1文目の属性叙述文は文連続で叙述する要素を導入する働きを果たす。2文目の事象叙述文は先に設定された属性を帯びた主題が動くという展開の機能を果たすと考えられる。この型の主題が省略されやすいという現象が現れているように思う。一方、中国語訳文において、《我》②と《我》③は主題が省略されずに顕現させている。この主題“我”（「吾輩は」）の省略を選択した場合と顕現を選択した場合では解釈が異なるようである。主題が省略された場合、2文の関係は緊密に繋がれ、“咱家对于男女之情略知一二”（「吾輩は物の情けが一通り心得ている」）という事とは2文目で述べたことである。主題を顕現させた場合、“咱家对于男女之情略知一二”（「吾輩は物の情けが一通り心得ている」）と言えば他にもあると示唆しているように思う。

### 3-4-2 日本語では主題が顕現される場合

それに対応する例文は172例中1例である。(008)において、日本語では2文目の主題「吾輩は」が「語り様式の変化」という条件によって顕現されるが、その中国語の訳文の場合は《我》①では、それが省略され、《我》②と《我》③では顕現されている。

《我》②では2文目を2つの文に分けて、それぞれに主題“我”を顕現させて訳されている。ここで、《我》①の訳文は不相当であるように思われる。日本語の原文と同じように前後文の語り様式が変化する場合等に2文目の主題が顕現されることがある。なぜなら、もし2文目の主題“咱家”が省略されれば、誰について語っているかがはっきり分からなくなるからである。また、《我》②と《我》③の相違について、《我》③では“为了考察他无知到什么程度”（「彼がどのくらい無学であるかを試してみようと思って」）という目的が強調され、主題“我”（「吾輩は」）について“跟他作了如下的回答”（「左の間答をして見た」）と解説しているが、《我》②では感情形容動詞「思う」で切って、“想”（「思う」）を主題“我”の後に付けて文頭に現わしている。その主題“我”（「吾輩は」）について“要试试它不学无术到何等程度”（「彼がどのくらい無学であるかを試してみる」）と解説している。次には、再び主題“我”が提示され、それについて“和它进行了如下的对话”（「左の間答をして見た」）と説明しているようである。ここで、訳者は2つの文に分けることによって、境界を設け、その2文目を小さな単位に分割しようとしたと考えられる。

(008) 吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々軽侮の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試してみようと思って左の間答をして見た。『吾』  
咱家一听它的名字，真有点替它脸红，并且萌发几丝轻蔑之意。Φ首先要测验一下他

何等无知，对话如下：… 《我》①  
我一听到它的名字，便觉得有点不是滋味。同时又对他有点蔑视之意。我首先想到要试试它不学无术到何等程度。于是，我和它进行了如下的对话：… 《我》②  
 一听他的名字，我有些不安起来，同时也起了几分轻蔑之感。为了考察他无知到什么程度，我就跟他作了如下的回答：… 《我》③

これらの用例から、訳者の文章に対する理解の相違によって訳し方が異なる場合もあるようである。どちらが適当であるかの判断は困難であるが、この中により適当である訳文を選ぶことが出来るようである。翻訳作品の中で起こった訳者間の不一致という現象は、訳者が単なるひとつの言語の特徴、または習慣にのみこだわるのではなく、文の性質、構文要素や表現意図などとも絡んでくるのではなかろうかと考える。

## 第5節 まとめ

第3章では日中(日中)対訳小説を用いて、その中から採集した172例について、日中(中日)両言語における主題の省略及び顕現の対応性に関する対照研究を行った。本節では日中対訳例文(原文：日本語／訳文：中国語)と日中対訳例文(原文：中国語／訳文：日本語)の2つに分けて、両言語間の主題の省略及び顕現に関する共通点及び相違点をまとめておく。

### 3-5-1 日中対訳例文から見た両言語間の共通点及び相違点

日中対訳小説から採集した用例は172例中63例である。この中に、3人の訳者間の文章(日本語の原文)に対する理解が一致するものは52例があり、一致しないものは11例があった。即ち、日本語では主題が省略され場合及び顕現される場合、中国語訳では以下の表6にまとめたように対応している。

表6 日中対訳小説における両言語の対応性とその用例数

中国語訳 \ 日本語		略題	顕題
訳者間で一致するもの(52例)	略題	9例	0例
	顕題	10例	18例
	1つの複文	5例	2例
	多数(2つ以上)文	4例	4例
訳者間で一致しないもの(11例)	どちらもある(略題／顕題)	10例	1例

日中対訳例文に関する考察から中日両言語における主題の省略及び顕現の規則性を



まとめてみると、次のような共通点及び相違点があるようである。

共通点：

1. 日本語においても中国語においても主題が省略された文は、その内容に制約がないときに限って、最も主題性の高い要素(主題)から優先されるようである。そして主題が省略されることによって、結び付けられた2つ(以上)の文は強いまとまりを持った文の印象を与えるようである。
2. 日本語においても中国語においても主題が顕現されるものとして、
  - (1)既に談話(前文)に現われた指示物に関する新たな情報を与える文のとき
  - (2)時空間的なギャップが存在するとき
  - (3)他の登場人物が介在するとき
  - (4)文脈が不整合のとき
  - (5)様式が変化するとき
  - (6)書き手の視点が変化するとき
  - (7)並立的に解説するときという7つの条件の内、どれか1つに該当するとき、日本語においても中国語においても主題を顕現することができる。そして、主題を顕現することによって、「文章にはっきりと切り目をつける」、「書き手は読み手にトピックが変換したことをはっきりと知らせ、聞き手と新しいトピックを共有することができる」、「直接的な意味関係が認められない文では、そのまとまりの区分に混乱を生じ、不整合になるのを避ける」という効果が得られるようである。

相違点：

1. 日本語においては主題が省略されるが、中国語では顕現されるものとしては、
  - (1)時間的な前後関係が存在するとき
  - (2)強調されるときの2つの場合があるようである。
2. 日本語においては主題が顕現されるが、中国語ではそれが省略されるものとしては、既に談話(文章)に現れた指示物に関する新たな情報を与える文のときがある。
3. 日本語の連続文する2つの文では、2文目の主題が省略されてもピリオドを使って前後文を繋げられるが、それに対応する中国語では2つの文を切らないで「逗号」(コンマ)で繋いで、前文の主語が2文目までかかっている場合が多く見られる。ここで、中国語の1つの複文で起こる分句の主語の省略という現象は日本語の主題が省略された文で起こる主題の省略とは対照的であるようである。そして、中国語の複文の各分句の主語が同一の場合、その複文の主語が最初の分句にだけと、それぞれの文の主語が全て現われるときもあるようである。主語が全て現れるときに主語を強調する働

きがあると考えられる。また、異なる主語の場合に、各分句の主語を全て提示する必要があるようである。日本語では主題が顕現される場合、中国語の複文の各主語が同一の場合、最初の分句にだけと最後の分句にだけ現われているときがある。

4. 日本語では2文目の主題が省略され、或いは顕現される場合、中国語では2つ(以上)の文に訳される場合がある。そして、日本語の2文目の主題が省略される場合、それに対応する中国語では、2つの主題の顕現文、3つの主題の顕現文と2つの主題の省略文となるときがあるようである。また、日本語の2文目の主題が顕現される場合、それに対応する中国語では、2つの主題の顕現文、1つの主題の顕現文と1つの主題の省略文となるときが見られる。このようなとき、2文目の主題について解りやすく解説するために、その境界を設け、その文をより小さな単位に分割することがあるからであると考えられる。

なお、日中対訳小説から見た訳者間の不一致について、訳者の文章に対する理解の差異によって訳し方が異なった結果と言える。夏目漱石の『吾輩は猫である』から用例を採集する際、一番よく省略されたのは主題「吾輩は」である。彼はこの作品を書いたとき、いかに「吾輩は」を使うかに随分苦勞したに違いない。「吾輩は」の使い方は実に巧みで、要所にそれを使うことによって、話の流れに上手くまとまりを付けているように見える。漱石の作品を読む私達は、「吾輩は」から次の「吾輩は」まで彷徨うことによって、漱石の微妙な表現意図を読み取っていくのが重要であると考えられる。

### 3-5-2 中日対訳例文から見た両言語間の共通点及び相違点

中日対訳小説から採集した用例は172例中109例である。表4を参考にして、以下の表7にまとめた。

表7 中日対訳小説における両言語の対応性とその用例数

中国語 日本語訳	略題	顕題	1つの複文	多数(2つ以上)文	特別な訳文
略題	10例	6例	13例	0例	0例
顕題	1例	51例	23例	3例	2例

先の日中対訳例文から見た主題の省略及び顕現に関する両言語間の共通点と相違点の中に、中日対訳小説から取上げた例文についても当てはまる場所があるようであるが、しかし、また更に用例数を増やすことによって、両言語間における主題の省略及び顕現に関する新たな規則性が見出されたので、以下に中日対訳小説から見た中日両言語間の共通点と相違点としてまとめておく。

共通点：

1. 中国語においても日本語においても主題が省略されるものとして、主題が省略された文はその内容に制約がないときに限って、最も主題性の高い要素(主題)から優先させるようである。そして主題が省略されることによって結び付けられた2つ(以上)の文は強いまとまりを持った文の印象を与えると考えられる。
2. 中国語においても日本語においても主題が顕現されるものとして
  - (1)既に談話(前文)に現われた指示物に関する新たな情報を与える文のとき
  - (2)節が挿入されるとき
  - (3)時空間的なギャップが存在するとき
  - (4)他の登場人物が介在するとき
  - (5)文脈が不整合のとき
  - (6)会話(文)の内容が急に飛ぶ、或いは語り様式が変化するとき
  - (7)書き手の視点が変化するときという7つの条件の内どれか1つに該当するとき、日本語においても中国語においても主題を顕現することができる。そして、主題を顕現することによって、「文章にはっきりと切り目をつける」、「書き手は読み手にトピックが変換したことをはっきりと知らせ、聞き手と新しいトピックを共有することができる」、「直接的な意味関係が認められない文ではそのまとまりの区分に混乱を生じ、不整合になるのを避ける」という効果が得られる。

相違点：

1. 中国語では主題が省略されるが、日本語では顕現されるものとしては、
  - (1)時間的な前後関係が存在するとき
  - (2)強調されるときの2つの場合があるようである。
2. 日本語訳の連続文する2つの文では、2文目の主題が省略され、或いは顕現される場合、それに対応する中国語では2つの文を切らないで「逗号」(コンマ)で繋いで、前文の主語が2文目までかかっている場合が多く見られる。日本語訳の主題が省略される場合、中国語の複文の各分句の同一の主語が最初の分句にだけ現われるときがある。また、異なる主語の場合に、前にある分句の目的語が次の分句の主語になるときがある。日本語訳の主題が顕現される場合、中国語の複文の各分句の同一の主語が最初の分句にだけとそれぞれの文の主語が全て現われるときがあるようである。ここで、主語が全て現れるときに主語を強調する働きがあると考えられる。異なる主語の場合、前にある分句の目的語が次の分句の主語になるとき、ある分句の主語の従属性定語を受けるときと各分句の主語が互いに交錯するために全て現われるときがあるようである。

3. 日本語訳では2文目の主題が顕現される場合、それに対応する中国語では、2つ(以上)の文に訳される場合がある。そこで、2つの主題の顕現文、3つの主題の顕現文と1つの主題の顕現文と1つの主題の省略文となるときが見られる。このようなときにも、2文目の主題について解りやすく解説するためにその境界を設け、その文をより小さな単位に分割することがあるからであると考えられる。

またさらに、特別な訳文としては、日本語の連続する2つの文においては、2文目の主題が省略される場合、中国語では2文目の1つの分節を先行文の一部となったり、先行文の1つの分節を2文目の1文となったりするときがあるようである。これも訳し方の問題があるが、ここで、このような連続する2文間は緊密な関係が現れると考えられる。

## おわりに

本稿では、中日両言語における主題の省略及び顕現の様相とその対応性を明らかにするために、日中(中日)対訳小説から採取した例文を分析対象とし、両言語における主題の省略及び顕現に関する規則性と、翻訳文から見た両言語間の共通点及び相違点について考察した。その結果をまとめると、以下のように言えると思う。

日本語では2文目の主題が容易に省略できる条件としては、省略文の内容に制約がないときに限って、最も主題性の高い要素(主題)から優先されるようである。そして主題が省略されることによって、結び付けられた2つ(以上)の文は強いまとまりを持った文の印象を与えるようである。このことは中国語文にまで敷衍できるようである。また、日本語においても中国語においても、2文目の主題が顕現される条件としては「節が挿入される時」、「時空間的なギャップが存在するとき」、「他の登場人物が介在するとき」、「文脈が不整合のとき」、「会話(文)の内容が急に飛ぶ、或いは語り様式が変化するとき」、「書き手の視点が変化するとき」、「並立的に解説するとき」のどれか1つに該当するときであるようである。

しかし、両言語における主題の省略及び顕現に関する規則性には相違点もある。まず、時間的な前後関係が存在するときに、日本語では2文目の主題が省略することができるが、この場合、中国語では顕現されるのが見られるようである。また、既に談話(前文)に現われた指示物に関する新たな情報を与える文のときに、中国語では主題を省略することができるが、日本語の場合は逆に顕現されるのも見られるようである。そして、2文目の主題についての解説が特に強調されるときに、中国語では主題が顕現されるようである。

さらに、日本語の連続する2つの文では、2文目の主題が省略されたり、顕現されたりする場合に、それに対応する中国語では、2つの文を切らないで「逗号」(コンマ)で繋いで、前文の主語が2文目までかかっている場合も見られるようである。そして、中国語の複文で起こる2文目の分句の同一の主題の省略及び顕現は、日本語の2文目の同一の主題の省略及び顕現とは対照的であるように思われる。それを以下の表8にまとめて示す。このように、中国語の複文における格分句の主題が全て現れるとき、その主題を特に強調する働きがあるからであろうと思われる。

また、日本語では、2文目の主題が省略される場合及び顕現される場合、それに対応する中国語では2文目を2つ(以上)の文となるときがある。それについても以下の表8にまとめておいた。このような場合は、2文目の同一の主題についてより解りやすく解説するために、その境界を設け、その文をより小さな単位に分割することがより効果的であるからであろうと考えられる。

表 8 日本語と中国語の複文及び多数文との相当対応

中国語 日本語	1つの複文	多数の文
Aは～。φ～。	A～， φ～。	A～。A～。A～。
	A～， A～。	A～。A～。A～。A～。
		A～。φ～。φ～。
Aは～。A～。	φ～， A～。	A～。A～。A～。
	A～， φ～。	A～。A～。A～。A～。
	A～， A～。	A～。A～。φ～。

(注：Aは主題、φは略題記号)

本研究では連続する2つの文に限って、連続文の先行文において主題が先行要素となる用例をより多く取上げ、同一の主題が続く場合、両言語における主題の省略及び顕現の規則性について考察した。しかしながら、先行要素は主題のみならず、連続文では文間に何らかの意味関係があることを前提として、先行文の成分となる何れの名詞句要素でも、それを先行要素とした省略及び顕現が可能であるように思う。しかし、採集した用例文の数や研究時間に制限が存在したため、このような例文について十分な考察ができなかった。したがって、今後、本研究をさらに発展させ、中日両言語間の主題及び顕現に関する共通点と相違点を更に深く精細に分析しようとするなら、他に主題性を持つ名詞句要素の省略及び顕現にも注目することが必要となるであろう。これは今後の研究に期待したい。

## 【謝辞】

最後となりましたが、本研究を進めるに当たり、日頃よりたくさんの御指導、御鞭撻を頂きました丹保健一教授、余健助教授に厚く御礼申し上げます。

また、いつも研究の相談相手となり、良い助言を頂いた身元保証人郡司良昭氏に心から深く感謝致します。ありがとうございました。

## 【注】

- (1), (2)益岡によれば、「叙述」とは「現実世界を対象として表現者が行う概念化」であり、「属性」と「事象」という性格を異にする2つの基本的な類型を認めることができるという。益岡の言う「属性叙述」とは「現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取上げ、それが有する何らかの属性を述べる」もので、「事象叙述」とは「現実世界の或る時空間に実現・存在する事象(出来事や静的事態)」を叙述するものである。具体的には各々の叙述文は次のような文である。

属性叙述文：典型的には名詞述語文

属性形容詞述語文

動詞述語文では「所有」、「能力」、「関係」を表すもの

テンス・アスペクト的に動作性を失い属性叙述文に近づくもの

事象叙述文：典型的には動詞述語文

感情形容詞述語文

事象を表す名詞述語文

- (3)砂川の用いる「非省略」という用語は「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」を指し、「使用すべき所なので、使用しているパターン」のときは「主題の義務的な明示」と呼んでいる。本稿で用いる「主題の顕現」は主題の義務的な提示と恣意的な提示の両方を含んだ表現である。「顕 i」は「使用すべき所なので、使用しているパターン」を、「顕 ii」は「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」を指す。
- (4)恵谷(2004)は主題性について「ある要素が文或いは文脈でどれほど話題の中心として機能するか、後続の文脈に引き継がれやすいかを表す概念であり、機能言語学や類型論によって分析されている」と指摘している。
- (5)恵谷(2004)は省略文の内容制約について、「読み手は主題性の高い要素をまず先行表現として参照しようとするため、それを遮断するための言語的手段が施される必要がある」としている。

## 【引用文献】

- (1)久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店  
——(1982)「談話の構造一日・英語」講座日本語学 12 明治書院
- (2)望月圭子(1986)「漢語的主題結構」『中国語学』日本中国語学会
- (3)山口明穂・秋本守英(2001)『日本語文法大辞典』明治書店
- (4)益岡隆志・野田尚史他著(1995)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- (5)益岡隆志(1995)『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版
- (6)庵 功雄(2005)『新しい日本語入門 ことばのしくみを考える』株式会社スリーエーネットワーク
- (7)庵 功雄・日高水穂他著(2004)『やさしい日本語のしくみ』くろしお出版
- (8)石毓智(2001)〈汉语的主语与话题之辨〉《语言研究》第二期(总第四三期)
- (9)中村明(1991)『日本語レトリックの体系』岩波書店
- (10)鳥井克之(2004)「再論 中国語の単文について(上) —新しい中国語教学文法の再構築を目指して—」『外国語教育研究』第7号
- (11)趙元任(1968)A Grammar of Spoken Chinese University of California Press  
Berkeley and Los Angeles 吕淑湘译《汉语口语语法》商务印书馆北京
- (12)野内良三(1998)『レトリック辞典』株式会社国書刊行会
- (13)香坂順一(1984)『中国語学新辞典』光生館
- (14)香坂順一(1986)『現代中国語文法』光生館
- (15)村松定孝・神鳥武彦(1991)『新版 文章表現辞典』東京堂出版
- (16)渡辺大(2002)「対話における文脈情報及び関連述語辞書を用いた省略補完手法に関する研究」三重大学 041/sh99/2001T-wa

## 【参考文献】

- (1)小川泰生(1989)「日中対照研究—主語の省略について(1) 本論篇」『広島大学総合科学部紀要5:言語文化研究』広島大学
- (2)三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版
- (3)畠 弘巳(1980)「文とは何か—主題の省略とその働き—」日本語教育 41号
- (4)寺倉弘子(1986)「談話における主題の省略について」『月刊言語』15(2)99-105
- (5)砂川有里子(1990)「主題の省略と非省略」『文芸言語研究 言語篇』1815-34
- (6)甲斐ますみ(1995)「省略のメカニズム—談話の構造と関連性および聞き手の推論を中心に—」『岡山留学生センター紀要』31-18
- (7)北原保雄(2005)『明鏡国語辞典 携帯版』大修館書店
- (8)雨宮朋子・林部英雄(1993)「日本語における“談話主題”の省略に関する実験的研究」



『横浜国立大学教育紀要 33』

- (9)清水佳子(1995)「「NP ハ」と「 $\phi$ (NP ハ)」」『日本語類義表現の文法（下）』  
大阪大学大学院
- (10)恵谷容子(2002)「説明文と随筆の文章における主語の省略」早稲田大学日本語教育  
研究  
—(2004)「主題の省略に関する考察—「連続型省略」における容認度の観察  
から」日本語教育
- (11)武田明子 (2003)「日本語における省略の条件に関する一考察」『東京国際大学論叢』
- (12)曾 儀婷(2005)「日本語における主題の省略・非省略について——人称代名詞をめ  
ぐって—」『国際協力研究誌』11(1) 175－193 広島大学院国  
際協力研究科編／広島大学大学院

【資料用例の出典】

- (1)日中対訳小説(原文：日本語／訳文：中国語)例文のデータ 1  
夏目漱石 『吾輩は猫である』青空文庫 2005 年版  
于雷译 《我①》＝《我是猫》 吉林大学出版社 2000 年版  
刘振瀛译 《我②》＝《我是猫》 上海译文出版社 2003 年版  
尤炳圻・胡雪译 《我③》＝《我是猫》 人民文学出版社 2006 年版
- (2)中日対訳小説(原文：中国語／訳文：日本語)例文のデータ 2  
鲁迅 《阿》＝《阿Q正传》、《孔》＝《孔乙己》 中国短篇小说集《呐喊》 北京燕  
山出版社 2004 年版  
井上紅梅訳 『阿Q正伝』、『孔乙己』 青空文庫 2004 年版

資料(1) 日中対訳小説(原文：日本語／訳文：中国語)例文のデータ 1

番号	日本語	中国語訳文	評価
001	吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えて見た。 <u>Φ</u> 別にこれという分別も出ない。	咱家蹲在池畔，思量着如何是好，却想不出个好主意。	《我》① ○ s
		我坐在池塘前寻思起来：“我该怎么办呢？” <u>我</u> 一时想不出好注意来。	《我》② ×
002	主人は鼻の下の黒い毛を捻ながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。 <u>主人</u> はあまり口を聞かぬ人と見えた。	主人捋着鼻下那两撇黑胡，将咱家这副尊容端详了一会儿说：“那就把它收留下吧！”说罢，回房去了。 <u>主人</u> 似乎是个言谈不多的人，…	《我》① ○
003	吾輩は時々忍び足に彼の書斎を覗いて見るが、 <u>彼は</u> よく昼寝をしている事がある。 <u>Φ</u> 時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。	咱家常常蹑手蹑脚溜进他的书房偷偷瞧看，才知道 <u>他</u> 很贪睡午觉，不时地往刚刚翻过的书面上流口水。	《我》① ○ s
004	<u>彼は</u> 胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活発な徴候をあらわしている。 <u>Φ</u> その癖に大飯を食う。	<u>他</u> 由于害胃病，皮肤有点发黄，呈现出死挺挺的缺乏弹性的病态。可 <u>他</u> 偏偏又是个饕餮客，…	《我》① ×
005	吾輩はすでに十分寝た。 <u>Φ</u> 欠伸がしたくてたまらない。	咱家已经睡足， <u>Φ</u> 要打呵欠，忍也忍不住。	《我》① ○ s
006	吾輩は自白する。 <u>吾輩</u> は猫として決して上乘の出来ではない。	<u>Φ</u> 坦率地说，身为一只猫， <u>咱家</u> 并非仪表非凡，…	《我》① × s
007	…おめえはいったいなんだと言った。大王にしては少々言葉が卑しいと思ったが何しろその声の底に犬をも挫しぐべき力が籠っているの <u>で吾輩</u> は少なからず恐れを	但是 <u>我</u> 生得再怎么丑陋，总不至于像主人现在画出来的那副怪模怪样呀。 <u>Φ</u> 先说毛色就不像。	《我》② ○
		但是，无论 <u>我</u> 怎么蹩脚，到底总不是主人所画的那副怪	《我》③ ○ s

	抱いた。しかし挨拶をしないとけんのうだと思ったから「吾輩は猫である。名前はまだない」と <u>Φ</u> なるべく平気を装って冷然と答えた。	<p>样, 首先, 颜色就不对.</p> <p>… “你他妈的是什么东西!” 身为猫中大王, 嘴里还不干不净的! 怎奈它语声里充满着力量, 狗也会吓破胆的。<u>咱家</u>很有点战战兢兢。如不赔礼, 可就小命难保, 因而<u>Φ</u>尽力故作镇静, 冷冷地回答说:</p> <p>“咱家是猫。名字嘛……还没有。”</p>	《我》①	○
008	<u>吾輩</u> は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々軽侮の念も生じたのである。 <u>吾輩</u> はまず彼がどのくらい無学であるかを試してみようと思つて左の問答をして見た。	… “你是个什么东西?” 作为大王来说, 这样用词不太文雅, 可是在那声音深处, 使人感到有一种足以力挫猛犬的力量, 使 <u>我</u> 颇为惶恐. 我想如果不和它寒暄几句, 将是很危险的. 于是 <u>我</u> 竭力装得若无其事的样子, 冷冷地回答道: “在下是猫儿, 还没有名字.”	《我》②	×
		… “你是啥呀?” 这种话作为大王来说虽然略嫌粗鄙; 但声音里却藏得有势足以惊犬的力量, 使 <u>我</u> 颇为惊恐. 不跟他打招呼说不定回出乱子的, <u>我</u> 就装出泰然自若的样子冷冷回答他说: “我是猫, 名字还没有.”	《我》③	○
		<p><u>咱家</u>一听它的名字, 真有点替它脸红, 并且萌发几丝轻蔑之意。</p> <p><u>Φ</u>首先要测验一下他何等无知, 对话如下: …</p>	《我》①	×

009	<p><u>吾輩</u>は彼と近付になってから直ぐにこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である。<u>Φ</u>いつその事彼に自分の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。</p>	<p><u>我</u>一听到它的名字,便觉得有点不是滋味.同时又对他有点蔑视之意.<u>我</u>首先想到要试试它不学无术到何等程度.于是,<u>我</u>和它进行了如下的对话:…</p>	《我》②	○
		<p>一听他的名字,<u>我</u>有些不安起来,同时也起了几分轻蔑之感.为了考察他无知到什么程度,<u>我</u>就跟他作了如下的回答:…</p>	《我》③	○
		<p>自从和他混熟以来,<u>咱家</u>立刻掌握了这个诀窍。像现在这种场合倘若硬是为自己辩护,形势将越弄越僵,那可太蠢。<u>Φ</u>莫如索性任他大说而特讲自己的光荣史,暂且敷衍它几句。</p>	《我》①	○ s
010	<p><u>吾輩</u>は少々気味が悪くなったから善い加減にその場をごまかして家へ帰った。この時から<u>吾輩</u>は決して鼠をとるまいと決心した。</p>	<p>…由于心头不快,便见机行事,应酬几句,回家去了。 从此,<u>咱家</u>决心不捉老鼠, …</p>	《我》①	○
011	<p>またいわんや同情に乏しい<u>吾輩</u>の主人のごときは、相互を残りなく解するということが愛の第一義であるということすら分らない男なのだから仕方がない。<u>彼は</u>性の悪い牡蠣のごとく書斎に吸い付いて、かつて外界に向って口を開いた事がない。</p>	<p>更何况我家<u>主人</u>者流,连同情心都没有,哪里还懂得“彼此深刻了解是爱的前提”这些道理?还能指望他什么?<u>他</u>像个品格低劣的牡蛎似的泡在书房里,从不对外界开口, …</p>	《我》①	○
012	<p>すると<u>主人</u>は高利貸にでも飛び込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見る。<u>Φ</u>何でも年賀の客を受けて</p>	<p>这时,<u>主人</u>活像看见债主闯进家门似的,满面忧色地向正门望去。<u>他</u>似乎讨厌挽留拜年的客人陪他饮酒。</p>	《我》①	×

	酒の相手をするのが厭らしい。			
013	<u>この寒月という男</u> はやはり主人の旧門下生であったそうだが、今では学校を卒業して、何でも主人より立派になっているという話である。 <u>この男</u> がどういうわけか、よく主人の所に遊びに来る。	寒月这个人，大约也是主人的昔日门徒，如今已经出了学门，据说比主人混得阔气多了。不知为什么， <u>他</u> 常到主人家来玩，…	《我》①	○
014	二人が出て行ったあとで、 <u>吾輩</u> はちょっと失敬して寒月君の食い切った蒲鉾の残りを頂戴した。 <u>吾輩</u> もこの頃では普通一般の猫ではない。	二人出门之后， <u>咱家</u> 便稍微失敬，将寒月先生吃剩的鱼糕渣全部消受了。这时， <u>咱家</u> 已经不再是个寻常的猫。	《我》①	○
015	四五日前のことであったが、 <u>二人の小供</u> が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝ている間に対い合うて食卓に着いた。 <u>彼等</u> は毎朝主人の食うパンの幾分に、砂糖をつけて食うのが例であるが、この日はちょうど砂糖壺が卓の上に置かれて匙さえ添えてあった。	那是四五天前， <u>两个女孩</u> 早早醒来，趁老夫妻还在梦中，便在餐桌旁相对而坐。 <u>他们</u> 天天早晨照例将主人的面包分出几份儿，撒上些糖吃。这一天，糖罐正巧就放在餐桌上，甚至还添放只匙子。	《我》①	○
016	<u>猫</u> などはそこへ行くと単純なものだ。 <u>Φ</u> 食いたければ食い、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。	<u>猫族</u> 面对这类问题，可就单纯得多。 <u>Φ</u> 想吃就吃，想睡就睡；恼怒时尽情地发火，流泪时哭它个死去活来，…	《我》①	○
017	<u>主人の心</u> は <u>吾輩</u> のめだまのように間断なく変化している。 <u>Φ</u> 何をやっても長持のしない男である。	<u>主人</u> 的心，像猫眼珠似的瞬息万变。 <u>他</u> 不论干什么，都是个没长性的人。	《我》①	×
018	気の毒ながら <u>うちの主人</u> などは到底これを反駁するほどの頭脳も学問もないので	可怜 <u>我家主子</u> 者流，毕竟不具备反駁此说的头脑与学识。但 <u>他</u> 似乎觉得自己正害	《我》①	×

	<p>ある。しかし<math>\phi</math>自分が胃病で苦しんでいる際だから、何とかかんとか弁解をして自己の面目を保とうと思った者と見えて、「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だったぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名誉であると云ったような、見当違いの挨拶をした。</p>	<p>胃病，很遭罪，总得治上几句，辩解一番，以便保全面子。</p> <p>“你的说法倒很有趣。不过，那位卡莱尔也曾害过胃病哟！”这话仿佛在说：既然卡莱尔害胃病，那么，我害胃病自然也很体面。他回答得牛头不对马嘴。</p>		
019	<p><u>吾輩</u>は猫ではあるが大抵のものは食う。<math>\phi</math>車屋の黒のように横丁の肴屋まで遠征をする気力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛のように贅沢は無論云える身分でない。</p>	<p><u>咱家</u>虽说是猫，却并不挑食。一来，<u>咱家</u>没有车夫家大黑那么一把子力气，能跑到小巷鱼铺去远征；二来，自然没有资格敢说，能像新开路二弦琴师傅家花猫小姐那么阔气。</p>	《我》①	×
020	<p><u>吾輩</u>はこの刹那に猫ながら一の真理を感得した。「得難き機会はずべての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」</p> <p><u>吾輩</u>は実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。</p>	<p>刹那間，<u>咱家</u>虽说是猫，倒也悟出一条真理：“难得的机缘，会使所有的动物敢于干出他们并非情愿的事来。”</p> <p>其实，<u>咱家</u>并不那么想吃年糕。</p>	《我》①	○
021	<p><u>吾輩</u>はどうとう雑煮を食わなければならぬ。<math>\phi</math>最後にからだ全体の重量を椀の底へ落すようにして、あぐりと餅の角を一寸ばかり食い込んだ。</p>	<p>…<math>\phi</math>也就终于非吃年糕不可了。于是，<u>咱家</u>将全身重量压向碗底，将年糕的一角叼住一寸多长。</p>	《我》①	× s
		<p>看来，<u>我</u>是非吃不可啦。最后，<u>我</u>张大了嘴巴，就像把全身的重量都压倒到碗底上一般，猛地对准那块年糕咬了上去，足足咬进了一寸左右。</p>	《我》②	×
		<p><u>我</u>终于不得不吃年糕了。最后<u>我</u>把全身的重量，放进了</p>	《我》③	×

		碗底,使劲地把年糕角咬下一寸来长.		
022	この煩悶の際 <u>吾輩</u> は覚えず第二の真理に逢着した。「すべての動物は直覺的に事物の適不適を予知す」真理はすでに二つまで發明したが、 <u>Φ</u> 餅がくっ付いているので毫も愉快を感じない。	正烦闷之时， <u>咱家</u> 忽地又遇到了第二条真理：“所有的动物，都能直感地预测吉凶祸福。” <u>Φ</u> 真理已经发现了两条，但因年糕粘住牙，一点也不高兴。	《我》①	○
023	<u>吾輩</u> は猫には相違ないが物の情けは一通り心得ている。 <u>Φ</u> うちで主人の苦い顔を見たり、御三の剣突を食って気分が勝れん時は必ずこの異性の朋友の許を訪問していろいろな話をする。	不错， <u>咱家</u> 是猫；但对于男女之情，却也略知一二。 <u>Φ</u> 在家里每当见到主人的哭丧脸、或是遭到女仆的责骂而心头不快时，定要拜访那位异性好友，向她倾诉衷肠。	《我》①	○
		<u>我</u> 虽是猫儿，却是解得风情的。在家里，每当 <u>我</u> 看见主人阴沉的脸或受到阿三恶意的对待而情绪郁闷时，总要去访问这位异性朋友，互相聊天。	《我》②	×
		<u>我</u> 虽然不过是一只猫，但却不是不通情意的。每当看到主人的愁眉哭脸，或者受了阿三的责骂，心里憋闷的时候， <u>我</u> 就必定去访问这位异性朋友聊天。	《我》③	×
024	杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、 <u>三毛子</u> は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく縁側に坐っている。 <u>Φ</u> その背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。	<u>咱家</u> 从杉树篱笆的空隙中放眼望去，心想：她在家吗？因为是正月，只见 <u>花子</u> 小姐戴着新项链，在檐廊下端庄而坐。 <u>她</u> 那后背丰盈适度的风姿，漂亮得无以言喻，极尽曲线之美；	《我》①	×
025	<u>吾輩</u> は前回断わった通りま	前文已经声明， <u>咱家</u> 还没有	《我》①	○

	だ名はないのであるが、教師の家にいるものだから三毛子だけは尊敬して先生先生といってくれる。 <u>吾輩</u> も先生と言われてまんざら悪い心持ちもしないから、はいはいと返事をしている。	个名字，但因住在教师家，总算有个花子小姐表示敬重，口口声声称咱家为“先生”。 <u>咱家</u> 也被尊一声“先生”，自然心情不坏，便满口答应：“是，是…”		
026	<u>東風子</u> は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頬張る。 <u>Φ</u> モゴモゴしばらくは苦しそうである。	<u>东风子</u> 迅速将点心盘里的蛋糕抓住，一把塞进嘴里， <u>Φ</u> 嚼啊，嚼啊，一时似乎不大好受，…	《我》①	○ s
027	<u>吾輩</u> の主人は毎朝風呂場でうがいをする時、楊枝で喉をつつ突いて妙な声を無遠慮に出す癖がある。 <u>Φ</u> 機嫌の悪い時はやけにがあがあやる、機嫌の好い時は元気づいてなおがあがあやる。	<u>我家主人</u> 有个毛病，每天早晨在卫生间刷牙时，牙刷往喉咙里一捅，就由着性发出怪腔怪调。 <u>Φ</u> 不高兴时他哇哇地大声叫，高兴时劲头足，更要哇啦哇啦地喊。	《我》①	○
		<u>我的主人</u> 有个怪癖，每天早晨在洗澡间嗽口的时候，总要用牙刷捅自己的喉咙，毫无顾忌地发出怪里怪气的声音。如果在 <u>他</u> 情绪不佳的时候，就会发出更大的嘎嘎声。情绪好，精神来了，同样也会嘎嘎一番。	《我》②	×
		我家 <u>主人</u> 有一个怪毛病：每天早晨在洗面间嗽口的时候，喜欢把牙刷顶住喉咙，好不客气地发出怪声。在他心情不好的时候， <u>他就</u> 哦啊哦啊地叫得更凶。	《我》③	×
028	<u>球</u> は上へ上へと <b>のぼる</b> 。 <u>Φ</u> しばらくすると落ちて来る。	<u>那球</u> 愈飞愈高，少顷落了下来。	《我》①	○ s
		<u>球</u> 愈抛愈高。一会儿， <u>球</u> 落了下来。	《我》②	×



		球越生越高. 隔了一会, 球落下来了.	《我》③	×
029	彼らはまた <u>球</u> を高く投げ打つ。 <u>Φ</u> 再び三たび。	儿等又将 <u>球</u> 抛了上去。 <u>Φ</u> 一连三次, …	《我》①	○
030	<u>彼は</u> 巨人引力である。 <u>彼は</u> 強い。	<u>他</u> 便是巨人‘引力’。 <u>他</u> 很强大, …	《我》①	○
031	<u>彼は</u> 強い。 <u>彼は</u> 万物を己れの方へと引く。 <u>彼は</u> 家屋を地上に引く。	<u>他</u> 很强大, 将万物引向自己身边, <u>Φ</u> 也将房屋引向地面, …	《我》①	× s
032	<u>私は</u> また水を見る。すると <u>Φ</u> はるかの方の川上の方で私の名を呼ぶ声が聞こえるのです。	<u>我</u> 又向水面望去, 这时, <u>Φ</u> 只听从远远的上游传来声音, 呼唤我的名字。	《我》①	○ s
		<u>我</u> 又底头看水, 就在这时, <u>我</u> 听见了有人在遥远的上流呼唤我的名字。	《我》②	× s
033	<u>私は</u> また立ち止まって耳を立てて聞きました。三度目に呼ばれた時には <u>Φ</u> 欄干につかまっていながら膝頭ががくがくふるえ出したのです。	<u>我</u> 又停步, 侧耳谛听。当第三次呼唤我的名字时, <u>我</u> 虽然抓住栏杆, 膝头却瑟瑟发抖。	《我》①	×
034	<u>細君</u> は命ぜられたとおり風呂場へ行って両肌を脱いでお化粧をして、箆笥から着物を出して着換える。 <u>Φ</u> もういつでも出かけられますというふぜいで待ち構えている。	<u>内人</u> 已经奉命去洗澡间光着上半身化妆, 从衣柜里拿出衣服换上。 <u>她</u> 是整装以待, 那神情在说: ‘随时可以动身的。’	《我》①	×
		至于 <u>我的妻子</u> 呢, 她按照我的吩咐, 到洗澡间, 脱掉上衣打扮, 换好从衣橱里取出的衣服, <u>Φ</u> 摆出架势, 仿佛告诉我随时可以出发。	《我》②	○ s
		<u>内人</u> 按照我的吩咐, 到洗脸间去。 <u>Φ</u> 光着两膀化好了妆, 又从衣橱里取出衣服换上, <u>Φ</u> 仿佛说随时可以出门, 在那里等待着。	《我》③	○
035	<u>吾輩</u> は急に動悸がして来た。	<u>我</u> 顿时不寒而栗, <u>Φ</u> 站在垫	《我》①	○ s

	<u>Φ</u> 座蒲団の上に立ったまま、木彫の猫のように眼も動かさない。	子上，像一座木雕，眼珠都不敢转。		
036	吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、 <u>この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。Φ</u> 失敬な奴だ。	咱家一再声明，至今还没个名字。可那 <u>女仆</u> ，一再叫“野猫、野猫”的， <u>Φ</u> 真是个冒失鬼！	《我》①	○ s
037	<u>吾輩</u> はその後野良が何百遍繰り返されたかを知らぬ。 <u>吾輩</u> はこの際限なき談話を途中で聞き棄てて、布団をすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万八千八百八十本の毛髪を一度にたてて身振いをした。	<u>Φ</u> 后来不知又被她叫了几百次“野猫”。 <u>咱家</u> 不想再听二人喋喋不休的对话，便离开坐垫，从檐廊窜了下去。这时， <u>我</u> 的八万八千八百八十根头发全都倒竖起来，浑身打颤。	《我》①	○ p l
038	<u>吾輩</u> はどこまでも人間になりすましているのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆ににくい。 <u>Φ</u> 迷亭、寒月諸先生の評判だけで御免蒙るに致そう。	<u>咱家</u> 由于处处装人，对于已经隔绝的猫胞动态，无论如何也难能描绘。 <u>Φ</u> 那就作罢！仅就迷亭、寒月诸公评述一番吧！	《我》①	○
039	今日は上天気の日曜なので、 <u>主人</u> はのそのそ書斎から出て来て、吾輩の傍へ筆硯と原稿用紙を並べて腹這になって、しきりに何か唸っている。大方草稿を書き卸す序開きとして妙な声を発するのだろうと注目していると、 <u>Φ</u> ややしばらくして筆太に「香一」とかいた。	这一日，是个晴朗的星期天。 <u>主人</u> 徐步走出书斋，把笔墨和稿纸放在咱家的身边，便趴在床上，口中念念有词。大概这怪腔怪调，便是撰写初稿的序章吧！留神一看，不大工夫， <u>主人</u> 以浓墨重笔写了“香一炷”三个字，	《我》①	×
		今天是星期天，上好的天气。 <u>主人</u> 从书斋里慢条斯理地走出来，在我身旁摆上笔、砚和稿纸，然后趴在席铺上，嘴里不断哼着什么。大概是起稿之前先要发出一番怪里怪气	《我》②	× p l

		<p>的声音作为开端的吧。我留心看去,稍过一会儿,<u>主人</u>就用浓墨粗重地写上了“一炷香”三个大字。</p> <p>今天是星期天,天气特别好。<u>主人</u>摇摇摆摆渡出书房,把笔砚和搞纸放在我的旁边,俯卧在席子上,嘴里念念有词。大概在草拟文稿之前,要发出怪声来作为序幕。我留神望着。过了一会儿,<u>他</u>大笔一挥写了“香一炷”三个粗字。</p>		
040	<p><u>主人</u>は筆を持って首を捻ったが別段名案もないものと見えて筆の穂を嘗めだした。唇が真黒になったと見ていると、今度は<u>Φ</u>その下へちょいと丸をかいた。</p>	<p>…<u>他</u>擎着笔歪着脖,似乎想不出什么佳句,便舔了舔笔尖,弄得嘴唇乌黑。只见<u>他</u>在句末画了个小小的圆圈, …</p> <p><u>主人</u>拿着笔,歪着头在思考。看来,<u>他</u>想不出怎样往下写的好注意,便起了笔尖。我一看,<u>他</u>的嘴唇全成黑的啦。这一次他在下边画了个圆圈, …</p> <p><u>主人</u>握着笔,扭着头,似乎想不出什么好的句子来,便舔着笔尖。<u>Φ</u>嘴唇都舔得漆黑了,这回又在句为尾画了一个圈圈。</p>	《我》③	× p l
			《我》①	×
			《我》②	× p l
			《我》③	○
041	<p>「あと足をこうぶら下げては、鼠は取れそうもない、…… どうです奥さんこの猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だと見えて、<u>隣りの部屋の妻君</u>に話しかける。「鼠どころじゃござい</p>	<p>似乎捉弄我一个还不够,他又和<u>隔壁的女主人</u>攀谈起来: “这猫会捉耗子吗?” “哪里会捉耗子,倒是会吃粘糕跳舞呢。”万不曾想, <u>这娘们儿</u>揭了我的短。</p>	《我》①	○

	ません。お雑煮を食べて踊りをおどるんですもの」と <u>妻君</u> は飛んだところで旧悪を暴く。			
042	<u>細君</u> は迷惑そうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。「どうも御退屈様、もう帰しましょう」と <u>Φ</u> 茶を注ぎ易えて迷亭の前へ出す。	<u>女主人</u> 怪为难的放下针线，便来到客厅。 “叫您久等，他快回来了吧？” <u>女主人</u> 说着，重新斟了一杯茶送到迷亭面前。	《我》①	×
043	<u>迷亭</u> は乗気になる。 <u>Φ</u> 細君に同情を表しているというよりむしろ好奇心に駆られている。	<u>迷亭</u> 很感兴趣。与其说他是由于对女主人的同情，毋宁说是由于好奇心的驱使。	《我》①	×
044	細君は一家の見識を立てて <u>迷亭</u> の返答を促す。 <u>さすがの迷亭</u> も少々窮したと見えて、袂からハンケチを出して吾輩をじゃらしていたが「しかし奥さん」と急に何か考えついたように大きな声を出す。「…」	女主人说罢片面之词，便催促 <u>迷亭</u> 答话。 <u>好一个精明的迷亭先生</u> 也有些穷于应付了。 <u>他</u> 从和服长袖里掏出手帕来逗弄咱家。 “不过，嫂夫人，”他忽而好像想起什么似的，高声说，“…”	《我》①	○ p 1
045	「まあ賞めた方でしょう…」と <u>迷亭</u> は済ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商買道具で仕方もござんすまいが、よっぽど偏屈でしてねえ」 <u>迷亭</u> はまた別途の方面から来たなと思って「偏屈は少々偏屈ですね、学問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような弁護をするような不即不離の妙答をする。	“噢，大概是夸奖吧！…” <u>迷亭</u> 若无其事地将手帕垂落在咱家的眼前。 女主人说：“书籍本是谋生的工具，怕是少不得的。不过，他也太犟啦。” <u>迷亭</u> 心想：女主人竟从另一条路冲杀过来了，便不即不离地绝妙回答：“犟倒是犟一点儿。做学问的人毕竟都是那个样子嘛。”这既像为嫂夫人帮腔，又像为苦沙弥开脱。	《我》①	○
046	「…」と <u>細君</u> は女人一流の論理法で詰め寄せる。「曖昧じゃありませんよ、ちゃんと分	“…” <u>她</u> 以女人特有的逻辑步步逼近。 “并非模糊不清，而是了	《我》①	○

	っています、ただ説明しにくいだけの事でさあ」「何でも自分の嫌いな事を月並と云うんでしょう」と <u>細君</u> は我知らず穿った事を云う。	若指掌，只是不大好解释罢了。” “大约是把自已讨厌的现象都叫俗调吧？” <u>女主人</u> 不知不觉地一语道破。		
047	「そんな連中があるでしょうか」と <u>細君</u> は分らんものだからいい加減な挨拶をする。 「何だかごたごたして私には分りませんわ」と <u>Φ</u> ついに我を折る。	“有这样的人吗？” <u>女主人</u> 对此外行，只好不轻不重地问了一句： <u>Φ</u> 但终于甘拜下风：“那么乱糟糟的，我可不懂！”	《我》①	○
048	妻君はホホと笑って <u>主人</u> を顧みながら次の間へ退く。 <u>主人</u> は無言のまま吾輩の頭を撫でる。	女主人边咯咯地笑，边回头瞧瞧 <u>丈夫</u> ，到隔壁去了。 <u>主人</u> 一言不发，抚摸咱家的头。	《我》①	○
049	迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分った」と云う。但しこの大抵と云う度合は兩人が勝手に作ったのだから他人の場合には応用が出来ないかも知れない。	迷亭和主人你瞧我，我瞧你，说：“ <u>大致明白了</u> ”。但是，“ <u>大致</u> ”这个字眼儿，因人信口编造，说不定换个人就用不上。	《我》①	○
050	それから <u>主人</u> はこれを遠慮なく朗読して、いつになく「ハハハハ面白い」と笑ったが「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だから消そう」とその句だけへ棒を引く。 <u>Φ</u> 一本ですむところを二本引き三本引き、奇麗な併行線を描く、線がほかの行まで食み出しても構わず引いている。	接着， <u>他</u> 又无所顾忌地朗读，破例地哈哈大笑，连喊“有意思”。但又说，“‘流鼻涕’这词儿太尖刻，去掉！”于是，他在这个词上划了一杠。本来划一条线就足够，可 <u>他却</u> 一连划了两条，三条，形成漂亮的并列横线，而且划得已经越界，侵入另一行，他也不管。	《我》①	×
051	鼻毛で妻君を追払った <u>主人</u> は、まずこれで安心と云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿をかこうと焦る体であるがなかなか筆は動かない。 <u>Φ</u>	<u>主人</u> 用鼻毛赶走了女主人，看样子总算稳下心来。他边思索，边拔鼻毛，边写作；可是干着急，笔尖却动也不动。	《我》①	○

	「焼芋を食うも蛇足だ、割愛しよう」とついにこの句も抹殺する。	<u>Φ</u> “‘烤白薯’？画蛇添足，割爱吧！”终于把这一句勾掉。		
052	如是観によりて、如是法を信じている <u>吾輩</u> はそれだからどこへでも這入って行く。もっとも行きたくない処へは行かぬが、 <u>Φ</u> 志す方角へは東西南北の差別は入らぬ、平氣な顔をして、のそのそと参る。	正因为 <u>咱家</u> 具有如此观点、奉行如此信条，便想去哪儿就去哪儿。当然，不想去的地方是不肯去的。 <u>Φ</u> 而心向往之的地方，管它东西南北，无不大摇大摆，从从容容地前去走走。	《我》①	○ p 1
053	<u>金田君</u> は妻君に似合わず鼻の低い男である。 <u>Φ</u> 単に鼻のみではない、顔全体が低い。	<u>此人</u> 和太太不同，是个塌鼻子。 <u>Φ</u> 不单是鼻子，整个脸都是扁的，令人疑心：…	《我》①	○
054	<u>金田君</u> は堂々たる実業家であるから固より熊坂長範のように五尺三寸を振り廻す氣遣いはあるまいが、承る处によれば人を人と思わぬ病氣があるそうである。 <u>Φ</u> 人を人と思わないくらいなら猫を猫とも思うまい。	<u>金田老板</u> 乃一堂堂实业家，不必担心他会像熊坂长范那样，抡起五尺三寸的大刀。但是据我所知，他有个毛病：拿人不当人。既然 <u>Φ</u> 拿人不当人，自然拿猫不当猫。	《我》	○
055	しかしその油断の出来ぬところが <u>吾輩</u> にはちょっと面白いので、 <u>吾輩</u> がかくまでに金田家の門を出入するの、ただこの危険が冒して見たいばかりかも知れぬ。それは追って篤と考えた上、 <u>Φ</u> 猫の脳裏を残りなく解剖し得た時改めて御吹聴仕ろう。	然而，正是“不可掉以轻心”这一点， <u>咱家</u> 很感兴趣。所以如此频繁地出入于金田家，说不定纯粹是为了想冒这份风险哩！这一点，请容 <u>咱家</u> 三思，待将猫的思维细致剖析后，再向列位一夸海口。	《我》①	× p 1
056	主人がこの禿を見た時、第一彼の脳裏に浮んだのは <u>かの家</u> 伝来の仏壇に幾世となく飾り付けられたる御灯明皿である。 <u>彼の一家</u> は真宗で、	他发现这块秃疮，首先在脑海里闪现的是 <u>他家</u> 祖传那盏神灯的灯碗，在佛坛上不知摆了多少辈子。 <u>他全家</u> 信奉真宗。按老规矩，要把不合	《我》①	○ p 1

	真宗では仏壇に身分不相応な金を掛けるのが古例である。	身份的大把钱破费在佛坛上。		
057	<u>主人</u> は鼠色の毛布を丸めて書斎へ投げ込む。やがて下女が持って来た名刺を見て、 <u>主人</u> はちょっと驚ろいたような顔付であったが、こちらへ御通し申してと言い棄てて、名刺を握ったまま後架へ這入った。	<u>主人</u> 也卷起鼠皮色毛毯，将它扔进书房。少顷， <u>主人</u> 看过女仆拿来的名片，略有惊色。 <u>他</u> 口里吩咐让客，却手拿名片走进了厕所。	《我》①	○ p 1
058	しかし忍ばねばならぬだけそれだけ猫に対する憎悪の念は増す訳であるから、鈴木君は時々 <u>吾輩</u> の顔を見ては苦い顔をする。 <u>吾輩</u> は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白いから滑稽の念を抑えてなるべく何喰わぬ顔をしている。	然而，正因为受了点委屈，他对猫的憎恶也正比例地增加。铃木一再哭丧着脸瞧着我；而我，却很有兴趣欣赏铃木先生那张气愤的脸，便抑制着滑稽感，尽量装作若无其事。	《我》①	○
059	<u>吾輩</u> と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行われつつある間に <u>主人</u> は衣紋をつくろって後架から出て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名刺の影さえ見えぬところをもって見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと見える。名刺こそ飛んだ厄運に際会したものだと思う間もなく、 <u>主人</u> はこの野郎と <u>吾輩</u> の襟がみを攫んでえいとばかりに縁側へ叩きつけた。	就在咱家和铃木先生表演这一幕哑剧的当儿， <u>主人</u> 整理一下衣服从厕所里出来，“噢！”的一声打个招呼便坐下，但手里的那张名片已经荡然无存。可见他是对铃木藤十郎的尊姓大名宣判了无期徒刑，将它押进粪坑里了。没容咱家想想这张名片多么倒霉， <u>主人</u> 骂道：“这个畜牲！”他揪住咱家脖后的毛，摔到檐廊去。	《我》①	○
060	「十年立つうちには大分違	“十年当中，你变化很大	《我》①	○

	うもんだな」 <u>と主人は鈴木君</u> <u>を見上げたり見下ろしたり</u> <u>している。鈴木君は頭を綺麗</u> <u>に分けて、英国仕立のトウィ</u> <u>ードを着て、派手な襟飾り</u> <u>をして、胸に金鎖りさえピカ</u> <u>かせている体裁、どうしても</u> <u>苦沙弥君の旧友とは思えな</u> <u>い。</u>	呀!”主人上下打量着 <u>铃木先</u> <u>生。铃木君梳的是漂亮的分</u> <u>发；穿的是英国产的毛料西</u> <u>装；系的是华丽的领带；胸</u> <u>前挂一条光闪闪的金链。这</u> <u>风度，无论如何也叫人不敢</u> <u>相信他就是苦沙弥当年的旧</u> <u>友。</u>		p 1
061	主人はこの不可思議な解釈 を聞いて、あまり思い掛けな いものだから、眼を丸くし て、返答もせず、 <u>鈴木君の顔</u> を、大道易者のようにじっと 見つめている。 <u>鈴木君は</u> こい つ、この様子では、ことによ るとやり損なうなと疳づい たと見えて、主人にも判断の 出来そうな方面へと話頭を 移す。	主人听了这番离奇的解释， 感到十分意外，便瞪起眼睛， 并不搭话，像卦摊上的算命 先生似的，盯住 <u>铃木</u> 的脸。 <u>铃木</u> 心想：这个家伙！看样 子，弄不好我会白跑腿的。 有了这样的预感，他才调转 话头，指向连主人也不难做 出判断的话茬。	《我》①	○ p 1
062	<u>鈴木君は寒月の名を聞いて、</u> <u>話してはいけぬ話してはい</u> <u>けぬと顎と眼で主人に合図</u> <u>する。主人には一向意味が通</u> <u>じない。</u>	<u>鈴木</u> 听人提起寒月，用下颏 和眉眼暗示 <u>主人</u> ：可别说呀， 不许说！而 <u>主人</u> 干脆没懂。	《我》①	○
063	さっきから <u>迷亭が鼻々と無</u> <u>遠慮に云うのを聞くたんび</u> <u>に鈴木君は不安の様子をす</u> <u>る。迷亭は少しも気が付かな</u> <u>いから平気なものである。</u>	<u>鈴木</u> 则刚才每当听 <u>迷亭</u> 不客 气地口口声声叫“鼻子”、“鼻 子”的，就显得局促不安。 而 <u>迷亭</u> 却毫未察觉，表现得 心安理得。	《我》①	○



資料(2) 中日対訳小説(原文：中国語／訳文：日本語)例文のデータ 2

番号	中国語	日本語訳文	出典	評価
064	我要给阿 Q 做传, 已经不止一两年了。但 <u>Φ</u> 一面要做, 一面又往回想, …	<u>わたしは阿 Q の正伝を作ろうとしたのは一年や二年のことではなかった。けれども <u>Φ</u> 作ろうとしながらまた考えなおした</u>	《阿》	○
065	阿 Q 并没有抗辩他确凿姓赵, 只用手摸着左颊, 和地保退出去了; <u>Φ</u> 外面又被地保训斥了一番, 谢了地保二百文酒钱。	阿 Q は彼が趙姓である確証を弁解もせず、ただ手を以て左の頬を撫でながら村役人と一緒に退出した。 <u>Φ</u> 外へ出るとまた村役人から一通りお小言をきいて、二百文の酒手を出して村役人にお詫びをした。	《阿》	○
066	那是赵太爷的儿子进了秀才的时候, 锣声镗镗的报到村里来, 阿 Q 正喝了两碗黄酒, 便手舞足蹈的说, 这于他也很光采, 因为他和赵太爷原来是本家, 细细的排起来他还比秀才长三辈呢。	阿 Q はちょうど二碗の黄酒を飲み干して足踏み手振りして言った。これで彼も非常な面目を施した、というのは彼と趙太爺はもともと一家の分れで、こまかく穿鑿すると、 <u>彼は秀才よりも目上だと語った</u> 。	《阿》	○ s
067	阿 Q 太荒唐, <u>Φ</u> 自己去招打;	阿 Q は実に出鱈目な奴だ。 <u>Φ</u> 自分でなぐられるようなことを仕出かしたんだ。	《阿》	○ s
068	又倘若他有一位老兄或令弟叫阿富, 那一定是阿贵了; 而他又只是一个人: 写作阿贵, 也没有佐证的。	もしまた <u>彼に</u> 一人の兄弟があつて阿富と名乗っていたら、それこそきつと阿貴に違いない。しかし <u>彼は全くの独り者であつてみると、阿貴とすべき左証がない</u> 。	《阿》	○
069	因为未庄的人们之于阿 Q, 只要他帮忙, 只拿他玩笑, 从来没有留心他的“行状”的。而阿 Q 自己也不说, …	それというのも未莊の人達はただ <u>阿 Q を</u> コキ使い、ただ <u>彼を</u> おもちゃにして、もとより彼の「行状」などに興味を持つ者がない。そして <u>阿 Q 自身も</u> 身の上話などしたことはない。	《阿》	○
070	阿 Q 没有家, <u>Φ</u> 住在未庄	阿 Q は家が無い。 <u>Φ</u> 未莊の土穀祠	《阿》	○ s

	<p>的土谷祠里;也没有固定的职业,只给人家做短工,割麦便割麦,舂米便舂米,撑船便撑船.</p>	<p>中に住んでいて一定の職業もないが、人に頼まれると日傭取になって、麦をひけと言われれば麦をひき、米を搗けと言われれば米を搗き、船を漕げと言われれば船を漕ぐ。</p>		
071	<p>有一个老头子颂扬说：“<u>阿Q</u>真能做!”这时<u>阿Q</u>赤着膊懒洋洋的瘦伶仃的正在他面前，…</p>	<p>あるお爺さんが<u>阿Q</u>をもちやげて「お前は何をさせてもソツが無いね」と言った。この時、<u>阿Q</u>はひじを丸出しにして（支那チョッキをじかに一枚著ている）無性臭い見すばらしい風体で、お爺さんの前に立っていた。</p>	《阿》	○
072	<p>然而<u>未庄人</u>真是不见世面的可笑的乡下人啊，<u>他们</u>没有见过城里的煎鱼！</p>	<p>ところが<u>未莊の人</u>はまったくの世間見ずで笑うべき田舎者だ。<u>彼等</u>は城内の煮魚さえ見たことがない。</p>	《阿》	○ s
073	<p>最脑人的是在<u>他</u>头皮上，颇有几处不知起于何时的癩疮疤。这虽然也在他身上，而看<u>阿Q</u>的意思，倒也似乎以为不足贵的，因为<u>他</u>讳说“癩”以及一切近于“<u>赖</u>”的音…</p>	<p>とりわけ人に嫌られるのは、<u>彼の</u>頭の皮の表面にいつ出来たものかずいぶん幾個所も瘡だらけの禿があった。これは彼の持物であるが、彼のおもわくを見るとあんまりいいものでもないらしく、<u>彼は</u>「癩」という言葉を嫌って一切「<u>頼</u>」に近い音までも嫌った。</p>	《阿》	○
074	<p>一犯讳，不问有心与无心，<u>阿Q</u>便全疤通红的发起怒来，估量了对手，口讷的他便骂，气力小的他便打；然而不知怎么一回事，总还是<u>阿Q</u>吃亏的时候多。于是<u>他</u>渐渐的变换了方针，大抵改为怒目而视了。</p>	<p>そういう言葉をちょっとでも洩そうものなら、それが故意であろうと無かろうと、<u>阿Q</u>はたちまち頭じゅうの禿を真赤にして怒り出し、相手を見積って、無口の奴は言い負かし、弱そうな奴はなぐりつけた。しかしどういものかしらん、結局<u>阿Q</u>がやられてしまうことが多く、<u>彼は</u>だんだん方針を変更し、大抵の場合は目を怒らして睨んだ。</p>	《阿》	○ p l

075	一见面,他们便假诈吃惊的说:“ <u>啥</u> 亮起来了。” <u>阿Q</u> 照例的发了怒,他怒目而视了。“原来有保险灯在这里!”他们并不怕。 <u>阿Q</u> 没有法,只得另外想出报复的话来:“你还不配…”	ちょっと彼の顔を見ると彼等はわざとおったまげて「おや、明るくなって来たよ」 <u>阿Q</u> はいつもの通り目を怒らして睨むと、彼等は一向平気で「と思ったら、空気ランプがここにある」 アハハハハハと皆は一緒になって笑った。 <u>阿Q</u> は仕方なしに他の復讐の話をして「てめえ達は、やっぱり相手にならねえ」	《阿》	○
076	又仿佛在他头上的是一种高尚的光荣的 <u>癞头疮</u> , <u>Φ</u> 并非平常的 <u>癞头疮</u> 了;	この時こそ、彼の頭の上には一種高尚なる光榮ある <u>禿</u> があるのだ。 <u>Φ</u> ふだんの斑ら <u>禿</u> とは違う。	《阿》	○ s
077	<u>闲人</u> 还不完,只撩他,于是终而至于打。 <u>阿Q</u> 在形式上打败了,被人揪住黄辫子,在壁上碰了四五个响头, <u>闲人</u> 这才心满一足的得胜的走了,...	<u>閑人</u> 達はまだやめないで彼をあしらっていると、遂に打ち合いになる。 <u>阿Q</u> は形式上負かされて黄いろい辯子を引張られ、壁に対して四つ五つ鉢合せを頂戴し、 <u>閑人</u> はようやく胸をすかして勝ち慢って立去る。	《阿》	○
078	倘 <u>他</u> 姓赵,则据现在号称郡望的老例,可以照《郡名百家姓》上的注解, <u>Φ</u> 说是陇西天水人也,...	もし <u>彼</u> が趙姓であつたなら、現在よく用いられる郡望の旧例により、郡名百家姓に書いてある注解通りにすればいい。 <u>Φ</u> 「隴西天水の人也」と言えば済む。	《阿》	○ s
079	<u>阿Q</u> 站了一会刻,心里想,“我总算被儿子打了,现在的世界真不像样…”于是 <u>Φ</u> 也心满意足的得胜的走了.	<u>阿Q</u> はしばらく佇んでいたが、心の中で思った。「乃公はつまり子供に打たれたんだ。今の世の中は全く成っていない……」そこで <u>彼</u> も満足し勝ち慢って立去る。	《阿》	× s
080	所以 <u>凡有和阿Q玩笑的人们</u> ,几乎全知道他有这一种精神上的胜利法,此后每逢揪住他黄辫子的时候, <u>人</u> 就先一着对他说:	だから <u>阿Q</u> とふざける者は、彼に精神上的の勝利法があることをほとんど皆知ってしまった。そこで今度彼の黄いろい辯子を引っ掴む機会が来ると <u>その人</u> はまず彼に言っ	《阿》	○ s

	“阿 Q, 这不是儿子打老子, 是人打畜生. 自己说: 人打畜生!”	た。 「阿Q、これでも子供が親爺を打つのか。さあどうだ。人が畜生を打つんだぞ。自分で言え、人が畜生を打つと」		
081	但虽然是虫豸, <u>闲人</u> 也并不放, <u>他</u> 仍旧在就近什么地方给他碰了五六个响头, 这才心满意足的得胜的走了, …	だが虫ケラと言っても <u>閑人</u> は決して放さなかった。 <u>他</u> いつもの通り、ごく近くのどこかの壁に彼の頭を五つ六つぶつつけて、そこで初めてせいせいして勝ち慢って立去る。	《阿》	○ s
082	然而不到十秒钟, <u>阿 Q</u> 也心满意足的得胜的走了, <u>他</u> 觉得他是第一个能够自轻自贱的人, …	ところが十秒もたたないうちに <u>阿 Q</u> も満足して勝ち慢って立去る。 <u>阿 Q</u> は悟った。	《阿》	○ s
083	<u>阿 Q</u> 以如是等等妙法克服怨敌之后, 便愉快的跑到酒店里喝几碗酒, 又和别人调笑一通, 口角一通, 又得了胜, 愉快的回到土谷祠, 放到头睡着了。 假使有钱, <u>他</u> 便去押牌宝, …	<u>阿 Q</u> はこういう種々の妙法を以て怨敵を退散せしめたあとでは、いっそ愉快になって酒屋に馳けつけ、何杯か酒を飲むうちに、また別の人と一通り冗談を言って一通り喧嘩をして、また勝ち慢って愉快になって、 <u>他</u> 土谷祠に帰り、頭を横にするが早いか、ぐうぐう睡ってしまうのである。 もしお金があれば <u>他</u> は博奕を打ちに行く。	《阿》	○
084	<u>阿 Q</u> 的钱便在这样的歌吟之下, 渐渐的输入别个汗流满面的人物的腰间. <u>他</u> 终于只好挤出堆外, 站在后面看, 替别人着急, 一直到散场, …	<u>阿 Q</u> の錢はこのような吟詠のもとに、だんだん顔じゅう汗だらけの人の腰の辺に行ってしまう。 <u>他</u> は遂にやむをえず、かたまりの外へ出て、後ろの方に立って人の事で心配しているうちに、博奕はずんずん進行してお終いになる。	《阿》	○
085	做戏的锣鼓, 在 <u>阿 Q</u> 耳朵里仿佛在十里之外; <u>他</u> 只听得桩家的歌唱了。	囃子の声などは <u>阿 Q</u> の耳から十里の外へ去っていた。 <u>他</u> はただ堂元の歌の節だけ聴いていた。	《阿》	○

086	他这回才有些感到失败的苦痛了. 但他立刻转败为胜了.	彼は今度こそいささか失敗の苦痛を感じた。けれど彼は失敗を転じて遂に勝ちとした。	《阿》	○
087	他急忙爬起身, 唱着《小孤孀上坟》到酒店去. 这时候, 他又觉得赵太爷高人一等了.	彼が急に起き上って「若ごけの墓参り」という歌を唱いながら酒屋へ行った。この時こそ彼は趙太爺よりも一段うわ手の人物に成り済ましていたのだ。	《阿》	○
088	也如孔庙里的太牢一般, 虽然与猪羊一样, 同是畜生, 但既经圣人下箸, 先儒们便不敢妄动了. 阿 Q 此后倒得意了许多年.	阿 Q は猪羊と同様の畜生であるが、いったん聖人のお手がつくと、学者先生、なかなかそれを粗末にしない。 阿 Q はそれからというものはずいぶん長いこと偉張っていた。	《阿》	○
089	他醉醺醺的在街上走, 在墙根的日光下, 看见王胡在那里赤着膊捉虱子, 他忽然觉得身上也痒起来了.	彼はほろ酔い機嫌で町なかを歩いていると、垣根の下の日当りに王がもろ肌ぬいで虱を取っているのを見た。たちまち感じて彼も身体がむず痒くなった。	《阿》	○ s
090	他于是并排坐下去了. 倘是别的闲人们, 阿 Q 本不敢大意坐下去. 但这王胡旁边, 他有什么怕呢? 老实说: 他肯坐下去, 简直还是抬举他.	そこで彼は側へ行って並んで坐った。これがもしほかの人なら阿 Q はもちろん滅多に坐るはずはないが、王の前では何の遠慮が要るものか、正直のところ阿 Q が坐ったのは、つまり彼を持上げ奉ったのだ。	《阿》	○ p l
091	阿 Q 也脱下破夹袄来, 翻检了一回, 不知道因为新洗呢还是因为粗心, …	阿 Q は破れ衿を脱ぎおろして一度引ッくらかえして調べてみた。Φ 洗ったばかりなんだがやはりぞんざいなかもしれない。	《阿》	○ s
092	阿 Q 最初是失望, 后来却不平了: Φ 看不上眼的王胡尚且那么多, 自己倒反这样少, 这是怎样的大失体统的事呵!	阿 Q は最初失望してあとでは不平を起した。Φ 王なんて取るに足らねえ奴でも、あんなにどっさり持っていてやがる。	《阿》	○
093	他很想寻一两个大的, 然	彼はぜひとも大きな奴をひねり出	《阿》	× s

	而竟没有,好容易才捉到一个中的, <u>Φ</u> 狠狠的塞在厚嘴唇里,很命一咬,劈的一声,又不及王胡响.	そうと思ってあちこち捜した。しばらく経ってやっと一つ捉まえたのは中くらいの奴で、 <u>彼は</u> 恨めしそうに厚い唇の中に押込みヤケに噛み潰すと、パチリと音がしたが王の響には及ばなかった。		
094	<u>阿Q</u> 近来虽然比较的受人尊敬,自己也更高傲些,但和那些打惯的闲人们见面还胆怯, <u>Φ</u> 独有这回却非常武勇了.	<u>阿Q</u> は近頃割合に人の尊敬を受け、自分もいささか高慢稚氣になっているが、いつもやり合う人達の面を見ると、やはり心が怯れてしまう。ところが <u>Φ</u> 今度に限って非常な勢だ。	《阿》	○ s
095	<u>阿Q</u> 以为他要逃了,抢进去就是一拳.这拳头还未达到身上,已经被他抓住了,只一拉, <u>阿Q</u> 踉踉跄跄的跌进去,...	相手が逃げ出すかと思ったら、掴み掛けて来たので、 <u>阿Q</u> は拳骨を固めて一突き呉れた。その拳骨がまだ向うの身体に届かぬうちに、腕を抑えられ、 <u>阿Q</u> はよろよろと腰を浮かした。	《阿》	○
096	在 <u>阿Q</u> 的记忆上,这大约要算是生平第一件的屈辱,因为王胡以络腮胡子的缺点,向来只被他奚落, <u>Φ</u> 从没有奚落他,更不必说动手了.	<u>阿Q</u> の記憶ではおおかたこれは生れて初めての屈辱といってもいい、王は顎に絡まるの欠点で前から <u>阿Q</u> に侮られていたが、 <u>阿Q</u> を侮ったことは無かった。 <u>Φ</u> むろん手出しなど出来るはずの者ではなかったが、ところが現在遂に手出しをしたから妙だ。	《阿》	○ s
097	远远的走来了一个人,他的对头又到了.这也是 <u>阿Q</u> 最厌恶的一个人,就是 <u>钱太爷的大儿子</u> .他先前跑上城里去进洋学堂,不知怎么又跑道东洋去了,...	遠くの方から歩いて来た一人は彼の真正面に向っていた。これも <u>阿Q</u> の大嫌いの一人で、すなわち <u>錢太爺の総領息子</u> だ。 <u>彼は</u> 以前城内の耶蘇学校に通学していたが、なぜかしらんまた日本へ行った。	《阿》	○
098	<u>阿Q</u> 尤其深恶而痛绝之的,是他的一条假辫子。 <u>Φ</u> 辫子而至于假,就是没	<u>阿Q</u> が最も忌み嫌ったのは、彼の一本のまがい辫子だ。 <u>Φ</u> 擬い物と来てはそれこそ人間の資格がな	《阿》	○

	有了做人的资格；	い。		
099	阿 Q 便在平时, 看见一定要睡骂, 而况在屈辱之后呢? 他于是发生了回忆, 又发生了敌忾了。	阿 Q はふだんでも彼女を見るときっと悪態を吐くのだ。ましてや屈辱のあとだったから、 <u>Φ</u> いつものことを思い出すと共に敵愾心を喚起した。	《阿》	×
100	阿 Q 走进伊身旁, 突然深出手去摩着伊新剃的头皮, 呆笑着, 说: “秃儿! 快回去, 和尚等着你…” “你怎么动手动脚…” 尼姑满脸通红的说, 一面赶快走。	すれちがいに阿 Q は突然手を伸ばして <u>彼女の</u> 剃り立ての頭を撫でた。 「から坊主! 早く帰れ。和尚が待っているぞ」 「お前は何だって手出しをするの」 <u>尼</u> は顔じゅう真赤にして早足で歩き出した。	《阿》	○
101	酒店里的人大笑了。阿 Q 看见自己的勋业得了赏识, 便愈加兴高采烈起来: “和尚动得, 我动不得?” 他扭住伊的面颊。	酒屋の中の人は大笑いした。己れの手柄を認めた阿 Q はますますいい気になってハシャギ出した。 「和尚はやるかもしれねえが、おらあやらねえ」 <u>彼は</u> 、彼女の頬ぺたを摘んだ。	《阿》	○
102	阿 Q 更得意, 而且为满足那些赏鉴家起见, 再用力的一拧, 才放手。 他这一战, 早望却了王胡, 也忘却了假洋鬼子, 似乎对于今天的一切“晦气”都报了仇;	阿 Q はいっそう得意になり、見物人を満足させるために力任せに一捻りして彼女を突放した。 <u>彼は</u> この一戦で王のことも偽毛唐のことも皆忘れてしまって、きょうの一切の不運が報いられたように見えた。	《阿》	○
103	然而着一次的胜利, 却又使他有些异样。Φ飘飘然的飞了大半天, 飘进土谷祠, …	しかしながらこの一回の勝利がいささか異様な変化を <u>彼に</u> 与えた。 <u>彼は</u> しばらくの間ふらりふらりと飛んでいたが、やがてまたふらりと土穀祠に入った。	《阿》	×
104	不知道是小尼姑的脸上有一点滑腻的东西粘在 <u>他指上</u> , 还是 <u>他的指头</u> 在	若い尼の顔の上の脂が <u>彼の指先に</u> 貼りついたのかもしれない。それともまた <u>彼の指先が</u> 尼の面の皮に	《阿》	○ s

	小尼姑脸上磨得滑腻了?…	こすられてすべっこくなったのか もしれない。		
105	阿 Q 也是正人, 我们虽然不知道他曾蒙什么明师指授过, 但他对于“男女之大防”却历来非常严; 也很有排斥异端.	阿 Q は本来正しい人だ。われわれは彼がどんな師匠に就いて教えを受けたか知らないが、 <u>彼は</u> ふだん「男女の区別」を厳守し、かつまた異端を排斥する正気があった。	《阿》	○ s
106	为惩治他们起见, 所以他往往怒目而视, 或者大声说几句“诛心”话, 或者冷僻处, 便从后面掷一块小石头. 谁知道他将到“而立”之年, 竟被小尼姑害得飘飘然了.	<u>彼は</u> 彼等を懲しめる考えで、おりおり目を怒らせて眺め、あるいは大声をあげて彼等の迷いを醒まし、あるいは密会所に小石を投げ込むこともある。 ところが <u>彼は</u> 三十になって竟に若い尼になやまされて、ふらふらになった。	《阿》	○
107	假使小尼姑的脸上不滑腻, 阿 Q 便不至于被虫, 又假使小尼姑的脸上该一层布, 阿 Q 便也不至于被虫了,	もし尼の顔が脂漲っていなかったら阿 Q は魅せられずに済んだろう。もし尼の顔に覆面が掛っていたら阿 Q は魅せられずに済んだろう	《阿》	○ s
108	他对于以为“一定想引诱野男人”的女人, 时常留心看, 然而伊并不对他笑. 他对于和他讲话的女人, 也时常留心听, 然而伊并不对他笑.	<u>彼は</u> 「こいつはきっと男を連れ出すわえ」と思うような女に対していつも注意してみていたが、 <u>彼女は</u> 決して彼に向って笑いもしなかった。 <u>彼は</u> 自分と話をする女の言葉をいつも注意して聴いていたが、 <u>彼女は</u> 決して艶ッぽい話を持ち出さなかった。	《阿》	○
109	这一天, 阿 Q 在赵太爷家里春了一天米, <u>Φ</u> 吃过晚饭, 便坐在厨房里吸旱烟.	その日阿 Q は趙太爺の家で一日米を搗いた。 <u>Φ</u> 晩飯が済んでしまうと台所で煙草を吸った。	《阿》	○ s
110	吴妈, 是赵太爷家里唯一的女仆, 洗完了碗碟, <u>Φ</u> 也就在长凳上坐下了, 而且和阿 Q 谈闲天:	呉媽は、趙家の中でたった一人の女僕であった。皿小鉢を洗ってしまうと <u>彼女も</u> また腰掛の上に坐して阿 Q と無駄話をした。	《阿》	× s



111	“阿呀!” <u>吴妈</u> 愣了一息, 突然发抖, <u>Φ</u> 大叫着往外跑, 且跑且嚷, 似乎后来带哭了.	<u>吴妈</u> はしばらく神威に打たれていたが、やがてガタガタ顫え出した。 「あれーッ」 <u>彼女</u> は大声上げて外へ駆け出す出し、駆け出しながら怒鳴っていたが、だんだんそれが泣声に変わって来た。	《阿》	× s
112	<u>阿 Q</u> 对了对墙壁跪着也发愣, 于是两手扶着空板凳, 慢慢的站起来, 仿佛觉得有些糟. <u>他</u> 这时的确有些忐忑不安了, 慌张的将烟管插在裤带上, 就想去舂米. 蓬的一声, 头上着了很粗的一下, <u>他</u> 急忙回转身去, 秀才便拿了一枝大竹杠站在他面前.	<u>阿 Q</u> は壁に対して跪坐し、これも神威に打たれていたが、この時両手をついて無性らしく腰を上げ、いささか沫を食ったような体でドギマギしながら、帯の間に煙管を挿し込み、これから米搗きに行こうかどうしようかとまごまごしているところへ、ポカリと一つ、太い物が頭の上から落ちて来た。 <u>彼</u> はハッとして身を転じると、秀才は竹の棒キレを持って行手を塞いだ。	《阿》	○ p 1
113	<u>阿 Q</u> 两手去抱头, 拍的正打在指节上, 这可很有一些痛. <u>他</u> 冲出厨房门, 仿佛背上又着了一下似的.	<u>彼は</u> 両手を挙げて頭をかかえた。当たったところはちょうど指の節の真上で、それこそ本当に痛く、 <u>Φ</u> 夢中になって台所を飛び出し、門を出る時また一つ背中の上をどやされた。	《阿》	×
114	<u>阿 Q</u> 生平本来最爱看热闹, 便即寻声走出去了. <u>Φ</u> 寻声渐渐的寻找赵太爷的内院里, 虽然在昏黄中, 却辩得出许多人, …	<u>阿 Q</u> は自体賑やかなことが好きで、声を聞くとすぐに声のある方へ駆け出して行った。 <u>Φ</u> だんだん傍へ行ってみると、趙太爺の庭内でたそがれの中ではあるが、大勢集まっている人の顔の見分けも出来た。	《阿》	○
115	<u>阿 Q</u> 坐了一会, 皮肤有些起栗, <u>他</u> 觉得冷了,	<u>阿 Q</u> は坐っていると肌が粟立って来た。 <u>彼は</u> 冷たく感じたのだ。	《阿》	○ s
116	<u>阿 Q</u> 自然都答应了, 可惜没有钱. <u>Φ</u> 幸而已经春	<u>阿 Q</u> はもちろん皆承諾したが、困ったことにはお金が無い。 <u>Φ</u> 幸い	《阿》	○

	天, 棉被可以无用, 便质了二千大钱, 履行条约.	春でもあるし、要らなくなった棉入れを二千文に質入れして契約を履行した。		
117	阿 Q 礼毕之后, 仍然回到土谷祠, 太阳下去了, 渐渐觉得世上有些古怪. 他仔细一想, 终于醒悟过来:	阿 Q はお礼を済ましてもとのお廟に帰って来ると、太陽は下りてしまい、だんだん世の中が変になって来た。 <u>彼は</u> 一々思い廻した結果ついに悟るところがあった。	《阿》	○
118	他起来之后, 也仍旧在街上逛, 虽然不比亦膊之切肤之痛, 却又渐渐的觉得世上有些古怪了. 仿佛从这一天起, <u>未庄的女人们</u> 忽然都怕了羞, <u>伊们</u> 一见阿 Q 走来, 便个个躲进门里去.	彼はそれからまたいつものように街に出て遊んだ。裸者の身を切るようなつらさはないが、だんだん世の中が変に感じて来た。何か知らんが <u>未荘の女</u> はその日から彼を気味悪がった。 <u>彼等</u> は阿 Q を見ると皆門の中へ逃げ込んだ。	《阿》	○ s
119	这总该有些蹊跷在里面了. 他留心打听, 才知道他们有事都去叫小 DON. <u>这小 D</u> , 是一个穷小子, 又瘦又乏, …	こりゃあきつと何か曰くがあるはずだ、と気をつけてみると、彼等は用のある時には <u>小 DON</u> をよんでいた。 <u>この小 D</u> はごくごくみすぼらしい奴で瘦せ衰えていた。	《阿》	○
120	所以阿 Q 这一气, 更与平常不同, <u>Φ</u> 当气愤愤的走着的时候, 忽然将手一扬, 唱道: …	阿 Q の怒尋常一様のものではない。 <u>彼は</u> ぷんぷんしながら歩き出した。そうしてたちまち手をあげて呻った。	《阿》	× s
121	几天之后, 他竟在钱府的照壁前遇见了小 D. 仇人相见分外眼明, 阿 Q 便迎上, 小 D 也站住了.	幾日かのあとで、 <u>彼は</u> 遂に錢府の照壁（衝立の壁）の前で小 D にめぐり逢った。「かたきの出会いは格別ハッキリ見える」もので、 <u>彼は</u> はずかずか小 D の前に行くと小 D も立止った。	《阿》	○
122	伸手去拔小 D 的辫子. 小 D 一手护住了自己的辫根, 一手也来拔阿 Q 的辫子, 阿 Q 便也将空着的一只手护住了自己的辫根.	彼は手を伸して小 D の辮子を引掴むと、小 D は片ッぽの手で自分の辮根を守り、片ッぽの手で <u>阿 Q</u> の辮子を掴んだ。 <u>阿 Q</u> もまた空いている方の手で自分の辮根を守っ	《阿》	○ s

		た。		
123	阿 Q 进三步, 小 D 便退三步, 都站着; 小 D 进三步, 阿 Q 便退三步, 又都站着.	阿 Q が三步進むと小 D は三步退き、遂に二人とも突立った。小 D が三步進むと阿 Q は三步退き、遂にまた二人とも突立った。	《阿》	○
124	而阿 Q 却仍然没有人来叫他做短工。 有一日很温和, 微风拂拂的颇有些夏意了, 阿 Q 却觉得寒冷起来, …	そうして阿 Q は依然として仕事に頼まれなかった。 ある日非常に暖かで風がそよそよと吹いてだいぶ夏らしくなってきたが、阿 Q はかえって寒さを感じた。	《阿》	○
125	他在路上走着要“求食”, 看见熟识的酒店, 看见熟识的馒头, 但他都走过了, …	彼は往来を歩きながら「食を求め」なければならない。φ見馴れた酒屋を見て、見馴れた饅頭を見て、ずんずん通り越した。	《阿》	× s
126	他求的是什么东西, 他自己不知道.	彼の求むるものは何だろう。彼自身も知らなかった。	《阿》	○ s
127	阿 Q 并不赏鉴这田家乐, 却只是走, 因为他知觉的知道这与他的“求食”之道是很辽远的. 但他终于走到静修庵的墙外了.	阿 Q はこの田家の楽しみを鑑賞せずにひたすら歩いた。彼は直覚的に彼の「食を求める」道はこんなまだるっこいことではいけない思ったから、彼は遂に静修庵の垣根の外へ行った。	《阿》	○ p l
128	追来的是一匹很肥大的黑狗. 这本来在前门的, 不只怎的到后园来了. 黑狗哼而且追, 已经要咬着阿 Q 的腿, 幸而从衣兜里落下一个笋卜来, 那狗给一吓, 略略一停, …	追っ馳けて来たのは、一つのすこぶる肥大の黒狗で、これはいつも表門の番をしているのだが、なぜかしらんきょうは裏門に来ていた。黒狗はわんわん追いついて来て、あわや阿 Q の腿に噛みつきそうになったが、幸い著物の中から一つの大根がころげ落ちたので、狗は驚いて飛びしさった。	《阿》	○
129	阿 Q 怕尼姑又放出黑狗来, 拾起笋卜便走, 沿路又检了几块小石头, 但黑狗却不再出现. 阿 Q 于	尼が狗をけしかけやせぬかと思ったから、阿 Q は大根を拾う序に小石を掻き集めたが、狗は追いかけても来なかった。そこで彼は石を	《阿》	○

	是抛了石块,一面走一面吃,而且想到,这里也没有什么东西寻,不如进城去处…	投げ捨て、歩きながら大根をかじって、この村もいよいよ駄目だ、城内に行く方がいいと思った。		
130	人们都惊异,说是 <u>阿 Q</u> 回来了,于是又回上去想到,他先前那里去了呢? <u>阿 Q</u> 前几回的上城,大抵早就兴高采烈的对人说,但这一次却并不,所以也没有一个人留心到.	人々は皆おったまげて、 <u>阿 Q</u> が帰って来たと言った。そこで前の事を回想してみると、 <u>彼は</u> いつも城内から帰って来ると非常な元気で人に向って吹聴したもんだが、今度は決してそんなことはなかった。	《阿》	○
131	天色将黑,他睡眠朦胧的在酒店门前出现了,他走近柜台,从腰间伸出手来,满把是银的和铜的, …	空の色が黒くなって来た時、 <u>彼は</u> 酔眼朦朧として、酒屋の門前に現われた。 <u>彼は</u> デクスの側へ行って、腰の辺から伸した手に一杯握っていたのは銀と銅。	《阿》	○ s
132	但阿 Q 又四面一看,忽然扬起右手,照着伸长脖子听得出神的 <u>王胡</u> 的后项窝上直劈下去道:“嚓!” <u>王胡</u> 惊得一跳,同时电光石火似的赶快缩了头, …	だが阿 Q は一向平気であたりを見廻し、たちまち右手をあげて、折柄頸を延して聴き惚れている <u>王</u> のぼんのくぼをめがけて、打ちおろした。 「びしゃり！」 <u>王</u> は驚いて跳び上り稲妻のような速力で頸を縮めた。	《阿》	○
133	于是 <u>伊</u> 们都眼巴巴的想见阿 Q, <u>Φ</u> 缺绸裙的想问他买绸裙, …	そこで <u>彼等</u> は眼を皿のようにして阿 Q を見た。絹袴が無い時には、 <u>Φ</u> 絹袴の出物は無いかと彼に訊ねてみたかった。	《阿》	○ s
134	因为 <u>邹七嫂</u> 得意之余,将 <u>伊</u> 的绸裙请 <u>赵太太</u> 去鉴赏, <u>赵太太</u> 又告诉了 <u>赵太爷</u> 而且着实恭维了一番.	<u>邹七嫂</u> は嬉しさの余り彼の絹袴を <u>趙太太</u> の処へ持って行ってお目利きをねがった。 <u>趙太太</u> はまたこれを <u>趙太爺</u> に告げて一時すこぶる真面目になって話をしたので、 <u>趙太爺</u> は晩餐の卓上秀才太爺(息子)と討論した。	《阿》	○ s
135	只有一班闲人们却还要	閑人の中には <u>阿 Q</u> の奥底を根掘り	《阿》	○

	<p>寻究底的去探<u>阿 Q</u> 的底细. <u>阿 Q</u> 也并不讳饰, 傲然的说出他的经验来.</p>	<p>葉掘り探究する者があつた。<u>阿 Q</u> は包まず隠さず自慢らしく彼の経験談をはなした。</p>		
136	<p>他不过是一个小脚色, <u>Φ</u> 不但不能上墙, 并且不能进洞, …</p>	<p><u>阿 Q</u> は小さな馬の脚に過ぎなかった。<u>彼は</u>垣の上にあがることも出来なければ、洞の中に潜ることも出来なかった。</p>	《阿》	× s
137	<p>有一夜, 他刚才接到一个包, 正手再进去, 不一会, 只听得里面大嚷起来, 他便赶紧跑, 连夜爬出城, 逃回未庄来了, …</p>	<p>ある晩<u>彼は</u>一つの包みを受取って相棒がもう一度入ると、まもなく中で大騒ぎが始まった。<u>彼は</u>おぞけをふるって逃げ出し、夜どおし歩いて終に城壁を乗り越え未荘に帰って来た。</p>	《阿》	○ s
138	<p>三更四点, 有一只大<u>乌篷船</u>到了赵府上的河埠头. <u>这船</u>从黑魃魃中荡来, …</p>	<p>真夜中過ぎに一つの大きなくろとまの<u>船が</u>趙屋敷の河添いの埠頭に著いた。<u>この船は</u>黒暗の中に揺られて来た。</p>	《阿》	○
139	<p><u>阿 Q</u> 近来用度窘, 大约略略有些不平; <u>Φ</u> 加以午间喝了两碗空肚酒, 愈加醉得快, …</p>	<p><u>阿 Q</u> は近来生活の費用にくるしみ内々かなりの不平があつた。<u>Φ</u> おまけに昼間飲んだ空き腹の二杯の酒が、廻れば廻るほど愉快になった。</p>	《阿》	○
140	<p>一见之下, 又使他舒服得如六月里喝了雪水. 他更加高兴的走而且喊道:</p>	<p>ちょっと見たばかりで<u>彼は</u>六月氷を飲んだようにせいせいした。<u>彼は</u>いっそう元気づいて歩きながら怒鳴った。</p>	《阿》	○
141	<p><u>赵太爷父子</u>回家, 晚上商量到点灯. <u>赵白眼</u>回家, 便从腰见扯下搭连来, 交给他女人藏在箱底里.</p>	<p><u>趙家の親子は</u>家に入って灯ともしごろまで相談した。<u>趙白眼も</u>家帰るとすぐに腰のまわりの搭連をほどいて女房に渡し、箱の中に藏めた。</p>	《阿》	○
142	<p>这晚上, 管祠的老头子也意外的和气, 请他喝茶; <u>阿 Q</u> 便向他要了两个饼, 吃完之后, 又要了一支点过的四两烛台, 点起来,</p>	<p>その晩、廟祝の親父も意外の親しみをを見せて<u>阿 Q</u> にお茶を薦めた。<u>阿 Q</u> は彼に二枚の煎餅をねだり、食べてしまうと四十匁蠟燭の剩り物を求めて燭台を借りて火を移</p>	《阿》	○

	独自躺在自己的小屋里.	し、自分の小部屋へ持って行ってひとり寝た。		
143	第二天 <u>他</u> 起得很迟, 走出街上看时, 样样都照旧. <u>他</u> 也仍然肚饿, …	次日 <u>彼は</u> 遅く起きて往来に出てみたが、何もかも元の通りであった。 <u>彼は</u> やっぱり肚が耗っていた。	《阿》	○
144	<u>他</u> 想着, 想不起什么来; 但 <u>他</u> 忽而似乎有了主意了, 慢慢的跨开步, 有意无意的走到静休庵.	<u>彼は</u> 何か想っていながら思い出すことが出来なかった。 <u>㊦</u> たちまち何かきまりがついたような風で、のそりのそりと大跨に歩き出した。	《阿》	×
145	他颇悔自己睡着, 但也深怪他们不来招呼 <u>他</u> . <u>他</u> 又退一步想道:	それにしても彼等が <u>阿Q</u> を誘わなかったのは奇ッ怪千万である。 <u>阿Q</u> は一步退いて考えた。	《阿》	○
146	<u>阿Q</u> 听到了很羡慕. <u>他</u> 虽然早知道秀才盘辫的大新闻, 但总没有想到自己可以照样做, …	<u>阿Q</u> は非常に羨しく思った。 <u>彼は</u> とうから秀才が辮子をわがねたというニウスを聞いていたが、自分がその様な事をしていいかという事について少しも思い及ばなかった。	《阿》	○
147	<u>阿Q</u> 当初很不快, 后来便很不平. <u>他</u> 近来很容易闹脾气了;	<u>阿Q</u> は初め不快に感じてあとになるとだんだん不平が高じて来た。 <u>彼は</u> 近頃怒りッぽくなった。	《阿》	○
148	况且有一回看见 <u>小D</u> , 愈使他气破肚皮了. <u>小D</u> 也将辮子盘在头顶上了, …	そうして一度 <u>小D</u> を見るといよいよ彼の肚の皮が爆発した。 <u>小D</u> もまた頭の上に辮子をわがねた。	《阿》	○
149	<u>阿Q</u> 正在不平, 又时时刻刻感着冷落, 一听得这银桃子的传说, <u>他</u> 立即悟出自己之所以冷落的原因了:	<u>阿Q</u> は不平の真最中に時々零落を感じた。銀メダル話を聴くと <u>彼は</u> すぐに零落の真因を悟った。	《阿》	○ s
150	<u>他</u> 似乎从来没有经验过这样的无聊. <u>他</u> 对于自己的盘辮子, 仿佛也觉得无意味, 要侮蔑: 为报酬起	<u>彼は</u> このような所在なさを感じたことは今まで無いように覚えた。 <u>彼は</u> 自分の辮子を環ねたことについて無意味に感じたらしく、侮蔑	《阿》	○

	見,很想立刻放下辮子来,但也没有竟放.	をしなくなって復讐の考えから、立ちどころに辮子を解きおろそうとしたが、それもまた遂にそのままにしておいた。		
151	<u>他</u> 忽而听得一种异样的声音,又不是爆竹. <u>阿Q</u> 本来是爱看热闹,爱管闲事的,便在暗中直寻过去. 似乎前面有些脚步声;	<u>彼は</u> たちまち一種異様な音声をきいたが爆竹では無かった。 <u>彼は</u> 賑やかな事が好きで、下らぬことに手出しをしたがる質だから、すぐに暗の中を探て行くと、前の方にいささか足音がするようであった。	《阿》	○
152	<u>他</u> 正听,猛然间一个人从对面逃来了. <u>阿Q</u> 一看,便赶紧翻身跟着逃.	<u>彼は</u> 聞耳立てていると、いきなり一人の男が向うから逃げて来た。 <u>彼は</u> それを見るとすぐに跡に跟着馳け出した。	《阿》	○
153	拾得 <u>他</u> 自己有些不信他的眼睛了. 但 <u>他</u> 决计不再上前,却回到自己的祠里去了.	持ち出したと言っても、 <u>彼は</u> 自分でいささか自分の眼を信じなかった。 <u>Φ</u> それでも一步前へ出ようとはせず、結局自分の廟の中に帰って来た。	《阿》	×
154	许多时没有动静,把总焦急起来了,悬了二十千的赏,才有两个团丁冒了险,踰垣进去,里应外合,一拥而入,将 <u>阿Q</u> 抓出来;直待擒出祠外面的机关枪左近, <u>他</u> 才有些清醒了.	しばらくの間、様子が皆目知れないので、彼等は焦らずにはいらなかった。そこで二万錢の賞金を懸けて二人の自衛団が危険を冒してやっそこさと垣根を越えて、内外相応じて一斉に闖入し、 <u>阿Q</u> を抓み出しておみやの外の機関銃の左側に引据えた。その時 <u>彼は</u> ようやくハッキリ眼が醒めた。	《阿》	○
155	<u>阿Q</u> 见自己被搀进一所破衙门,转了五六个弯,便推在一间小屋里. <u>他</u> 刚刚一踉跄,那用整株的木料做成的栅栏门便跟着他的脚跟阖上了,	<u>阿Q</u> は自分で自分を見ると、壊れかかったお役所の中に引廻され、五六遍曲ると一つの小屋があって、 <u>彼は</u> その中へ押し込められた。 <u>彼は</u> ちょっとよろけたばかりで、丸太を整列した門が彼の後ろを閉じた。	《阿》	○

156	都是一脸横肉,怒目而视的看他;他便知道这人一定有些来历,膝关节立刻自然而然的宽松,便跪下去了.	彼等は皆同じような仏頂面で目を怒らして <u>阿Q</u> を見た。 <u>阿Q</u> はこりゃあきっとお歴々に違いないと思ったから、膝の関節が自然と弛んでべたりと地べたに膝をついた。	《阿》	○
157	<u>阿Q</u> 虽然似乎懂得,但总决得站不住,Φ身不由己的蹲了下去,而且终于趁势改为跪下了.	<u>阿Q</u> は承知はしているが、どうしても立っていることが出来ない。Φ我れ知らず身体が縮こまってその勢いに押されて揚句の果ては膝を突いてしまう。	《阿》	○ s
158	大堂的情形都照旧.上面仍然坐着光头的老头子,阿Q也仍然下了跪.老头子和气的问道,“你还有什么话要说么?”	大広間の模様は皆もとの通りで、上座には、やはりくりくり坊主の <u>親爺</u> が坐して、阿Qは相変らず膝を突いていた。 <u>親爺</u> はしんみりときいた。「お前はほかに何か言うことがあるか」	《阿》	○
159	<u>阿Q</u> 要画圆圈了,那手捏着笔却只是抖.于是那人替他將紙鋪在地上,阿Q伏下去,使尽了平生的力画圆圈.	<u>阿Q</u> は丸を書こうとしたが筆を持つ手が顫えた。そこでその人は彼のために紙を地上に敷いてやり、 <u>阿Q</u> はうつぶしになって一生懸命に丸を書いた。	《阿》	○
160	他第二次进了栅栏,倒也并不十分懊恼.他以为…	彼は丸太格子の中に入れられても格別大して苦にもしなかった。彼はそう思った。	《阿》	○
161	举人老爷主张第一要捉脏,把总主张第一要示众。把总近来很不将举人老爷放在眼里了, …	举人老爺は贓品の追徴が何よりも肝腎だと言った、 <u>少尉殿</u> はまず第一に見せしめをすべしと言った。 <u>少尉殿</u> は近頃一向举人老爺を眼中に置かなかった。	《阿》	○
162	他一急,两眼发黑,耳朵里啍的一声,似乎发昏了.然而他又没有全发昏, …	彼はそう思うと心が顛倒して二つの眼が暗くなり、耳朵の中がガンとした。氣絶をしたようでもあったが、しかしΦ全く氣を失ったわけではない。	《阿》	×
163	他还认得路,于是Φ有些	彼はまた見覚えのある路を見た。	《阿》	○ s



	诧异了:	<u>Φ</u> そこで少々変に思った。		
164	阿Q突然很羞愧自己没有志气; <u>Φ</u> 竟没有唱几句戏.	<u>彼は</u> たちまち非常な羞恥を感じて我れながら気が滅入ってしまった。つまり <u>Φ</u> あの芝居の歌を唱う勇気がないのだ。	《阿》	○
165	…要吃 <u>他的</u> 肉。 <u>他</u> 那时吓得几乎要死, …	狼は附かず離れず跟いて来て <u>彼の</u> 肉を食おうと思った。 <u>彼は</u> その時全く生きている空は無かった。	《阿》	○
166	<u>外面的短衣主顾</u> ,虽然容易说话,但唠唠叨叨缠夹不清的也很不少。 <u>他们</u> 往往要亲眼看着黄酒从坛子舀出, …	<u>店先の袷天著は</u> 取付き易いが、わけのわからぬことをくどくどしゃべり、漆濃く絡みつく奴が少ない。 <u>彼等は</u> 人の手許をじろりと見たがる癖がある。	《孔》	○
167	<u>孔乙己</u> 是站着喝酒而穿长衫的唯一的人。 <u>他</u> 身材很高大;青白脸色,皱纹间时常夹些伤痕;一部乱蓬蓬的花白的胡子。 <u>Φ</u> 穿的虽然是长衫,可是又脏又破,似乎十多年没有补,也没有洗。	<u>孔乙己</u> は立飲みの方でありながら長衫を著た唯一の人であった。 <u>彼は</u> 身の長けがはなはだ高く、顔色が青白く、皺の間にいつも傷痕が交っていて胡麻塩鬚がぼうぼうと生えていた。 <u>Φ</u> 著物は汚れ腐って、ツギハギもせず洗濯もせず、十何年も一つものでおっとおしているようだ。	《孔》	○
168	听人家背地里谈论, <u>孔乙己</u> 原来也读过书,但终于没有进学,又不会营生;于是愈过愈穷,弄到将要讨饭了。幸而写得一笔好字,边替人家抄抄书,换一碗饭吃。可惜 <u>他</u> 又有一样坏脾气,便是好喝懒做。坐不到几天,便连人和书籍纸张笔砚,一齐失踪。	人の噂では、 <u>孔乙己</u> は書物をたくさん読んだ人だが、学校に入りそこない、無職で暮しているうちにだんだん貧乏して、乞食になりかかったが、幸いに手すじがよく字が旨く書けたので、あちこちで書物の浄写を頼まれ、飯の種にありつくことが出来た。ところが <u>彼には</u> 一つの悪い癖があつて、酒が大好きで飲みだすと怠け出し、注文主も書物も紙も何もかも、たちまちの中に無くしてしまう。	《孔》	○ p l
169	在这些时候,我可以附和着笑,掌柜是决不责备的。	この場合わたしが一緒になって笑っても番頭さんは決して咎めない	《孔》	○ s

	而且掌柜见了孔乙己,也每每这样问他,引人发笑。 <u>孔乙己</u> 自己知道不能和他们谈天, <u>Φ</u> 便只好向孩子说话。	し、その上番頭さん自身がいつもこういう問題を持出し、人の笑いを誘い出すので、 <u>孔乙己</u> は仲間外れになるより仕方がない。そういう時には <u>Φ</u> いつも子供を相手にして話しかける。		
170	<u>我</u> 暗想我和掌柜的等级还很远呢,而且我们掌柜也从不将茴香豆上账; <u>Φ</u> 又好笑,又不耐烦,懒懒的答他道:“谁叫你教,不是草头底下一个来回的回字么?”	<u>わたし</u> が番頭さんになるのはいつのことやら、ずいぶん先きの先きの話で、その上、内の番頭さんは茴香豆という字を記入したことがない。 <u>Φ</u> そう思うと馬鹿々々しくなって「そんなことを誰がお前に教えてくれと言った。草冠の下に回数の回の字だ」	《孔》	○
171	看时又全没有人。站起来向外一望,那 <u>孔乙己</u> 便在柜台下对了门槛坐着。 <u>他</u> 脸上黑而且瘦,已经不成样子了;穿一件破夹袄,盘着两腿,下面垫一个蒲包,用草绳在肩上挂住;…	伸び上って見ると櫃台の下の闕の上に <u>孔乙己</u> が坐っている。 <u>Φ</u> 顔が瘠せて黒くなり何とも言われぬみすばらしい風体で、破れ袷一枚著て両膝を曲げ、腰にアンペラを敷いて、肩から縄で吊りかけてある。	《孔》	×
172	我温了酒,端出去,放在门槛上。 <u>他</u> 从破衣袋里摸出四文大钱,放在我手里,见他满手是泥,原来他便用这手走来的.不一会, <u>他</u> 喝完酒,便又在旁人的说笑声中,坐着用这手慢慢走去了.	わたしは爛した酒を運び出し、闕の上に置くと、 <u>彼は</u> 破れたポケットの中から四文銭を掴み出した。その手を見ると泥だらけで、足で歩いて来たとは思われないが、果してその通りで、 <u>彼は</u> みな笑いの声の中に酒を飲み干してしまうと、たちまち手を支えて這い出した。	《孔》	× p 1